

哀哭の代紋

檻の中の二人

抜ける様な青空の下、無邪気な歓声の上がるグラウンドの中を幼い女の子達がゴールに向かって無心に駆けていた。

亜紀の捧げ持つ家庭用の小型ビデオカメラの液晶画面には、ついこの間録画してきたばかりの小学校の運動会の様子が映し出されていた。

そのカメラの小さな液晶画面をお竜と暁美が鉄格子を握り締め、食い入る様に見詰めていた。

成長した我が子が、クラス対抗リレーの選手に選ばれて校庭を駆ける様子が映し出されていたのだった。

暁美の産んだ愛美（まなみ）とお竜の産んだ希美（のぞみ）と晴江の産んだ栄美（エイミィ）は、剛沢を父と思い亜紀を母と信じて、二人の間で育てられ、同じ小学校に上がっていたのであった。

亜紀は、運動会や文化祭や遠足やその他学校の行事がある度に三人の様子をビデオに収めて、大亜門戸会の本部の地下に設けられた牢舎に幽閉された女達の所まで見せに来るのであった。

かつて、奈和親分と女達の4人を閉じ込めていた地下の牢舎には、今は暁美とお竜の二人しかいなかった。

荒淫で卵管が炎症を起こし、不妊体質となっていた晴江を剛沢の命令を受けた和久井が体外受精により妊娠させることに成功したが、難産になるという和久井の反対を押し切り、出産ショーに無理矢理引きずり出し、変態客の男達の好奇の視線の中で苦しみ抜いた末に、漸く娘を出産することは出来たが、その後の容態が悪く、暫く後に死んでしまったのであった。

そして、その後何故か奈和親分も晴江の後を追うように死去してしまっていた。

二人の居なくなった牢屋には、時々借金で首が回らなくなったと思われる女を暁美達と同じような技倆を持った娼婦に調教するため閉じ込められる事があったが、長くは居ずに皆

何処かに連れ去られていった。

一度剛沢の怒りを買ったのか、或ヤクザの組の親分の家族が閉じ込められた事があったが、親分とその妻と息子と娘の家族全員、剛沢から筆舌に尽くしがたい酸鼻な責めを散々受けた後、何処かに連れ去られてしまっていた。

それから長い間、二人しか居なくなった地下の牢舎に暁美とお竜が一枚の壁を隔てて収容されているのであった。

晴江と奈和親分が居なくなった以外にも、その後多くの事が変わっていた。

あの裏切り者の黄原の姿が何時の間にか消えていたのだった。

噂では銀子に横恋慕した剛沢が銀子を黄原から奪うため、黄原に罠を掛けて、今黄原は何処かの刑務所に服役しているとの事で在った。

剛沢との間に信頼で結ばれていると思った黄原であったが、女の事で剛沢からあっさり裏切られるとは意外であった。

そして、その黄原の後を襲うように、今は青山という若い男が、かつての黄原の様に剛沢の知恵袋として、剛沢の傍に待るようになっていた。

ところで、三人の娘の内、暁美の産んだ愛美の実の父親は奈和親分であることは遺伝子の検査で判っていた。

不妊症になっていた晴江は体外受精により栄美を産んだが、体外受精の手術を担当した和久井によると、金銭で提供して貰った身元の良く分からないラテン系の美青年の精子を使ったと言っていた。そのため栄美は日本人とは違うハーフ特有のエキゾチックな風貌を醸し出していた。

従って、二人の娘の父親は判っていたが、一方お竜の産んだ希美の父親が誰であるかは誰も知らなかった。

お竜自身も昼夜を別たず余りにも多くの男が自分の身体の上を通り過ぎて行っただけで、誰が希美の実の父か思い浮かべることは出来なかった。

客と交わる度に客が膣内に残した精子の採取を強制している剛沢は、希美の実の父が誰かは知っているはずであったが、忌まわしい記憶しかないお竜には、誰の子か知りたいとも思わなかった。

ただ自分の胎の中で10ヶ月間育て、産みの苦しみの末生まれた我が子がこの世で一人だ

けの分身として愛おしかった。

亜紀は暁美とお竜を閉じ込めた二つの檻の間の仕切り壁の前に腰を降ろして、ビデオカメラを捧げ持っているのであるが、二人は少しでも我が子の様子を良く見ようとして、コンクリートの壁に頬を押し付け、額を冷たい鉄格子に押し当てて、目を凝らしてクラスの女の子の黄色い声援を受けて一生懸命走る我が子の姿を食い入るように見続けているのであった。

一心不乱に小さな液晶画面を注視し続ける二人であったが、ビデオカメラを持つ亜紀の目には二人が空いた手で自らの股間をまさぐっている様子が映った。

恐らく二人とも自分では気付いていないのだろうが、眼を細めて我が子の様子を見詰めながらも、無意識の内に自らの性器を愛撫し、二本の指先を肉の空洞の中に差し入れ周囲をかき回し、ピチャピチャと音をさせて粘液を溢れさせているのであった。

最早二人には、ヤクザの組のトップに居たという気概は完全に消え失せ、長い娼婦体験の間に今や完全なセックス中毒状態に陥り、寸時も股間からの刺激を受けていなければ、いられない身体に改造されてしまった事が理解出来た。

今から十年以上も前にこの女達が大亜門戸会の手に落ちた時には、剛沢や大亜門戸会の手下達と一緒に面白がって、この女達に性的拷問を加えたものであったが、この天使のような穢れ無き子供達の母親が、この様な性の飢餓地獄に墜ちた様子を見ると、思わず慚愧の念を感じるのであった。

特に暁美はその当時は抜ける様に白い身体をしていたが、今は自らに呪いを掛けるように、全身に隈無く毒々しい色彩を帯びた刺青を入れていた。

母親の命日が来る度に、まるで母親の無捻を自らの身体に刻みつける様に、少しずつ彫り込んでいったものであるが、最早身体の中で白く残された部分は少なくなっていた。

「全く、最初にこの子たちを剛沢から世話するようと言われた時には、面倒な物を押し付けられたと思ったもんさ。夜泣きして真夜中に起こされた時は本当に腹が立ったものさ・・・だけど毎日ミルクを湧かせて飲ましたり、オムツを替えたり、離乳食を食べさせたり、日に日に大きくなって行く姿を見続ける内に、・・・不思議なもんだね・・・この子たちが自分が産んだ子供達の様になくなって来てね・・・私も女だったのかね。」

と、ビデオを見せながら子供達と過ごした日々を思い出したのか一人呟く様に言った。

「・・・血は水より濃いと云うけど、毎日接していると水だって血よりも濃くなるもんさ・・・」
子供達の成長を思い出しながら目を細めて呟く亜紀に、自らの手で我が子を育てる事の出来ない暁美とお竜は、宜しく願いますと頭を下げるのだった。

「その代わり、この子達は上流家庭の女の子が通う名門の女子校に通っているんだから、大変なお金が掛かるんだよ。だから、あんた達もしっかりと稼がないと駄目だよ！」

亜紀の言葉にお竜も暁美も、ハイ！と、応えるのであった。

三人の子供達は幼稚園から小中高、大学まで備えた私立の名門女子校に通っており、順調に行けば、世の中の何の苦勞も受けることなく大学まで卒業出来るはずであった。

毎年複利で掛かる利息によって借金の額は最早返済不能な程膨大な額に膨れあがっており、二人には最早一生ここから抜け出せる目処は立たなくなっていたが、毎日身を粉にして男に身体を売れば、子供達の学費ぐらいは稼ぎ出せる筈であった。

もし、万一此所から出られる事があっても、今更、この様な穢れた身で子供達に親だと名告って会うことも出来ず、せめて子供達だけでも陽の当たる世界で成長してくれれば、これ以上の望みは無かった。

「剛沢もお前達の娘を可愛がっているし、もしかして、この子達が大きく成ったら、お前達みたいに男を取らせようとするかも知れないけど、安心おし！私が指一本触れさせないよ！」

二人には、あの残酷な剛沢が何時までも自分の実の娘の様に三人を可愛がるとは思えなかった。

何時か真実を明かして、娘達を娼婦に墮とすのでは無いかと何時も不安に感じていたのだった。

剛沢は常に三人程の愛人を身近に侍らせ、その内二人は若い女で、その顔ぶれは、これまでに何度も代わっているが、亜紀だけは代わることなく、剛沢の夜の相手を務めるだけでなく、若い愛人同士が諍いを起こさないよう筆頭の愛人として取り纏める立場に居た。

結婚した事の無い剛沢の本当の妻のように、剛沢の身の回りの世話を焼く亜紀なら剛沢のそのような恐ろしい考えを拒絶して、子供達を護ってくれるのでは無いかと、一縷の望みを持って、「宜しく願います！」と、鉄格子の向こうの亜紀に深々と頭を下げるのであった。

「おい！もう客の来る時間だ！準備をするんだ！」と、ガチャガチャと牢舎の鍵を開けて男達が入って来た。

亜紀の持って来たビデオを見て、子供達の様子を聞く内に、何時の間にか客を取る時間となっていた。

牢舎の中に入って来た男達の目に亜紀と向かい合っ腰を落とす曉美とお竜の姿が映ったが、目敏く右手で自らの秘裂を慰める二人の様子を見留めた。

男達から命じられて狭くて低い檻の入り口を腰を屈めて出て来る二人の無毛の股間を注視して、卑猥な笑い声を上げた。

長年の娼婦生活の間に鍛えられ、絶え間なく何人もの男のモノを咥え入れ無数の性具を挿入され続け、変形し肥大化した陰唇の周囲がねっとりした愛液に塗されテカテカと輝いていた。

確認するように股の間に指を差し入れたが、何時もの事と、突然男達から指で秘所をまさぐられても曉美もお竜も抵抗を見せなかった。

男達は剥き出しの秘裂を濡らす粘液を指先に掬い取り、

「お前達！亜紀姐さんからポルノビデオでも見せて貰っていたのか？オナニーしてベチャベチャじゃないか！全くお前達もスケベな女に成り下がったもんだぜ！まるで盛りの付いた雌犬じゃないか！こんなにオ███を濡らしやがってよ！客に入れて貰うのが待ち遠しくて仕方無かったんだろう？全くお前達は良いよな、大好きなチンポを思い切り入れて貰えて、その上お金まで貰えるんだから・・・」

と、客の前に出るため身支度をする女達を揶揄するのであった。

男達に囲まれて、客の前に引き連れられて行く二人に、亜紀は、ふと憐憫の情を感じて「この児たちの為にも頑張るんだよ！」と、思わず声を掛けるのであった。

かつては、目高組に恨みを抱く男や娼婦に墜ちたヤクザ組織のトップに居た女に興味を持った好色の金満家が引きも切らず押し寄せたものであるが、今は一巡し客の数は随分と減っていた。

衰えた客足を昔の様に呼び戻すため、アメリカから巨根のポルノ男優を連れて来て、客の前で絡みを演じさせる計画を立てている事を亜紀は剛沢から聞かされた事があった。

二人はまだ知らないが、残忍な剛沢の魔手によって、この後も絶える事の無い苦難に苛まされ続けるのだらうと、男達に取り囲まれて牢舎から連れ出されて行く、二人の後ろ姿を見送りながら、哀れさを覚えるのであった。

今回二人を買った客は、今田と云うノミ屋をやっている兄弟であった。

自ら胴元となって公営ギャンブルにただ乗りする形で客から掛金を集めたり、野球賭博や諸々のスポーツをネタに荒稼ぎしている男達であった。

そんな泡銭の様な金を手にして、最近良く曉美達を買いに訪れる様になっていた。

今田兄弟は何時もお竜と曉美を同時に指名し、兄弟揃って4Pプレーをするのが好きな男達であった。

二人とも性格が似ており、来る度に変態的性交を好むのであった。

二人のゲスな男の前に引き出されたお竜は何時もの様に着物姿であり、曉美もかつて母親の晴江が袖を通していた着物を身に纏っていた。

曉美の場合スリットが腰近くまで通ったチャイナドレスを着ることが多いが、お竜と一緒に呼ばれる時は、お竜に併せて着物を着ることもあった。

兄弟は二人に着物の裾を捲って秘所を露わにする様に命じた。

客の命令には逆らえず、二人は着物の裾を開いて高く捲り上げ、無毛の亀裂を目を血走らせて見詰める兄弟の前に晒した。

二人の目にふくよかな股間の様子とレーザーにより毛根を焼かれ二度と生えてこないスベスベした淫裂が生々しく映っていた。

直立する曉美とお竜の前に胡座をかいた兄弟は間近から股間の佇まいを観察して、何時も自分達に得も知れぬ快感をもたらす極上の肉の谷間を見詰めてゴクリと生唾を飲み込んだ。二人の女は無言のままの見詰める兄弟の発する淫猥な気配を感じて、これから受けるであろう汚辱と苦痛に満ちた倒錯的な快感をまるで心待ちするかの様に、兄弟の目の前でジワジワと秘裂を濡らすのであった。

自らの指先で大きく左右に押し開く様に命じて、外気に向かって解放された秘密の花園に鼻先を押し当てるように間近から生々しい媚肉の構造に目を凝らし、その最奥から湧き出るように愛液の染み出す様子をシゲシゲと観察していた兄弟は、満足したように二人に裸になるように命じた。

衣擦れの音をさせて帯を緩め、身に着けている物を一枚一枚脱いでいく曉美とお竜の様子を酒を嘗めながら薄笑いを浮かべて兄弟は好色な目で見詰め続けた。

兄弟の肉欲に濁った目に、右腕に昇り龍の彫り物と左腕に下り竜の彫り物を入れたお竜の

熟した豊満な白い身体と極彩色の刺青を全身に彫り込んだ暁美の姿が映った。

年齢も四十代を迎え、美熟女とか美魔女との形容がピッタリするお竜の爛熟した容姿に先ず兄弟の視線が行った。

剛沢の指示で常に全身美容に気を配られ、無駄肉や体の崩れは全く無く、腹回りは艶美にくびれ、手足は細くて長く、まるで二十代の女性の様な張りのある身体の線を維持していた。

柔らかく垂れた乳房や、しなやかな柔肉を纏った身体は、シミ一つ無く雪のように白い滑らかな肌に覆われていた。

かつて男勝りの女侠客の名声を誇り、思わず男がたじろぐような強い性格が滲み出ていた精悍な美貌も、長い間男の肉欲を受け入れる間に捏ね上げられ磨き上げられ、男心を驚掴みにするようなゾッとするような艶麗な色香が容姿から滴り落ちていた。

一方暁美の方も剛沢に捉えられた当時は、二十代になったばかりで若々しく、グラビアモデルが務まりそうな華やいだ容姿を持っていたが、今は女としての成熟期を迎え、全身から熟れた女の色香が立ち昇っていた。

捉えられた当時は、幼さも残っていた顔も娼婦として過ごす間に削げ落ち、艶美な容貌をたたえる様に成長し、男の気を引くように華麗に仕上げられた化粧も相まって、兄弟は男の目を引き付けて止まない暁美の容貌にじっと見惚れた。

長年に渡って注ぎ込まれた男の精が、肉となり脂肪となって全身に纏わりついたように、思わずゾクッとするような、若い女には在り得ないような妖美な体の線を形作っていた。お竜と同じように常に全身美容を施され、身体の崩れは全く無いが、元々大きかった乳房は、男達から揉みしだかれる間に一層大きく成長に重そうに前に突き出していた。

その大きな乳房の全面にも身体全体にも鮮やかな刺青が彫り込まれていた。地肌の白さが極彩色の刺青の赤や緑の原色を引き立てていた。

そんな毒々しい刺青に覆われた身体であったが、まだ両脚の付け根の辺りには刺青は彫り込まれておらず、まるで童女のようにくっきりとした亀裂を晒し、淫靡なコントラストを形造っていた。

極彩色に彩られた暁美の巨大な乳房とお竜の熟れた柔らかそうな白い乳房が、赤い腰巻きを身に残したただけの裸身に強調されて映った。

最後に残された腰巻きがはらりと畳の上に落ちて、すっかり衣類を失った女達は兄弟の淫

猥な視線から護る様に、股間と乳房を両手で隠した。

男心を憐る様な、そんな恥じらいの姿勢を示す女達に、兄弟は立ち上がると、めいめい麻縄を手にして近づいた。

もちろん客の劣意を誘うための恥じらいの演技であるが、恥ずかしそうに秘裂と胸を隠す両手をか弱い抵抗を押しつけて背中にねじり回すと、手にしていた麻縄で後ろ手に縛り上げた。

こうして、羞恥の部分を隠す事も出来なくなり、変態的な兄弟の前に立ちつくす二人に、
「今日はこれを着けて貰おうか・・・」

兄弟が含み笑い浮かべると、手にしていた紙袋からキラキラ輝る金色にメッキの施された金属製の貞操帯を取り出し二人に見せ付けた。

その淫猥な形状の金属板を組み合わせたベルトを見て暁美もお竜もハッと驚きを浮かべた。それは、かつて女達の下腹周りを精密に計測して特別に誂えた貞操帯であった。

「ほら、もっと股を開かないか！・・・腰をもっと前に突き出すんだ！」

と、女達の尻を叩いたり、大腿に手を掛けてむりやり股間を大きく開かせ、蝶番で繋がれた金属板のベルトを股間に潜らせた。

女達の腰回りに合わせて作られた貞操帯は、ピッチリと隙間無く秘部に密着した。

それぞれの女の秘丘の形に合わせて整形されたスプーンの様に丸みを帯びた表面に男達の劣情を帯びた顔が変形して映った。

兄弟はイソイソと二人の腰に取り付け、緩み無く固定された事を確認すると、留め具の上からカチャリと錠前を掛けた。

鏡の様に磨き上げられた金属板が下腹を覆う二人の女の淫靡な姿に、満足した様に肯くと、畳の上に敷かれた布団の上に横になるように命じた。

兄弟が自分たちの肉体を味あう前の前菜として二人のレズビアンショーを楽しもうとしている事が明らかであった。

兄弟の意図を理解して、布団の上に仰向け横たわった暁美の上にお竜が体を被せていった。暁美の唇の上に自らの唇を重ねたお竜が、相手の唇の柔らかさを確かめる様にゆっくりと口唇を蠢かせた。

かつては母から父を奪った憎い女として、お竜の事を憎悪していた事もあったが、今は過酷な環境を分かち合う二人として、実の姉妹の様に、あるいは実の恋人同士の様に互いを愛しみ合うようになっていた。

お竜の差し入れる舌先に自らの舌先を積極的に絡め合わせ互いの唾液を吸い合った。

互いの愛技に没入することにより過酷な現実を忘我する為に、互いの口を吸い合うことから入った愛技であったが、互いの柔らかな裸体をクネクネと擦りつけ合い、頬を擦り合わせる間に、男達の卑猥な視線も気にならなくなり、互いの愛を確かめ合う恋人同士の様に後ろ手に縛られた不自由な身体を蠢かせるのであった。

頬を紅潮させ、全身にも赤みが差して来たことから、二人の女が本当に性的興奮を感じている事は明らかであった。

仰向けに横たわる暁美の上に身体を浴びせたお竜が、暁美の乳房をほおぼるように口に含んだ。

突然のお竜の行動に暁美がアッと声を上げて身悶えた。

そんな暁美の身悶えを楽しむ様に、お竜は左右の乳房を交互に口に含み、舌先で乳暈を嘗め回し乳首を強く吸い上げた。

暁美の身悶えに興奮を掻き揚げられたお竜は、「お願い！お竜のオッパイを吸って！」と、横たわる暁美の眼前に乳房を差し出した。

すっかり性的興奮状態に陥った暁美は顔を起こして、激しく舌先を蠢かせ、次に口を大きく開いて、お竜の突き出した撓わな乳房をむさぼった。

濃密なレズビアン愛の愛技により、豊満で柔らかな乳房の先端の濃いピンク色した乳首が固く突き出してくる様子を、酒を含みながら兄弟がニヤニヤと笑みを浮かべながら見詰めていた。

お竜と暁美は互いに身内から込み上げて来た性欲を満たすように、硬く凝った乳首を絡め合った。

「アアーッ！もどかしいわ！」

お竜が咽ぶような声を上げた。

普段なら、男の視線も忘れて大腿を大きく開いて互いに柔らかな秘奥を擦り併せて互いの肉欲を満たす所であるが、今は金属の貞操帯を嵌められてるため、薄い鉄板がぶつかり合いカチカチと金属音を立てるだけであった。

ほんの1ミリ程の厚さの鉄板に遮られ、内奥から込み上げる肉欲を満たす事が出来ない悔しさに、二人ともヒステリックな泣き声とも呻き声とも知れない声を発していた。

薄い金属板の裏ではドクドクと熱い愛液が溢れ出し、貞操帯の隙間から流れ出して大腿を艶々と濡らす様子を兄弟は酒を嘗めながら卑猥な視線を浮かべて見詰めていた。

「アアーッ！曉美！お願い！お竜のお尻の穴を嘗めて！」

「判ったわ、お姉さん！」

かつての憎しみも立場の違いも忘れて、羞恥と苦難を共にする内に真の恋人同士の様な関係になっていた曉美はお竜の必死の声に自分も必死になって応えた。

二人は後ろ手に縛られた不自由な身体を布団の上で蠢かせて、互いに頭を逆にする様な形で横向きに横たわり、互いの股間に頭を差し入れた。

二人は脚を深く折り曲げ、大腿で互いの頭を挟み着ける姿勢となった。

貞操帯の尻穴の丁度真上の部分はまるで眼鏡の縁の様に丸く開いており、その直下では肛門が剥き出しとなっていた。

淫靡な刺青を施されたその部分が、まるで金属の丸い額縁で縁取られた一点の絵画のように妖しく互いの目に映った。

それは長年の間に鍛えられた、単なる排泄器官を超越した、得も言われぬ快感をもたらすもう一つの秘孔であった。

曉美の目の前には、興奮して熱を帯びたお竜の可憐な小菊が開陳していた。

満たされぬ肉欲にその肉孔がピクピクと小刻みに閉じたり開いたりを繰り返していた。

そのピクピクと蠢く充血した軟体動物の口腔を連想させるお竜の排泄器官を見つめる内に愛おしさが込み上げて来た曉美は、憑かれた様に口付けをした。

もう一つの性感帯として銀子から鍛え上げられた箇所に曉美の柔らかな唇を感じてお竜がウッと呻き声を上げて、身体を仰け反らした。

お竜が反射的に身体を反らすのに追従するように、曉美はピッタリとお竜の菊花に唇を押し当てたまま、その陰口に舌先を伸ばし、中心から放射状に延びた皺を一本一本伸ばす様に嘗め上げた。

お竜の興奮状態に煽られた様に、曉美は舌先を伸ばすとその貞操帯に丸く開けられた穴からお竜の後門に舌先をズルッと差し入れた。

体内から熱く滾^{たぎ}ったマグマのように湧き出す怒濤の様な淫欲に煽られ熱を帯びて柔らかく膨らんだ菊門の奥深くに固く窄めた舌先が侵入した。

満たされぬ肉欲に燃え上がっていたお竜の女体に与えられた鋭い快美感にお竜がブルブルと身体を震わせてアアーッと嬌声を上げた。

そして、曉美の努力に応えるように自分も曉美の後口を舌先で充分嘗め回すと、そのまま

差し入れた。

お竜の口技に暁美も身体を震わせて悲鳴の様な声を上げた。

シックスナインの姿勢で互いの性器を嘗め合う姿には見慣れている今田兄弟であったが、更に背を曲げて互いの後孔を嘗め合う二人の姿に驚きの声を上げた。

二人は舌先を固く窄めて肉棒の様にすると、ピストン運動をする様に互いの熱く火照った肉穴に打ち込み続けた。

燃え上がる肉欲に完全に支配された二人は、男の目も忘れて荒い鼻息を上げて互いの身体を貪り続けていた。

銀子達の手によりもう一つの快樂の壺として開発されたその秘孔は今は柔らかに開き互いの舌先をその内部に受け入れている。

その目眩く快美感を発する秘められた場所を舌先で真心を込めてさすり上げ、固く窄めた舌先でピストンの様に打ち付け続けた。

フウフウと荒い息をしながら突き立てる直腸の奥は、口から溢れ出た唾液で満たされ、舌先が前後する度に黄色く染まった液体が表に流れ出し始めていたが、淫欲に狂った二人は全く気にする様子も無く互いの身体を貪り合った。

不意に暁美がビクッと身体を震わせると空気が抜ける様な声を発してグッタリと全身から力を失った。

お竜もそれに併せるように小さく声を上げて昇り詰めた。

相手の頭を挟んでいた大腿が弛緩し、二人は転がるように布団の上に仰向けになった。

互いに相手の太股を枕にする様に仰向けに寝転がった二人の胸は大きく上下し、激しい性技の余韻で早い呼吸を繰り返していた。

「お見事！お見事！二人とも後ろ手に縛られて、貞操帯まで嵌められて、ケツの穴を嘗め合うだけでイクとは大したものじゃないか！」

と、兄弟が手を叩きながら歓声を上げた。

貞操帯に取り付けられていた鍵を開けて、金属のベルトを外しながら、

「まるで洗面器に水を張ったみたいじゃないか！？」

と、秘裂を覆っていた鏡の様に磨かれた金属板の裏に溜まった豊富な愛液の量を見て驚いた様な声を発した。

兄弟は絶頂を極めてグッタリとしたままの二人を白木の張り付け柱に縛り付けた。

磔柱は男用の柱であり、キの字をした横棒に脚を思い切り開いた形で固定された。

暁美とお竜は一本の太い柱を背に挟むように固定されていた。磔柱はそれ程高い物ではなく縄で固定された腰の位置は丁度男達の見線の高さであり、二人の兄弟からは容易に磔台の女達の股間をまさぐることが出来る位置にあった。

「どうだ？お前達！さっきは少しばかりイッたけど、これ位じゃまだ身体が疼いて疼いて仕方無いんじゃないか？」

と太いパイプを手に見せ付ける様に言った。

「お願いします！それを入れて下さい！」

セックス中毒の身体に改造され、片時も男のモノを受け入れていないと禁断症状を発する様になっていた二人は、恥を忘れて悲鳴の様な声を発して哀願した。

腰をくねらせ大腿に押し当てられたパイプを自ら迎え入れようとするのを、サッとパイプを引き上げ、笑いながら、「そうガッツクねえ！ユックリと楽しもうじゃないか！」と、さも女達の性に飢えた様子を面白そうに眺めて声を上げた。

「もう少しご馳走してやるぜ・・・」と、云うと催陰クリームの入った容器を手近づいて来た。

その催陰剤の強烈な効き目を熟知している女達は残酷な兄弟の意図を知って悲鳴を上げた。そんな女達の狼狽する様子を楽しみながら、タププリと淫靡なクリームを掬い上げると、女の股間に擦り込み始めた。

秘裂の奥からから込み上げる灼熱感を伴った刺激に女達が身体をくねらせた。

催陰クリームの塗布は終わったがジンジンする痒みを伴った刺激が下腹から脳髓を通して脳天まで込み上げ、その激しい刺激に身悶え始めた。

クスリが効き始めた事を理解した兄弟は手に手にパイプを持って淫欲に飢えた女体をもみ始めた。

猿轡をさせた方が面白いという提案で豆絞りの猿轡でおおわれた顔面の眉根を寄せて身悶える女達の性感を男達が刺激し続けた。

ドクドクと心臓は熱い血潮を吐き出し、息も止まるような、込み上げる激しい性感の前で、一つの白木の柱を背に互いに身体を寄せ合う、お竜と暁美は互いに励まし合うように頭を寄せ合い、縄で縛り付けられた手を握り締め合うのであった。

逃亡失敗

それから更に何年か経過していた。

人気の無い牢舎の中で恨めしげな女のすすり泣きの声が低く流れていた。

今や完全なセックス中毒状態に陥ったお竜と暁美であったが、一日の内でも客に抱かれる機会がめっきり少なくなっており、性の飢餓感を満たすため自らの女芯を鉄格子に押しつけ、叶えられない渴望を満たしているのであった。

熱く煮え立つように女体の深奥からこみ上げる肉欲に疼く女陰を冷たい鉄製の柵に押し当てると気持ちが良かった。

二人の女は鉄格子の縦柵に秘裂を押し当て、両手で花園を押し開き、冷たく硬い鉄棒の感触を陰核や膣口に感じながら鉄棒に沿って尻を上下させるのであった。

陰部が擦過する鉄格子の部分は女のネットリとした愛液に塗されテカテカと光を反射し、濃厚な樹液が滴り流れていた。

「お前達、また鉄格子相手に楽しんでたのか！」

突然 5 人ほどの大亜門戸会の三下達が大声で笑いさざめきながら牢舎の中に入って来た。その中にはかつて目高組に属しておりその後大亜門戸会に鞍替えした男達も含まれていた。お竜も暁美も恥ずかしい場面を目撃されたという羞恥よりもホッとしたというような光を目に宿した。

「何だ？これは！ヌルヌルじゃないか！」

男達は女達が擦り付けていた淫液で滑光る鉄格子を指先でなぞって爆笑した。

「全くお前達はどうしようも無いスケベ女だぜ！一日中していないと気が済まないのか！？」

「アッシが 16 で目高組のバシリになった時にはお二人には随分と可愛いがって頂きましたから、その時の恩を万分の一でもお返しするようにお二人をお慰めしましょう！」

そう言う男達はベルトを緩めズボンを下に降ろした。

パンツも脱ぎ捨て下半身を剥き出しとした、男達の股間のモノは既に隆々と屹立しており、その先端の鈴口部分からは何かを期待するように透明な粘液が滲み出ている。

男達はそのまま鉄格子の奥に立ち尽くす女達の所に近づいた。

暁美もお竜もそんな肉欲に狂った男達に何か期待するように喜色を浮かべると、前屈みの姿勢で男達に向かって腰を突き出し、鉄格子の隙間に柔らかな尻肉を押し付けた。

格子と格子の間に物欲しげに愛液を滴らせる女の祠が在った。

男達は鉄格子を挟んで、濡れそぼる女体の中心に隆起したモノを押し当てた。

既に十分に潤滑されていた肉の狭間に男の熱いモノがグイグイと入って来た。

冷たい無機質な鉄棒と違う、どくどくと熱い血潮が脈打つ生の肉棒が、性に飢えていた肉洞内に押し入ってきて女達はウツと呻き声を上げて仰け反った。

以前は牢内の女と勝手に交わることは硬く禁止されており、破れば厳しい制裁を受けることを知っていたので、剛沢達高級幹部だけが特権の様に女達を^{もてあそ}ぶのを横目に、恨めしそうに女達の裸体を眺めるしか無かったが、何時の頃からか、その規制も有名無実化され、客のいない時間に牢内の女達と交わることは黙認されるようになっていた。

男達はタダで手軽に出来る精の抜き場所ーと、まるで便所に通う様に暇があると女達を閉じ込めた牢舎に足を運ぶようになっていた。

バックから立位に体位を変えた暁美が鉄格子を両手で握り締め股間を前に突き出す様にして男のモノを受け入れていた。

冷たい鉄格子を間にして男と女の熱い身体が直接触れあっていた。

「ほら！もっと腰を押しつけるんだ！まったくタダで出来るのは良いが、鉄格子越しの立位じゃ奥まで差し込めないぜ！」

鉄格子を間に挟んで暁美の正面から突き立てる男が腰を上下に揺すりながら、文句を口にしたが、それでも鍛え抜かれた極上の肉の祠に我が分身を突き立て獣欲を掻き立てられハアハアと息を荒げて激しく腰を振り立てていた。

男の左右に陣取った二人の男が、鉄格子の中に手を差し入れたつぷりと重い暁美の柔らかな乳房をもみ上げた。

深奥からこみ上げる快美感に甘い吐息を吐いて鉄格子を握りしめた。

何時の間にか正面に立つ男の差し出す唇に吸い寄せられる様に唇を押し当て互いの舌を絡め合った。

「こら！便所女！今度はケツの穴に入れてやるぜ！尻を突き出すんだ！」

壁一つ挟んだ隣の檻では、男がお竜に命じていた。

男達の精のはけ口として、男達は曉美達のことを『公衆便所』と蔑んでいた。

前の入り口で男の精を絞り上げた後、新たに挑みかかって来た男の差別的な言葉に反発を示すことも無く、男の声に従って身体を前屈みに折って、ぷっくりと見事な尻を鉄格子の隙間に押し当てた。

男のいきり立ったモノがお竜の菊花を押し広げズブズブと体内に侵入した。

肛門も一つの性器として鍛えられたお竜は、その痺れるような快感に声を上げ、前屈みの姿勢のまま自らの乳房を揉み上げた。

揉み上げる指の間で乳首が硬く^{しこ}瘤^{こぶ}っていった。

男もお竜の極上の締め付け具合に心もそぞろとなり、憑かれたように激しく腰を前後に揺さぶった。

「ほら！お前のでかいオッパイを揉んでやるぞ！身体をよこすんだ！」

鉄格子越しに後背位で突き立てたまま、お竜の上体を起こさせると鉄格子の中に手を差し入れ両手でお竜の豊満な乳房を揉みだした。

お竜の得も言われぬ肉体をまさぐりながら、鉄格子の隙間から頬と頬を寄せ合い、互いの舌を絡め合った。

女達の鍛え抜かれた肉の道具の前では男達の我慢は数分と持たず限界を迎え、激しく収縮を繰り返す媚肉に絞り上げられ、歓喜の瞬間を迎えるのであった。

目^め眩^{くら}め^め痺れるような快感と共に思いの丈を女達の体内に注ぎ入れた。

放出に伴う激しい発作の後、お竜の尻に突き立てていた男が、ずるりと半立ちしたモノを腸内から引きずり出した。

男の愛液とお竜の腸内の分泌物でまみれたそれをお竜に見せつけると、「ほら！お前ので汚れたモノをきれいにするんだ！」と命じた。

無言のまま男の方を向いたお竜は腰を下ろして、両手で鉄格子を握りしめたまま、鉄製の枠越しに男の差し出す汚れた肉塊に唇を近づけていった。

半開きになった肉厚の唇から舌尖をのぞかせ、唇と舌により男の肉塊に奉仕した。

暴発し終えた後の敏感な陰茎を微妙な感触で這いずり回る柔らかな唇とチロチロと動き回る舌尖の絶妙な感触に半立ち状態だった男のモノは再びむくむくと隆起を始めた。

すっかり逞しくよみがえった怒張を口内に頬張ると舌尖で扱き上げた。

その絶妙な舌技に男は再び腰をビクビクと震わせ口内に熱い樹液を浴びせ入れた。

口腔に残された粘つく陰液を恍惚の表情を浮かべて飲み下し、舌尖で男のモノを拭うお竜

の姿があった。

隣でも既に何人かの男達が入れ替わり立ち替わり暁美の二つの秘孔を蹂躪し肉欲をむさぼった。

絶妙な女達の肉体と鍛え抜かれた性技の前に男達は驚く程早く果て、肉欲のほとばしりを残していったが、短時間とはいえ他の女では得られない高度な快美感に十分に満足した男達は、「良かったぜ！また来るぜ！」と言い残して笑い合いながらドヤドヤと牢舎を出て行った。

物陰で男達の行為が終わるのを待ち、男達が居なくなるタイミングを図っていた亜紀がそっと牢舎に忍び入り、暁美とお竜の檻の前に歩み寄った。

亜紀が忍び寄るのに気づいた暁美とお竜は、何時もは和服姿が多い亜紀がブラウスにジーンズ姿とラフな格好であるのを何か奇妙に感じ、緊迫した表情に不吉なモノを感じた。

「大変よ！剛沢が娘達三人を貴女たちと同じ特殊な売春婦にすることを決めたわ！私はこれから三人を連れて逃げ出すから、もう貴女たちと会うことは出来ないのよ・・・」

やはり以前から心配していた事が現実と成る！と知って暁美もお竜も頬を強張らせた。

剛沢は実の父親の様な振りをして娘達が大きくなり学校を卒業するのを狡猾に待っていたのだろうと、理解した。

上流階級の子女が通うような学校に通わせたのも金満家の客を相手にする気品のようなものを身に着けさせるためだったのだろうと、剛沢の陰湿さを思った。

実の父と思い愛情を持っていた男から裏切られ最低の娼婦に堕とされた時の娘達のショックは、いかばかりだろうと思うと心が重く沈んだ。

それだけ言い残すと亜紀は足早に二人の前から立ち去った。

亜紀の後ろ姿に「亜紀さん！宜しくお願いします！」と、鉄格子を握りしめ涙を浮かべて声を掛けるのだった。

恐ろしい剛沢の魔手を逃れて、無事逃げ延びてもらえるよう祈りながら。

数日後の深夜、静まりかえった地下室に男達の怒号と女達の叫び声の様なものが聞こえて来た。

ベッドの中で眠りに落ちていたお竜も暁美もハッと目を覚ました。

その声は次第に大きくなり牢舎の方に向かって来つつあった。

二人は不吉なものを感じてベッドから起き上がると頬を強張らせた。

ガシャガシャと牢舎の鍵を開けると、最初に剛沢が入って来た。

「よう！お前達、長年二人だけで寂しかったろうから、新入りを連れてきてやったぜ！」

二人の檻の前に立って満面の笑みを浮かべると、後ろに続く三下達に合図した。

その様子に鉄格子を握りしめて立ち尽くす暁美とお竜はヒッと息を呑んだ。

そこには男達に引きずられる様に牢舎に押し入れられた嚴重に縄掛けされた亜紀と三人の娘の姿があった。

ああっ！この世には神も仏も無いものか！二人は絶望的な気持ちに押し拉がれた。

「俺に逆らう奴はどうなるか良く教えてやらないと組の示しが見つからないからな・・・」

と、組員に両側から押さえつけられた亜紀の方を見つめてニヤッと笑みを浮かべた。

逃亡の罪でリンチを受けたのか亜紀の顔や身体には幾つもの痣ができ、洋服も所々裂けていた。

「逃亡の罰としてこれからはお前達にも暁美やお竜の様に客を取って貰うからな！」

剛沢が断罪するように打ち拉がれた女達に声を掛けた。

「今まで散々尽くしてきた私を性奴隷にしようってのかい？」

最後の力を振り絞る様に剛沢を睨み付けた。

「そんな事は関係ないさ、俺に逆らう奴は皆罰を受けるのだ。」

と、憎しみを込めた目で見つめる亜紀に冷たく言い放った。

「今まで散々姐さんぶって偉そうにしていたのに、何よそのざまは！これから今までのお返しをさせてもらうからね！」

男達と一緒に牢舎に入って来た、今の剛沢の若い愛人の百花と芽依が腕組みしながら憎々しげに亜紀を睨み付けた。

ボスの最高位の愛人から娼婦への転落を申し渡された女を嘲るように、二人の愛人は甲高い笑い声を上げた。

「愛美達はまだ若いから時間を掛けてゆっくりと高級売春婦に育て上げれば良いが、亜紀は歳も歳だからな・・・大至急調教しなければならない。銀子！お前に任せたぞ！」

最後尾に控えた銀子の方を振り向きながら叫んだ。

能面の様に無表情を作った銀子は剛沢の言葉にコクッと肯いた。

「亜紀姐さん、今まで散々お世話になったけど、悪く思わないでね・・・ボスの命令には逆らえないのよ・・・」

「それじゃ明日の朝から調教開始だ！銀子またお前も忙しくなるぞ！」

亜紀と三人の娘を縛っていた縄が解かれ、子分達の手により一つの檻の中に乱暴に押し込められた。

「アンタは我が子の様に育てたこの娘達を本気で売春婦にするつもりかえ？！」

鉄格子を握り締め、剛沢を睨み付けながら叫んだ。

「俺は、端っから此奴らのことを実の娘と思った事は無いぜ！俺は最初から此奴らに安サラリーマンを相手にする様な安い売春婦にするつもりは無かった。此奴らにハイソサエティの客でも相手に出来る高級売春婦として育てるつもりで貴品や素養を身に付けさせるため、セレブな娘が通う学校に入れたんだ。これまで散々元手が掛かっているんだから、これまで投資した分をその身体で稼いで貰うぜ！」

と、憎々しげな亜紀の視線を受けながらうそぶいた。

亜紀の背に怯えた三人の娘がしがみついていた。

鉄格子を握り締めて、「私は売春婦でも何でも成りますから、この娘達は助けて！」と、悲痛な声を上げ続けた。

そんな亜紀の血を吐くような哀願を無視して、踵を返すと無言で立ち去った。

剛沢の後に従って残忍な男女が陰湿な笑みを浮かべて牢舎を後にした。

剛沢達一団が消え去った牢舎の中では女達のすすり泣きが甦っていた。

「ああー御免なさい！貴女たちの娘を守ることは出来なかったわ・・・」

「アアッ！亜紀さん貴方までこんな目に遭うなんて！」

鉄格子を握り締めながら涙を流し合った。

翌日の早朝、男達の笑い声が地下室に響いてきた。

剛沢を先頭に銀子と二人の若い愛人と何人もの子分が付き従って、ドヤドヤと牢舎の中に入ってきた。

亜紀と三人の娘を押し込めた檻の前に立つと、ガシャガシャと鍵を外して扉を開いた。

出るんだ！と言う剛沢の命令を受けて腰を屈めて怖ず怖ずと亜紀が出て来た。

その後に愛美達三人の娘が従った。

檻の前に並んだ四人の女を目に、「昨夜は良く眠れたか？」と泣きはらして目の下に隈を作

った女達をからかった。

曉美もお竜も鉄格子を握り締めながら固唾を飲んで成り行きを見つめ続けた。

剛沢は、憔悴した表情を浮かべる 4 人の女を上から下まで眺め回して、「先ず、此所では女達は客を取る時以外は素っ裸でいるってのが定法だ！」と、声を上げた。

その残酷な声に、さっと、女達は羞恥の表情浮かべて、身を固くした。

「亜紀！お前ならその辺の所は良く承知しているだろう？先ずお前が率先して素っ裸になって娘達に手本を見せて上げな！」

パパ・・・と、これまで剛沢のことを実の父と信じていた娘達が豹変した態度に悲痛な声を上げた。

これまでと覚悟を決めた亜紀がブラウスのボタンに指を掛けた。

俯いて躊躇う様に一つ一つボタンを解いて行く姿に、止めて！ママ！と悲痛な声が上がった。

「御免なさい・・・もうどうしようも無いのよ・・・」

亜紀が娘達の方を振り返って悲痛な声を振り絞った。

普段は着物姿を見慣れている組の男達もブラウスにジーンズ姿でグラマラスな身体の線が浮かんで見える亜紀の姿に粘っこい視線を送った。

ブラウスを脱ぎ取りジーンズのボタンに指を掛ける亜紀の姿に目が釘付けとなった。

形良い脚の線を見せていたジーンズを下ろすと、白いムッチリとした中年女の大腿が露わとなった。

これまで、手の届かないボスの最高位の愛人と畏敬していた熟女が、今やブラジャーとショーツを履いただけの裸身を晒していた。

40代後半の熟女であったが、日頃の全身美容の効果か身体の線に崩れは無く、一方、女らしく乳房や下腹や大腿など柔らかな脂肪を置いた部分にはタププリと脂肪を置き、ムツとするような濃厚な熟れた女の色香を醸し出していた。

ブラジャーに窮屈そうに覆い隠されている豊満な乳房と、小ぶりのショーツにくびられた豊かに張った腰回りに男達の視線は釘付けとなり、シーンと静まりかえった牢舎内で思わず生唾を飲み込む音が聞こえた。

ブラジャーを早く取れと言うように剛沢が顎を杓った。

全てを諦めたように、背中のホックに手を回した。

ブラジャーが弾け飛ぶように外れ、その後に白く柔らかい大きな乳房が露出した。

思わず取り囲む男達から喚声が上がった。

剛沢は更にパンティーを取るように視線を送った。

「止めて！ママ！・・・パパ！許して上げて！」

堪らず娘達から悲痛な声が上がった。

未だに剛沢のことを実の父と信じようと縋る娘達に、

「待ってろ！次はお前達だ！」と、冷たく言い放つのであった。

これまで子分として顎で扱って来た男達の目に裸身を晒す屈辱に硬く目を閉じて、淡いベージュのパンティーに指を掛けると、さっと引き下ろした。

露わとなった股間には良く手入れされた春草が隠微な雰囲気をつたえてひっそりと茂っていた。

亜紀を卑猥な眼差しで取り囲む男女の視線は、当然ショーツを脱ぎ捨てたばかりの股間に集中したが、歳割に毛量が少ないと意外に感じた。

細く柔らかな春草は、媚肉の谷間を挟む両側の丘から生えているだけで、多くの女の様にデルタ状の茂みは無く、秘裂に沿って繁茂する薄い毛の間から女の割れ目が透けて見えそうだと感じた。

これが日頃ボスが愛して、揉みしだいた乳房で、ボスの雄渾な男のモノが潜った秘裂かと、繁々とその部分を見やった。

下履きを脱ぎ捨て全裸姿を晒した亜紀は堪らず、乳房と股間を手で隠して床にしゃがみ込んだ。

惨めにしゃがみ込む元愛人の姿に男達は好色な目を注ぎ、二人の若い愛人は蔑んだ視線を送った。

剛沢の指示で麻縄の束を肩に掛けた男が前に進み出た。

「姐さん、手を後ろに回して下さい・・・」

^{かたひざ}片膝付いて床にしゃがみ込む亜紀の後ろに立った若い男が乳房を隠す手を掴むと後ろにひねり上げた。

亜紀も抵抗は無駄なことを知っており、大人しく手を背後に捻り上げられて行くのだった。娘達を守るため逆上して暴れ出すと面倒なので、剛沢から縄掛けするように命じられていたのだ。

恥ずかしい所を覆い隠していた両手を後ろに束ねると、器用な手つきでクルクルと両手を縛り上げ、余った縄を前に回して乳房の上下に縄を這わせた。

二重三重に乳房の上下に麻縄を掛けられ、亜紀の柔らかく大きな乳房は縄に括り上げられ、蠱惑的に前に突き出していた。

縄止めを済ますと、立ち上がらせ縄尻を近くの鉄格子に繋ぎ止めた。

鉄格子を背に立位で縛り付けられた亜紀の隠しようの無い裸身に男達の目が釘付けとなった。

青や赤の血管が微かに透けて見える白く柔らかな乳房は、麻縄に括り上げられ男達を挑発するよう前に大きく飛び出し、秘裂に沿って良く手入れされた恥毛は、固く股間を閉ざしていても男達の目に映った。

「それでは、次は娘達に裸になって貰おうか・・・」

剛沢が、恐怖に床に尻餅を付くようにしゃがみ込んだ娘達を見て声を発した。

「止め手下さい！私は何でもします！だからこの子達は助けて上げて下さい！」

立位で鉄格子に固定され身動きできない亜紀が悲痛な声を上げた。

亜紀の悲鳴も聞こえないかの様に、「サッサと裸になるんだ！」と、冷たく命じた。

これまで剛沢の事を実の父と信じて来た娘達は、事の成り行きを理解出来ないように、互いに身を寄せ合い、目を見開き、抱き合って怯えた表情を浮かべていた。

「どうやら此奴らは服の脱ぎ方を知らぬようだな？・・・お前達手伝ってやれ。」と傍に居た男達に目配せした。

剛沢の命を受けた男達が何人も歓声を上げて娘達に襲いかかった。

女達の悲鳴が牢舎内に響き渡った。

我が子が乱暴な男達の手により引き裂かれる様に着衣がむしり取られて行く様を目にすることも出来ず、曉美もお竜も鉄格子を握り締めたまま固く目を閉ざして俯いた。

「へへ・・・さすがに若い娘の肌はスベスベして柔らかいぜ！指に吸い付きそうじゃないか！」

まるで猫が鼠をいたぶる様に愛美達に殺到したヤクザ者達は一機に服をはぎ取るのではなく、少女達の反応を楽しむ様に少しずつ衣類を奪い取っていった。

一枚一枚着衣を奪われる毎に悲鳴が上がった。

「お前達、歳の割に発育が良いじゃ無いか！オッパイだってこんな大きく育って！さすが淫乱な母親の娘だけの事はあるぜ！」

とうとうブラジャーとショーツを残すだけとなった少女達の裸身を眺めながら男達から喚声が上がった。

娘達の悲痛な叫び声も気にならず、むしろそれが残忍な獣欲に火を点ける様に、男達はブ

ラジャーをむしり取った。

みずみずしい白桃の様な柔らかな乳房が露出し先端の淡い桜色した乳量と乳首が肉欲に狂った男達の目に眩しく映った。

とっさに両手で覆い隠そうとするのを周囲の男達が腕を掴んで阻止した。

男の腕の中で藻掻きながらも身動きつかない娘をジロリと見つめた男が生唾を飲み下して最後に残ったショーツに指を掛けた。

娘達の口から断末魔の悲鳴が上がった。

「まだ子供だと思っていたけれど、生える所はちゃんと生えているじゃないか！もう大人の身体だぜ！」

「亜紀姐さんのよりずっと濃いぜ！これじゃどちらが年上か分からないな！」

奪い取った下着の温もりを楽しみながら、大声を上げた。

自分の娘だけはまっとうな生活を送って欲しいと願っていた暁美やお竜はそれを叶えられなかった絶望感に鉄格子を握り締めたまま咽び泣いた。

今や全裸で後ろ手に縛られた亜紀と三人の少女の姿が在った。

「それじゃこれから客を取るための練習に入らせて貰おうか・・・」

剛沢が浅黒い麻縄を白い裸身に纏った以外何も身につけていない四人の姿を見つめながら言った。

愛美達3人はこれまで実の父親と信じて慕っていた剛沢の豹変した態度に怯えて、床に片膝付いたまま身を寄せ合って震えていた。

そんな娘達を心配する様に、愁いを帯びた視線を送る亜紀の裸体に目をやると、これまで幾度も夜を伴にした見知った身体であり、羽毛枕の様に柔らかく良く張った乳房や剛沢を陶醉境に誘った甘美な媚肉などが思い出され、ふくよかな脂肪の層に食い込む様に縄を掛けられ括り出された熟れた肉体に性奴隷に堕とされた哀愁を秘めた雰囲気、憐憫の情を感じることは無く、むしろ、自分の大切にしていた物を徹底的に破壊してしまいたい—という倒錯的な、これまで感じたことの無かった肉欲を掻き立てられるのだった。

「それじゃ、これから1ヶ月以内に客の前に出せる様に調教するんだ！前と後ろを使った芸も出来る様に仕込むんだぞ！」と、銀子に向かって叫んだ。

「分かったわ・・・」と表情を変えず呟いた銀子は檻の前に立位で縛り付けられた亜紀に近寄り、「悪く思わないでね・・・」と鉄格子に結びつけられた縄尻を解こうとした。

「ちょっと待て！」

縄尻に手を掛けた銀子を制したので、詰めかけた男達がエッと言う様な表情を浮かべた。

「お前達昨夜から一度もトイレに行っていないから、腹の中にいっぱい貯まっているだろう？」と、陰湿な目で覗き込んだ。

剛沢の指摘する様にまる一日近く排泄する機会が無く、下腹がパンパンに張って尿意が堪えきれない所まで来ているのを亜紀は感じていた。そしてそれは三人の娘達も同じ事だろうと確信した。

「調教中に突然お漏らしされては困るから先に済ましてしまえ！」

と、子分達にポリバケツを取りに行く様に命じた。

これからボスの愛人と娘の放尿姿を見られると、喜び勇んだ男達は喜々としてポリバケツを取りに向かった。

暫くして4個の青いポリバケツが床に並べられた。

互いに身を寄せ合い恐怖に青ざめ、羞恥に身を固くする三人の少女に、「さあ、そのバケツを跨いで済ますんだ。」と冷たく命じた。

父と信じていた男の非常な言葉に娘達は、耳を疑った。

「今は急場だからそんな色気の無いバケツだが、その内、曉美達のように綺麗なオマルを買ってやるぜ！」

陰湿な笑みを浮かべながら愕然とする少女達に言葉を浴びせた。

「ああー、御免なさい！ママはもう貴女たちを守って上げることは出来ないのよ！この男達に逆らうことは出来ないのよ！」

抵抗が無駄で在ることを熟知している亜紀が鉄格子に立位に縛り付けられたまま身を震わせ悲痛な声で娘達を諭した。

亜紀の言葉に既に尿意が限界に達している愛美が怖ず怖ずと目の前に置かれたポリバケツの方に歩み寄った。

それにつられた様に希美と栄美もポリバケツの方に進んだ。

「お前達、しっかりバケツの上に腰を下ろさないと駄目だろう！」

バケツの前で躊躇している少女達に声を浴びせた。

「しっかり尻を付けて、こうやって股をガバって開くんだ。

堪りかねた男達が、肩を押さえつけてバケツの上にしゃがませ、無理矢理脚を開かせよう

としたので、悲鳴が上がった。

「待って！するわ・・・剛沢の愛人がオシッコする所をよく見えて・・・」

立位で鉄格子に縛り付けられていた亜紀が突然声を上げた。

「へー！亜紀姐さんが私たちの目の前でオシッコするんやてさ！」

すこし関西訛りのある百花がさも可笑しそうに大声を上げて、周囲の男達を見回した。

娘達が排尿する間に自分の方に野卑な男達の注意を引きつけておくことにより、その間に娘達が済ますことが出来れば、少しでも羞恥を和らげよることが出来るのでは無いかと、悲しい諦めをした亜紀は男達を誘う様に艶技を始めたのだった。

「そんな床の上にバケツを置かれたって、出来ないわ・・・床を汚して仕舞いますわ・・・誰か前に押し当てて・・・」

突然の亜紀が取り始めた妖艶な態度に男達は惚けた様な表情を浮かしたが、やがて隠微な薄笑いを浮かべて、「へへ・・・流石に元ボスの最高の愛人でも男の様にシャーって飛ばすのは出来ないってか？」と、床に置かれたバケツを手にした。

「ほら！もっと脚を開かないとバケツを当てられないぜ！」

亜紀の横に陣取りバケツを手にした男がバケツの縁で柔らかい太股を押しながら言った。

「こう？こうすれば良いの？」

男の言葉に逆らわず、自ら股間を開き始めた。

野卑な視線を送る男女を挑発する様に尻をくねらせ、ジワジワと股間を開き、綺麗に刈り込まれた春草の奥に秘められた鮮烈な秘裂が露わになり始めた。

少しでも娘達を護るためとは言え、下賤な男達の目に自らの秘裂を晒す屈辱感と羞恥に頭がクラクラしそうになった。

憤怒と恥辱を胸に呑み込み、へっぴり越しの姿勢で大きく股を拡げ、男の手にするポリバケツを股間に挟む姿勢を取った。

男達を挑発する様に腰を前に突き出し、ふくよかな肉の狭間にポカリと開いた秘裂が血走った視線を走らせる男女の前にマザマザとさらけ出されていた。

これがボスの巨根を何時も納めていた場所か？と取り囲む男達が目を凝らした。

熱い視線を剥き出しのソコに感じて顔がカーッと熱くなった。

「皆！^{みんな}見たってみい！散々使い込まれたはずなのにまだ綺麗な色してるで！」

すっかり剥き出しとなった陰唇とその間から僅かに顔をのぞかす褄を目にして百花が嬉し

そんな声を上げた。

「ほら！皆見たがってるのや！ケチケチせずにもっと見せてやったらどうや！」

鉄格子に縛り付けられた亜紀の前に進み出た百花が両手で、ポッテリとした肉唇に指を掛け左右に押し開いた。

秘められた女の花園が大きく露出し、ヒィと悲鳴が漏れた。

芽依も手伝って、これまでの恨みを晴らすように、二人の愛人は亜紀の左右に腰を下ろして、両側から指を掛けて思い切り左右に押し広げた。

「どや？見てみい！まだ綺麗な色してるやないか！」

「歳に似合わず、クリトリスも可愛いわ！」

全開となった秘部に引き寄せられる様に、男達がぐっと身を乗り出し、亜紀を取り囲む輪が小さくなった。

剥き出しとなった女芯に熱い視線を感じ、羞恥に顔を真っ赤にして激しく左右に打ち振りながら、

「ああっ！見て！剛沢が毎日使った亜紀のオ███を見て！」と、娘達から視線を逸らそうと艶技をするのであった。

ここに何時もボスの巨根が埋め込まれていたのか？と羞恥にピクピクと蠢く秘奥の中心の開口部を注視した。

男の劣情を刺激する様にわざと腰を突き出し、隠微に腰を震わせた。

亜紀の淫技に刺激され、そこで荒い息が感じられるほど男達は顔を寄せ合った。

「アアーッ！したいわ！ねえ、もうしても良い？」

男達を挑発する様に腰をくねらせながら聞いた。

「良いとも、良いとも。さあ、シャーとやりねえ！」

バケツを捧げ持つ男が嬉しそうに応えた。

「ねえ、貴方達、亜紀がオシッコする所を見たいいでしょ？臭いを嗅ぎたいいでしょ？そんな遠くからでは見えないわ。もっと傍に寄って見て！」

「そんなに寄ったらお前さんの小便を掛けられて仕舞うぜ！」と、口にしながら満更でも無さそうに、男達は更に顔を近づけた。

亜紀自身の尿意も限界に近づいていたが、男達を焦らし挑発するように、アアーッ！アアーッ！と悲痛な声を上げて腰をくねらせるのであった。

既に亜紀の企みに気づいていた銀子が、男達の注意が亜紀に釘付けになっていることを確

認して、そっと三人の娘に近づくと、「いいこと、亜紀さんが男達の注意を逸らしている間に済まして仕舞うのよ・・・」と、囁きかけた。

檻の中の暁美とお竜も哀願する様な目で見続けた。

「この女！何時まで我慢するつもりや！？さっさと始めんかいな！」

亜紀の女陰を押し広げていた百花が業を煮やした様に、ぞんざいな口を開いて、小指を尿道口に押し当てた。

「ああっ、痛いわ！」

膣口の僅か上に開口した微妙な窪みを小指の先でほじくる様に責められ悲鳴を上げた。

「ああっ、出る！出ます！」

百花の攻めの前に屈した様に叫んだ。

慌てて半ば没していた小指を抜き取ると、その開口部からレモン色の奔流が^{ほとぼし}迸り始めた。その瞬間取り囲む男女の間からワッと歓声が上がった。

黄色い水流が一条の線を描いてバケツの縁を叩くのを男達は目を爛々と輝かせて眺め続けた。

「以前から亜紀姐さんは着物の似合う日本美人だと思っていたが、どうでい、このお淑やかな^{こぼ}霽しようはよう！もっと派手にシャーとやったらどうでい？」

娘達が排尿する時間を少しでも稼ぐために苦勞して少しずつ流しているのも気付かず、嬉しそうに囃し立てた。

「それにしても、随分と貯めてたじゃ無いか？バケツが一杯になりそうだぜ！」

亜紀の大腿にバケツを押し当てていた男が重くて仕方ないと言う様に声を掛けた。

「まだ終わらねえのか？随分時間が掛かるじゃねえか！」

隠された意図も気づかず少しずつ放水する亜紀に男達が囃し立てた。

「ほら、もう良いのかい？」

男がバケツを引き離そうとするのを、

「待って、まだ出るわ・・・」と制する声に

「こんだけ出しといて、まだ出ると言うのか？」と笑い声が上がった。

男の支えるバケツの中に膀胱に残った最後の尿の一滴まで絞り出したのを感じると下腹がスーッと軽くなるのを感じた。

「こんだけ溜まってやがったぜ！まだ湯気が立っているぜ！」

バケツを手にした男が亜紀に見せつける様に顔に近づけた。

暫く亜紀の反応を楽しんだ後、周囲の男達に見せる様にバケツを回して羞恥を掻き立てた。

「さて、それじゃ次に娘達がオシッコをする所を見せて貰おうじゃ無いか！」

亜紀を取り囲んでいた人の輪が崩れ、ゾロゾロと愛美達の方に寄るのを見て、アアッ！まだ済ましていなかったのか？と、自分の努力が徒労に終わったことを知って悲痛な鳴き声を上げた。

「流石に若いのは勢いが良いぜ！どうだいこの派手な流し様はよう！」

娘達を取り囲む人の輪の中から下卑た笑い声が聞こえ、バケツを激しく叩く音が幾つも聞こえてきた。

ヤクザ者達の嘲笑を受けながらの羞恥の行為に少女達の鳴き声が聞こえて来ていた。

剛沢の愛人だったと云う見栄をかなぐり捨て生き恥を晒した全ての行為が無駄に終わった事を思い知らされた亜紀は声を上げて泣き、お竜と暁美も耳を押さえて咽び泣いた。

「これだけ出せば、もう充分だろう？銀子、亜紀の調教を始めるんだ！」

鉄格子に立位に固定されたまま涙も涸れ果てた様に悄然と立ち尽くす亜紀と無表情の銀子を見ながら命じた。

銀子は亜紀の後ろに回ると牢の鉄格子に繋がれていた縄を解いて、その縄尻を握り絞め邪険に亜紀の身体を引っ張った。

百花と芽依の二人の愛人も女体調教とはどのようなものか聞くと目を輝かせて関心を持ち、これから亜紀がどのような肉体改造を受けるのか興味を示した。

そして、亜紀の調教の助手をさせて欲しいと剛沢や銀子に申し出た。

淫靡なショー

「娘達はこれから自分達がどんな娼婦にならなきゃいけないのか、暁美達に教えて貰おう。」

牢の中で成り行きを見守っていた暁美達は、自分達の名を出されて驚きの声を上げた。

亜紀が縄尻を銀子に引き立てられ何処かに連れて行かれ、百花と芽依の二人もはしゃぐように二人の後ろに従って出ていたので其処にはもう彼女達の姿は無かった。

その後ろ姿をじっと見送る間に、男達が暁美達を閉じ込めた檻の中にドヤドヤと入って来て出る様に急ぎ立てた。

地下の一角に作られた練習用のステージの前に後ろ手に縛られたままの愛美達が並んでパイプ椅子に座らせられていた。

麻のロープにより上半身はパイプ椅子に固定され、両脚は大きく股間を開く形で椅子の脚に縛り付けられていた。

その後ろには卑猥な笑みを浮かべた大亜門戸会の男達が立っていた。

全裸のまま股間をこれ見よがしに開いた姿勢で椅子に座らされ、恥ずかしさに首を振り啜り泣いていた。

その間、一段高くなったステージの奥のカーテンが時々そよめき、その奥で何か準備していることが分かった。

昨日から色々なショッキングな事態に苛まれ、これから何が起きるのか不安そうに三人の娘は顔を見交わした。

突然周囲の明かりが消え、二条のスポットライトがステージを照らした。

それと伴に艶めかしい音楽が大音量で流れ始めた。

さっと幕が開くと二人の女がステージに現れた。

けばけばしくメイクされた貌に笑顔を振り撒き、両腕を高々と上げて観衆にアピールするようにステージの中央に進み出た。

それは、華やかな衣装を身に着けた暁美とお竜の二人であった。

二人はまるでリオのカーニバルに登場するサンバダンサーの様にビーズ玉やспанコールを貼り付けたキラキラと輝く紐のようなビキニを身に着け、頭や背や腰には大きな極彩色の羽根飾りを付けていた。

しかし、それらの紐の様な衣装は余りにも細く身体の大事な部分を隠す役割は丸で無く、ブラやパンティーには乳房や秘所を覆い隠す生地は付けられておらず、周囲の紐状の部分しか無く、これ見よがしにキラキラと輝く宝石で乳首の周りを飾り付けられた乳房を前方に突き出す様に豊かな胸の周囲を搾り上げ、パンティーは三本の細い紐状に分かれ、無毛の股間を扇情的に飾り、左右の二本は女の花園をまざまざとさらけ出すように、捲り上げられた柔らかな襞の上を通って、照明を反射して輝く宝石を固定している金具が爪のように左右に押し広げられた秘奥の花弁に食い込み押さえ込み、真珠球を繋げた真ん中の一本は剥き身にされた女肉の中央を通って女陰の中に深々と食い込んでいた。

涎を垂らしそうになりながら二人の美女の全裸同然の姿に熱い視線を送る男達は、これでは大小の真珠球が剥き出しにされた肉芽や秘孔を摩擦し、歩くだけでも耐えられない刺激を与えることだろうと想像した。

事実、秘奥に半ば没した真珠球が秘孔から分泌される樹液でテラテラと足元に設置された照明の光を反射している様子が見られた。

「どうだ？分かるか？お前たちの母親の股の間の真珠球を本物の真珠が刺激しているんだぜ！」

と、口にすると開いた股間に手を伸ばし可憐なクリトリスを指先でなぞった。

男の悪戯に、イヤッ！と悲鳴を上げて椅子に縛り付けられた身体を悶えさせた。

娘達の悲鳴を耳にしても今のお竜と暁美にはどうしてやることも出来なかった。

激しい音楽に合わせて妖艶に体を動かし始めたお竜と暁美に観衆の視線が集中し始めた。キラキラと輝く紐状の衣装を纏っただけの全身隈無く刺青を施された女と両肩から二の腕に掛けて赤青の龍の刺青を入れた女の姿を三人の娘は不気味な物を見るように怯えた目で見詰めた。

暁美とお竜は、激しいサンバのリズムに併せ全身を動かし、腰を激しく振り踊り始めた。激しい舞により紐状のブラに括り上げられていた二人の重そうな乳房がユサユサと揺れた。実の娘の前で恥ずかしい姿を晒さねばならない精神的苦痛が二人を責め苛んだが、秘裂を一文字に挟む真珠玉で装飾された紐がセックス中毒に冒された二人に哀しい現実を逃避させる陶酔感のようなモノを与え、それに縋るように淫靡に尻を振り続けた。

全裸よりある種扇情的な姿による激しい舞姿に、見守る男達から歓声が上がった。その歓声に応える様に二人は舞台から降りると、興奮した顔で見詰める男の前に進み出て、目と鼻の距離から両手で乳房を掴み激しく振り立てたり、大きく股を開いて男の方に無毛の股間を突き出して、挑発する様に激しく腰を振り立てた。

男の劣情を刺激するような踊りに、見守る男達の興奮はいやがおうにも高まった。

これが今の二人の日常であった。二人は単に客から抱かれるだけで無く、好色な客の目の前で扇情的なショーの様なものをやる事を強制されていたのだった。

実の娘の目の前に恥ずかしい姿を晒す事は耐えがたい苦痛であったが、二人は激しいリズムに併せて踊る事により没我の世界に逃げ込もうとしていた。

激しい音楽が急にムーディな音楽に変わった。

二人は踊りを止め、互いに舞台の中央に歩み寄った。

舞台の真ん中で二人は互いに抱きしめ合い、そのまま唇を重ね合った。

それは、演技を超えた熱い口吻であった。これまで長年に渡って辛酸をなめ続けて来て、この世界に二人しか頼る者の無い暁美とお竜にとって、今や並の恋人同士の関係を超えた濃密な関係となっていた。

まるで世界に二人しか居ないような、人目も気にせず繰り広げられる熱い口吻に見守る男達の口から溜息が漏れた。

この間に、手早く助手が舞台の上に布団を敷き、二人の身に纏っていた飾りや紐状の衣装を外した。

今や一糸纏わぬ二人は恋人同士の様に手を握り絞め、互いに誘うようにステージに敷かれた布団に向かった。

観客に向かって後ろ姿を晒す暁美とお竜の良く張った柔らかそうな尻に、見守る男達から何かを期待するように生唾を呑み込む音が響いた。

布団の上に腰を降ろした二人は、唇を重ね合わせたまま互いの身体を擦り始めた。

優しく愛撫し合う内に二人の呼吸は速くなり、肌が赤く染まっていった。

それは演技を超えた真の愛情表現であった。

両手を使った愛撫を続けながらお竜が暁美の撓わに実った乳房に唇を寄せた。極彩色の入れ墨を施した乳房の頂点にある乳首を舌先を使って丹念になめ回した。お竜の丹念な舌技に曝され、乳首がツンと尖り始めた。

お竜の愛技が終わると憑かれたように暁美がお竜の豊満な乳房に食らいついた。

これまで恐ろしそうにステージを見ていた三人の娘は浅ましい女同士の愛劇に項垂れて固く目を閉ざした。

手と口を駆使して愛し合う二人は、そろそろと互いの股間に手を伸ばした。

二人の指先が股間の秘められた部分に触れた時、二人は同時にウツと声を発して身体をくねらせた。

そのまま二人は熱く熟れた肉洞内に指を差し入れ、その内部をまさぐった。

二人はステージに敷かれた布団の上に尻餅を付いたまま、観客に向かって大きく股間を拡

げて見せた。

そのため、秘園を蠢く繊細な指の動きが観衆からはっきりと見えた。

スポットライトがこんこんと湧き出す泉のように愛液を垂れ流すその部分を明明と照らしていた。

二人の女の艶技に吸い込まれるようにシーンと静まりかえった地下室に濃密な女の樹液を指先で掻き回すピチャピチャという音が飴していた。

その音は固く目を閉ざし浅ましい眼前の光景を拒絶しようとしていた三人の娘の耳にも容赦なく届いた。

暁美が堪えられなくなったように布団の上に仰向けに崩れ落ちた。

お竜は両手で暁美の太股を抱え込み大きく左右に捻げた。

そして、両脚を抱えたまま暁美の後口に唇を寄せた。

お竜が口付けする菊の花の周囲には毒々しい刺青が彫り込まれていた。

ふとそれを目にした愛美は、思わず驚きの声を上げた。

そして、不潔な肛門の周りに彫り込まれた刺青を穢らわしい物の様に思い、そこを嘗させたり、嘗めたりして嬌声を上げる女達の行為を心の底から嫌悪して、顔を背けた。

そんな娘達の反応も気づに、女達の艶技により興奮した観衆は喝采を送った。

そんな野卑な男達に應えるように、お竜は舌先を伸ばして丹念に菊の蕾を嘗め回した。

その心地良い刺激に男達の卑猥な視線も気にならないかのように、暁美が鼻を鳴らして、むずかるように上体をくねらせた。

お竜の口吻を受け続ける間に暁美の肛口が柔らかく開き始めた。そしてその中心から何かがジワジワと姿を現し始めるのが明るいスポットライトの光の輪の中に映った。

それはピンク色した柔らかな透明樹脂で作られた棒状の物であった。

幾何学模様に彫り込まれた刺青の中心を割って迫り出してきた物は、禁断の祭壇から出現した魔物の触手の様な、何か呪術的な禍々しさを見る者に感じさせたが、よくよく見ると、それは精密に男性器を模した形状をしており、まるで暁美の尻の穴からニユルニユルと男根が生えだして来たように見えた。

お竜は突如暁美の体内より出現した陰具の亀頭部分を口に咥えると、そのままズルズルと暁美の腸内より引きずり出し始めた。

肛門から突き出した不潔な汚物を口に含む女の姿を見た幼い娘達がイヤッ！と悲鳴を上げ

て顔を逸らした。

お竜は見物の男達に向かって腰をもたげ、隠微に尻を振り立てながら、軟質樹脂で出来た陰具を暁美の尻穴から引っ張り出した。

その女の肛門の周りにも龍の刺青が施されているのを目にして、娘達は見てはならない物を見てしまった様に顔を伏せた。

お竜の咥えるピンク色の透明の長く太い柔らかな物は、まるで体内から腸を引きずり出されているように見えた。

暁美の身体から出現した陰具を口に咥えたまま、男達に向かっていやらしく尻を振っているお竜の後口が何やらモゾモゾと動く様子がライトに照らされて判った。

やがて、それは菊花の周囲を飾る刺青を押し広げ、内部から少しづつその姿を現した。

肛孔の皺を押し分け、男根の様な先端部を外に現したそれは暁美の腸内に収められていた陰具と同じ物である事が見守る男達には判った。

まるで便を排泄するようにお竜の後口からニュルニュルと迫り出してくる陰具は、色こそ青い透明であり違っていたが、それ以外は暁美のモノと同じモノである事が理解出来た。男女の淫行に長けた男達はそれが双頭の張り形である事が判った。

そして、その大きさに目を見張った。太さは4センチ近くあり、長さは50センチ以上あるだろう。

こんな大きなモノを腹の中に収めながら激しいダンスを踊っていたのか！と、舌を巻く思いであった。

お竜が腰を振る度に、尻穴から垂れ下がった長い陰具はまるで尻尾の様にブラブラと揺れた。

肛孔から禍々しい筒具を生やしたまま、お竜は体位を変えて暁美の顔の上に自分の下腹をもって行った。

お竜の尻から生えだしたモノが暁美の頬を叩いた。薄く目を閉じてお竜に身を任せていた暁美がそれに気付くと、大きく口を開いて迎え入れた。

お竜の腸内で暖められたモノを口に含みウツトリした表情でその味覚を味わった。

二人は上下に裸体を重ねたまま、しばらくの間互いの尻から生えだした尻尾をなめ続けた。

やがてお竜は筒具の亀頭部分を咥えながら両手も使って長い性具を暁美の尻穴に戻し始めた。暁美もお竜に習って一端を口に入れながら押し込め始めた。

太くて長い筒具が狭い狭間を通過する度に、刺激するのかウッ、ウッと小さく声を発して

互いの腰がピクピクと痙攣した。

その長大なモノを腹に収めるのは特殊な技術を身に着けた二人でも苦痛なのか全身にビッショリと汗を浮かべ呼吸を荒げた。

互いに50センチ近く飛び出していた陰具は、今や元通り大半が互いの身体に収められていた。

その苦行の余韻が収まるのを待つように二人は上下に身体を重ねたままじっとしていたが、やがて、その一端を咥えたまま、静かに頭を前後に振り始めた。

互いの陰門に突き立てられた張り形が周囲の肉を巻き込んで押し込まれ、毒々しい襷を纏わり付かせたまま引きずり出された。

狭い輪状の筋肉を通して、腸を体外に引きずり出されるような刺激に互いに呻き声を発して腰を悶えさせ続けた。

額に玉の汗を浮かべ眉根を顰めて、陰具を咥えて、互いに責め続ける二人であったが、長い性体験の間に苦痛を快感に変える術を身に着けたのか、何時しか二人は喜悦の表情を浮かべ、その頭の動きは非常に激しくなっていた。

激しい陰具の動きに互いの腰はピクピクと震え、女陰からは濃厚な蜜が滴り流れていた。激しく頭を前後に振るため、亀頭形状の陰具の先端が滑って喉を挟む事があっても、二人は夢中になって互いに突き立て続けるのであった。

二人の演技を超えた性行為に魅入られ、何時の間にか剛沢が補佐役の青山を連れて、ぶらりと訪れていたのに気付く者はいなかった。

「どうだ、面白いか？」

全身をガタガタ震わせて見入る娘達に、突然背後から声を掛けた。

「お前たちの母親は、最早人間じゃ無いんだぜ！完全に肉体改造されて、性器に手足の生えた化け物さ！」と、クックッと小気味良さそうに笑った。

「お前達もこれからじつくりと肉体改造されて行って、ああいった技を覚える事になるんだぜ。」

と、怯えた目で振り返った娘達に声を掛けた。

「ボス、いくら何でもこんな年端も行かない娘に、ちょっと残酷すぎるんじゃないですか？」青山が窘めるように口にしたが、剛沢は聞こえなかった様に二人の様子を見詰めながら冷たい表情で無視した。

ステージでは今し方絶頂を迎えた二人が、布団の上に仰向けになって重い乳房を置いた胸を激しく上下させていた。

激しかった性行為の余韻に浸るように、お尻から尻尾の様に陰具を垂らしたまま下腹をピクピクと痙攣させていた。

前の割れ口からは泉のように愛液が溢れ出し、尻穴に咥えられたままの陰具を洗っていた。

突然、ズカズカとステージに上がった剛沢は、二人の後口から生え出た陰具を握り絞めると、力一杯引きずり出した。

腸を搔きむしるようなその激しい衝撃に、放心状態にあった二人は、はっと我に帰った。薄く目を開けた先にはブラブラ揺れる長い双頭のディルドウを握り絞めた剛沢が仁王立ちしていた。

「お前達、何時まで気持ちよさそうにオネンネしているんだ！さぼってないでショーを続けるんだ！これで何時もの様にキャッチボールしてみな！」と、言うのと横たわる二人の間に、小ぶりの双頭の陰具を投げてよこした。

小ぶりと言ってもそれは、今まで二人を責め苛んでいた双頭の筒具と同じ形状と太さで長さだけが20センチ程と短いだけであった。

剛沢の命令に逆らえない事を身を以て知っているお竜は物憂げに起き出し、俯せの姿勢をとって天井に向かって尻を持ち上げた。

そして、剛沢から受け取ったモノを両手を使って、虚ろになった孔に押し込み始めた。

柔らかく開いた肛孔はそれを難なく受入、見る見る内に呑み込んでいった。

その太い双頭の張り形は、お竜の腸内に完全に姿を隠した。

暁美も無言で起き出すと、お竜と同じように尻を高くもたげる姿勢を取って、上を向くお竜の尻に自らの尻を押し付けた。

突然お竜の尻穴が開きピューッと腸内に収められていた双頭のディルドウが飛び出し、暁美の菊花を目指した。

さっと開いた暁美の肛口はそれを受け止めると、スルスルと腸内に吸収していった。そして、それは完全に暁美の体内に姿を消していた。

次に暁美の後口が開くとお竜の尻穴めがけて発射した。それを受け止めたお竜が再び腸内に収容した。

見守る観衆には柔らかな陰具を介して二つの恥ずかしい穴の間にキャッチボールが行われ

ている様に映った。

「どうだ、お前達の母親は凄い芸が出来るだろう！」

隠微な芸当に顔を背けようとする愛美の顎を掴んでステージの方を向かせながら得意げに笑い声を上げた。

この尻穴を酷使した珍芸は女体に相当の疲労を課すのか、二人は眉根を寄せて苦悶の表情を浮かべながら続いていた。

遂に堪え切れなくなったように暁美が天井に向かって陰具を放出すると、そのままがつくりと前のめりになって崩れ落ちた。

「何だ？もうお終いか？しょうが無いな！」

ステージに敷かれた布団の上に俯せに倒れ込み、腰をピクピクさせながら荒い息を衝く二人の女を冷たい目で見詰めながら声を上げた。

そして、ステージのバックヤードに聞こえる様に大声を発した。

「ヘイ！ジミー！ジョニー！」

剛沢の呼びかけに応えるように、ステージの入口に掛けられた幕を開いて、二人の黒人男がノソリと姿を現した。

二人は瓜二つの黒人であり、身長は2メートル以上あり、アメフトの選手のように逆三角形の筋骨隆々とした逞^{たくま}しい身体をしていた。

一卵性双生児の二人は、元は‘史上最大のイチモツを持つ双子‘として喧伝され、かつてはアメリカで話題を呼んだポルノスターであったが、生まれつき知恵遅れの傾向があり、ポルノビデオとは言え一応ドラマであるから、役を与えられても台詞を覚えられるだけの知能も無く、演技力も全く無く、ただ肉欲の赴くままに激しく女体を突き立てるだけしか能の無い二人は次第にポルノ女優からも共演を拒絶されるようになって行った。

巨根だが大根役者の二人の出演するビデオは激しいセックスシーンは多いが作品としての面白みに欠け、次第に飽きられるようになり、オファーも少なくなってゆき、当初の話題性も乏しくなると何時の間にかポルノ業界から姿を消し人々の記憶からも消えていた。

その後、色々な職業を転々としたが、知能が一般人より劣り、女を抱く以外に能力の無い彼らに勤まる職は無く、スラム街でアルコールにまみれる荒んだ生活を送っていたのだった。

10数年前ポルノ女優から共演を拒否されるようになった頃、米国でのポルノビデオの制作が困難になって来たが、まだ二人の米国での人気は維持されていたので、起死回生を図って日本で日本人のポルノ女優を相手に撮影する企画が上がった。この時日本側で撮影機材の貸し出しや、相手役女優の手配をして制作に協力したのが大亜門戸会であった。怪物じみた巨根の二人であったが、海外デビューをしたいと願う裏ビデオの女優も多く、何人かの相手役を見つけることは出来た。

撮影の休暇中に彼らと個別に契約して、晴江達元目高組の女達の相手をさせたことのある剛沢は二人の事を良く覚えていた。

年月を経て客の数に陰りが出て来た暁美とお竜に単に売春行為をさせるだけでなく、淫靡なショーに出演させる事により人気回復を目論見、白黒ショーの相手役にさせるべく、金に糸目を付けず全米中を探し回り、日本に連れて来ていたのだった。

明日をも知れぬスラムでの生活より、剛沢の示した一女は抱き放題で三食肉を喰わせる一との好条件に喜んで来日し、暁美やお竜を相手にステージショーを展開するようになって既に数年経っていた。

生まれつき知能が低く、衝動を抑えきれず、制止も効かず欲望のままに行動する二人であったが、スラム街での荒んだ生活とアルコール依存により、その性格は以前にも増して衝動的で暴力的となっていた。

黒光りする厚い胸板と筋の割れた腹筋を強調するように申し訳程度に腰に着けていたラメが輝く小さなパンツを手早く脱ぎ捨てると、デロリとしたモノが股間から垂れ下がった。その大きさに観客は目を見張った。

既に何度もステージやそれ以外の私生活でも抱かれてきたお竜達であったが、魯鈍で暴力的なこの双子兄弟には未だに馴れることが出来ず、体力を使い果たし意識は朦朧としていたが、本能的に込み上げる恐怖に怯えて目を閉ざした。

既に何度も抱いた経験のある暁美とお竜であるが、その鍛えられた媚肉からは、抱く度に得も言われぬ快美感を得られることを熟知している二人の黒人男は、今再び目の前に供された犠牲の柔肉を前に獣欲を掻き立てられ、涎の垂れる口を嬉しそうに綻ばせた。

贅肉の無い固い筋肉に覆われた太い両脚の間から生え出た太くて長い肉塊は、しどけなく布団に横たわる女達に近づくに従い、ムクムクと鎌首をもたげ、天を向くようになった。

意識が朦朧となったままの女の腰を掴むと上に引き上げ、濡れそぼる女陰に自らの巨大な陰茎をあてがった。

そして、ズブズブと太くて長い肉塊を女の祠の中に埋めていった。

突然、華洞に強い圧力を感じて女達の意識が戻った。

息も止まるような圧迫感に苛まれ、身体を蠢かせて逃れようとしたが、巨人の力はそれを無視するように撥ね除け、鋼のような隆起を柔らかな陰門に埋没させていった。

先ほどまでの淫靡なショーで精魂使い果たし、痺れて腰も動かさない状態なのに、新たに加えられる責め苦に、犬のように背後から突き立てながら女達は泣き叫んだ。

そんな女達の悲痛な叫びも気にならないように、双子の黒人はその根元まで巨大な肉塊をねじ込んでいた。

何時も猥雑な客の目の前で演じる白黒ショーであったが、お竜と暁美は半ば痺れ切った下腹にその大きさと長さを改めて思い知らされた。

何度も二人に突き立てられた経験を持つとは言えど、いまだにその巨大さに女体が馴染むことは無く、女陰を襲う激痛に悲鳴を上げた。

二人の黒人は暫くの間、暖かく湿った絶妙な華洞を味わうようにじっとしていたが、やがてゆっくりと腰を動かし始めた。

男達の動きに併せて女達のすすり泣きの声が高くなった。

二人の巨人の腰の動きは次第に速く激しくなり、根元まで突き立てられる度にその衝撃で柔肉がブルンと震えた。

女達は歯を喰い絞め、両手で布団を握り絞め、子宮口に打ち付ける激烈な衝撃に堪えていた。

黒くて太くて長い陰茎が女の愛液に塗され淫門から出入りする様子が観衆の目に映った。

それは長い男根を強調するように深いストロークのピストン運動であった。

「どうだ、お前達の母親の今の亭主は、あの頭のいかれた黒人達だ！その内肌の黒い妹か弟が出来るかも知れないぜ・・・」

ガタガタと軀を震わせて憑かれたように見入る娘達に笑いかけた。

巨体の黒人兄弟の激しいピストン運動に汗まみれとなった暁美達は切れ切れの悲鳴を上げて身体を痙攣させていた。

そして、最前から繰り広げられた激しい肉体を酷使した艶技に興奮状態に置かれたままの

女体は容易に燃え上がり、逞しい男達の激烈な攻撃の前に堪えきれなくなって絶叫を上げて登り詰めた。

その瞬間男の肉塊を咥え込んだ膣口の奥からは暖かい愛液がどっと噴き出し、陰茎を洗った。

その気持ちの良さに男達は、絶妙な女体の中に肉塊を突き立てたまま腰を二度三度と痙攣させた。

女達を無理矢理逝かせて、自らも得も言われないような悦楽の境地に浸った感激に、黒人兄弟は喚声を上げて、女達の身体を跨いで互いの右手をタッチしあった。

しかし、この双子兄弟には、絶頂に達して抱きかかえる腕の中でピクピクと身体を痙攣させる女達をゆっくりと休めさせようとする優しさは持ち合わせておらず、相変わらず女体の中に膨張したままの自らの分身を突き立てたまま、股間を襲った発作が治まると、再び新たな快感を貪ろうとピストン運動を開始した。

身体的自由も効かない程疲れ果てており、泣いて哀願しても秘裂を串刺しにしたまま、決して解放しようとしめない男達の残酷さに狂った様に涙を流して叫び声を上げた。

女達の悲痛な鳴き声が男達の獣欲を一層掻き立てるのか、容赦なく激しく腰を振って責め立てた。

涙も涸れ果てて声も上げられないまま、大男達から一方的に責め苛まれる、肉と肉がぶつかる音だけが響いた。

見守る男達も単なる白黒ショーを超越した、一種残忍な女体の拷問ショーに鬼気迫るモノを感じて身じろぎも出来ず一心に見つめた。

まるで地面に杭を打ち込むように激しく腰を使いながら、ふと傍らにピンクとブルーの双頭のデイルドゥが転がっているのに気付いた。

ニヤリと淫靡な笑みを浮かべると兄がそれを手にした。兄の意図に気付いた弟ももう一つの陰具を手にした。

そして、男達の腰の動きに併せて反射的に開いたり閉じたりを繰り返している後口にその先端をあてがった。

激しく腰を抜き差ししながら、その太くて長い張り形を肛門に注挿した。

前の穴を太い怒張で責められながら、後ろの穴にも太い筒具が挿入されてくるのを感じて引きつった悲鳴を上げた。

そんな女達の反応も気にせず、激しく腰を使いながらその長さのほとんどを女の身体の中に埋め込んだ。

太い肉塊で前を蹂躪されながら、腸内に巨大な圧力を感じて女達の身体がブルブルと震えた。

男達は後口に突き立てたディルドウを握り絞めると、自らの腰の動きに併せる様にそれを操作し始めた。

前後の肉穴に同時に激しいピストン攻撃を受けて、お竜達の口から絶望的な絶叫が甞した。

調教開始

「ほら！絞めてご覧なさい！」

銀子が亜紀の秘肉の内側に中指を差し入れながら命令した。

全裸のまま後ろ手に縛られ直立する亜紀の前に銀子が床に膝を着き、その部分の色や臭いや肉付きなど女の構造を調べられていたのだった。

そして、今は指を駆使して女の機能を確認しようとしていた。

その様子を現在の剛沢の愛人であり、銀子による女体調教の助手を自ら申し出た百花と芽依がニヤニヤと冷たい笑みを浮かべて眺めていた。

そして、その外側に、剛沢の傍に^{はべ}侍り女帝のような権力を誇っていた愛人の落魄れた様子を一目見ようと、淫靡な笑みを浮かべた大亜門戸会の男達を取り巻いていた。

剛沢の寵愛を受けていた一番の愛人から牝奴隷の立場に墮とされた今の亜紀には銀子の命令に逆らいようも無く、今や立場の逆転した二人の愛人や下卑た男達の好奇の視線に晒されながら、恥辱にブルブルと腰を震わせ嚙り泣きながら、言われるままに股間に力を込め突き立てられた指を締め付けた。

そんな亜紀の羞恥の姿も気に留めず銀子は締め付け具合を確認しながら、

「流石に長年ボスの愛人を務めて来ただけあって、ここの出来は申し分ないようね・・・」と、指先を器用に動かして亜紀の女陰をまさぐりながら感心したように呟いた。

「ボスの命令では、亜紀姐さんを暁美やお竜並みの能力を持った売春婦に仕立て上げることだけど、普通亜紀姐さん位の年齢ならどんなに調教しても絶対に無理！と断るところだけど、長年ボスの愛人を務めて来ただけあって、此処の具合はまずまず良いようね・・・そ

こらの世間の同年輩の女よりは、良い道具をお持ちだわ・・・これなら暁美やお竜に追い付くのは無理としても、そこそこモノに成るかもね・・・感度もなかなか良さそうだし・・・」
恥辱に打ち震える亜紀ではあったが、人差し指も加えて二本の指先で肉洞内をまさぐられ、微妙な個所を刺激される度にアッアッと声を上げて身体を悶えさせた。
それ共にジワジワと樹液が湧き出し、内部をまさぐる銀子の手を濡らし始めた。

女陰の具合を確認し終えた銀子は後手に縛られたまま直立する亜紀の立ち位置を変えさせ、尻が自分の方に向くように立たせた。

床に胡坐座りする銀子の目の前にボリュームのある亜紀の臀部が鎮座した。

成熟した女らしい白い柔らかな尻肉ではあるが、世間の中年女みたいにだらしなく垂れ下がっていない、張りの在る形の良い双丘を見詰めて、

「暁美やお竜のような娼婦に成るためには前だけじゃ駄目よ・・・後ろの穴も使って男を有頂天にさせたり、恥ずかしい芸を披露できるようにならないと・・・」

と、呟きながら両手を尻タブに添えて思い切り左右に押し開いた。

隠れていた谷間の奥が見詰める男女の視線の前に露わとなって、アッ！と悲鳴を上げて激しく首を振り立てた。

そんな亜紀の狼狽ぶりも無視して、「ふーん・・・痔の経験も無いようだし、綺麗な円形の形の良いアヌスだわね・・・」と、その部分の様子を極めて事務的に観察し続けた。

「ほんまや！綺麗な形の良い尻穴をしてるで！」

銀子の横に膝を着きその部分を覗き込んだ百花が嬉しそうに声を上げた。そして、同僚の芽衣に「ほら！アンタも見せてもらったらどうや！」と、誘う様に声を掛けた。

百花の言葉にその部分を直視した芽衣は先輩の愛人の無様な姿にブッと思わず込み上げて来た笑い声を噛み殺した。

これまで顎で使って来た男達だけでなく二人の後輩の愛人からも双臀の間を視姦され、屈辱感に薄い臍脂色を帯びた排泄口がピクピクと痙攣した。

アーッ！突然亜紀の口から悲鳴が上がった。

亜紀の双臀を押し広げていた銀子が尻肉の谷間に顔を押し当て、舌を伸ばしてその部分をゾロリと掃いたのだった。

「フフ・・・とっても美味しそうなアヌスだったから思わず嘗めて見たくなったのよ・・・とっても良いお味だったわよ・・・」

亜紀の大きな狼狽ぶりに照れたように笑顔を作った。

「それにしても、この部分の感度も良さそうね・・・」と、中指の腹を綺麗な放射状の皺を描く中心部に押し当てながら呟いた。

指先でたっぷりとクリームを掬うと、その部分に押し当てた。

窪んだ中心部から広がる皺の一本一本に塗り込むように丁寧に潤滑クリームを塗して行った。

そんな銀子の何故か優しい指使いをその部分に受けると亜紀はハッハッと息を荒げガクガクと腰を震わせ始めた。

突然銀子の指先が後口を割ってズルリと腸内に侵入した。

銀子の指先を直腸内に感じて、「イヤー！やめて！抜いて！」と腰をブルブルと震わせて泣き叫んだ。

そんな亜紀の身悶えぶりを無視して、「貴女、ここをボスに使わせた事があるでしょ？」と、問いかけた。

銀子の問い掛けに、顔を赤く染めて激しく頭を振った。

「うそおっしやい！あの尻穴に目の無いボスが、こんなに美味しそうなアヌスを放っておくわけ無いわ！」

指を二本にして突き立て、尚も内部をまさぐった。

「貴女、随分とこの部分が感じるようね？」

後口を犯す銀子の指摘を打ち消すように顔を真っ赤に染めて激しく頭を振った。

「これまでボスから相当鍛えられたんでしょ？・・・お尻の穴でイッたことある？」

銀子の質問を否定するようにブルブルと顔を左右に揺さぶった。

「ホホ・・・貴方がどんなに感じ易いか証拠を見せて上げるわ・・・」

頑なに否定する美熟女を虐待することを楽しむように微笑むと、傍らに置かれたディルドゥを手にした。そして、指を抜き取った跡にその先端をあてがった。

今や亜紀を取り囲む残忍な男女は目をランランと光らせ、その部分を注視した。

その好色な視線の中で、野太い筒具が狭い後口を押し広げ、周囲の皺を延ばしてズブズブと埋没して行った。

「どう？良い気持ちでしょ？」

淫具を送り込みながら笑みを浮かべて問い掛けた。

ディルドゥが少しずつ体内に消えて行くのに合わせる様に亜紀の腰がガクガクと震え、最

早自分では立っていられなくなった事に気付いた男達が慌てて両側から支えた。

根元まで挿入を終えた淫具を握って、今度はゆっくりと亜紀の反応を確かめる様に上下に動かした。

銀子の絶妙な筒具の操作に煽られ、肛孔から込み上げる怪しげな快感に支配され始めたのか、淫具の動きに合わせて腰が悶え動き口から甘い呻き声上がる様になって来た。

「貴女、ボスに何回お尻の穴を使わせた事があるの？」

淫具を操作しながら優しい声で問い掛けた。

「に・・・二・三回です・・・」

腰部から込み上げる快美感に支配され気もそぞろになった亜紀が呻くように口にした。

「月に？」

尚も問い掛ける銀子の言葉に激しく首を縦に振った。その瞬間、自分の秘められた事実を知られてしまったことに羞恥心が蘇ったのか顔を赤く染めて首を垂れた。

お竜と大して年の違わないヤクザの組の年増女がこのような初々しい羞恥の表情を浮かべた事に銀子は新鮮な驚きを感じていた。

そして、亜紀の他に二人の愛人を抱え、その他の女ともセックスするであろう剛沢にとって亜紀と交接する機会は精々月に二三度だろうと想像すると、ほぼ毎回前も後ろも使わせていたことが判った。

銀子の淫具の操作に煽り立てられ今や亜紀は前門からも夥しい樹液を溢れさせていた。

「良いわ・・・こちらにも上げるわ・・・」

片手で後口を責め立てながら、もう一方の手で新たな筒具を掴んだ。

そして、目に淫靡な光を滾らせる二人の若い愛人の方を振り返ると、「貴女達、亜紀姐さんの身体をもっと知りたいんでしょ？」と、艶然と微笑んだ。

銀子の言葉に欣喜雀躍した二人は、早速立位の亜紀の前後に陣取り、百花は銀子から後ろを受け継ぎ、前にしゃがんだ芽衣は新たなディルドゥを握り締めた。

「今まで世話になったお礼に素敵な気分させて上げるわ・・・」

そう口した芽衣はこんもりと淫裂の両側に生え出た春草を左右に掻き分け、その柔らかな毛に覆われていた部分を露わにしてニンマリと微笑んだ。

「フフ・・・オバサンのくせして随分と綺麗なオコを持っているじゃない。それに年甲斐も無くダラダラとお汁を流したりしてさ・・・少しは恥ってモノを知らないよ・・・」と、

淫具の先端で流れ出た愛液を掬う様にして、先輩の情婦をなじった。

百花により背後から責め立てられ気もそぞろになりながらも芽衣の陰湿な言葉廻りにゾッとするようなモノを感じた。

「何さ！こんな恥ずかしいモノをにと突き出してさ！自分でも恥ずかしいと思わないの？」

包皮から突き出したルビー色の肉芽を摘まむと思いつねり上げた。

アアーッ！痛い！芽衣から女の急所を責められて激痛に腰を振り悲鳴が上がった。

年上の女を痛めつけることに満足したのか、芽衣は手にした淫具の先でピタピタと女陰を叩きながら、「欲しいんでしょ？これが？・・良いわ今から入れて上げるわ・・」と、ニンマリと笑みを浮かべると花蜜を垂れ流す淫孔に狙いを定めて淫具の先端を押し当てた。

ぐっと力を込めて押して出ると毒々しい形状のディルドゥはズブズブと淫門の中に没して行った。

「アア・・イヤ、イヤ！」

後ろから野太い筒具を突き立てられ、今また前から淫具を突き刺されることに恐怖を覚えたように悲鳴を上げた。

「ウソおっしやい・・本当は気持ち良くって仕方ないんでしょ？・・ほら、このみっともないババアのオコが口を一杯に拵けて、ダラダラと涎を流しながら、嬉しそうに太いのを呑み込んで行くわよ・・」

尚もディルドゥを送り込みながら残忍な笑みを浮かべた。

「ボス一人の愛人だった亜紀姐さんは、流石に前と後ろから同時に責められた経験は無いでしょ？」

二人の若い女に前後から責め立てられ身悶える亜紀に銀子が声を掛けた。

「前後からサンドウィッチにされる気持ち良さを骨身に沁みて覚え込むように素敵な気持ちにさせて上げて！」

前後から責め上げる百花と芽衣を励ますように声掛けした。

「貴方達もただ身体を支えているだけでなくオッパイを揉んであげたら・・」

亜紀の身体が崩れ落ちない様に両側から支えている男達にも声を掛けた。

「えっ？良いんですか？」

これまで手を触れることも出来なかった最高位のボスの愛人を弄ぶことを許され、二人の男は顔をほころばせた。そして左右から抱きおもりのする豊満な乳房を驚掴みにした。

前後の急所を責め立てられ、両の乳房を揉みしだかれ亜紀は耐えることも出来ず喜悦の声を発していた。

蟻が蜜に群がる様に、見物していた男達も亜紀の身体に取り付きその吸い付くような肌を撫でまわした。

すっかり惑乱した亜紀は男達の求めるままに唇を合わせ舌を絡めあった。

淫猥な男女により周囲から責め立てられ汗まみれになった亜紀は、不意に絶叫するような声を発して絶頂に達した。

「ふふ・・・流石の亜紀姐さんも目出度くゴールインね・・・」

何人もの悪鬼達から煽り立てられ凄まじい絶頂を迎えた亜紀は意識を失って埃じみた冷たい床に横たわっていた。

前後の淫門に突き立てられたままの筒具が余韻を楽しむようにピクピクと蠢いていた。

「これで亜紀姐さんが前の穴も後ろの穴も使い込まれていて、十分に開発済みであることが判ったわ・・・ボスの命令は1か月以内にお竜や暁美並の特殊技能を持った売春婦にすることだけど、案外モノに成るかもね・・・後は、娼婦の必須事項としてお口の使い方だけど・・・こればかりは気持ち良いかどうか女の私には判らないわね・・・」

その時、剛沢が様子を見にやって来た。剛沢の隣には偶々^{たまたま}商談に訪れた悪徳金融業の沢田と剛沢の懐刀に定着した青山が従っていた。

「ああ、沢田さん！丁度良い処に来たわ！この女の口嘗めの試験台に成って欲しいの・・・」と、冷たいコンクリートを打ちっぱなしにした床に横たわる亜紀を指さした。

沢田は其処に日頃見知っている亜紀の全裸姿を見つけて、流石に驚いた表情を浮かべて剛沢の方を振り返った。

「銀子のリクエストだ！どうかおフェラの試験台になってくれ。」

平然と笑みを浮かべて口にする剛沢に、「本当に良いんですか？」と、重ねて問い掛けた。特別な感情も浮かべず、ただ、ああ、と首を縦に振ると、「俺も此奴の口遣いは十分に仕込んだつもりだ。きっと満足して貰えると思うぜ・・・」と、口にしてニッと笑った。

意識を失い冷たい床に横たわる亜紀の惨めな姿を目にして、青山の心に憐憫の情が湧いた。その疲れ切った身体から、自分が此処に来るまでの間どれほど酷い虐待に遭ったか想像でき、これまで剛沢の権力を背景として女帝の如く振舞って来た傲慢な女もただ一度裏切っ

ただで、まるでぼろ雑巾の様に惜しげも無く捨てられる姿を目の当たりにすると、剛沢の心の中には長年情を接して来た女にさえも愛情などと呼べる感情など存在せず、ただ全ての人に対して激しい憎しみと怒りだけが渦巻いているのでは無いか―と、ゾッとするものを感じた。

隣では沢田が上着を脱ぎネクタイを緩め始めていた。

そのままズボンを降ろし、シャツを脱ぐ様子を見て、銀子が、「ちょっと！沢田さん！おしやぶりの試験台をやってもらっただけだから、ズボンの前を開けてお■■■■ンを出すだけで良いのよ！」と、慌てて声を掛けた。

「私はね、女とヤル時には素っ裸にならないと調子が出ないんですよ。」と、銀子の声を無視して、そこに居る男女の視線も気にせず着ている物を脱ぎ続けた。

沢田と会ってから二十年近く経つが、ジムで鍛えられた筋肉美は少しも衰えていないと感じた。

百花も芽衣も着痩せして見える身体つきに関わらず厚い胸板と筋の切れた腹筋に熱っぽい視線を送った。

「おい！何時まで気持ち良さそうに寝ているんだ！目を醒まさないか！」

剛沢が倒れ伏す亜紀の上体を揺さぶって起こした。

はっと意識を取り戻した亜紀の目に自分を貶めた剛沢の姿が目映り、キッと睨み付けた。

「何怖い顔しているんだ？これからそこに居る沢田さんのモノを喰えるんだ！」

亜紀の後ろ髪を鷲掴みにすると沢田の方を振り向かせた。

其処には日頃顔見知りの沢田が全裸で立っているのに気付きギョッとした。肩幅に開いた両脚の付け根からは巨大なモノが鎌首を擡げていた。

「これは、これは亜紀さん。久しぶりですね・・変なお会い方をしますが、剛沢さんの依頼でね・・貴女のフェラチオの技量の試験をやらさせていただきますよ。」

気障なメタルフレームの眼鏡の奥で、目が淫靡に笑っていた。

沢田の生臭い視線に羞恥心が込み上げて来て、両手で胸を隠して両膝を立てて股間を隠し身体を小さく曲げた。

「何を恥ずかしそうにしているんだ！さっさと沢田さんのモノを喰えないか！」

後ろ髪を握り締めたまま屹立する沢田のモノに顔を押し付けた。

良く見知っている沢田にまで身を穢されなければならないのかと思うと、悔しくて涙を浮

かべながら顔を左右に振って肉塊が顔に触れるのを避け続けた。

それでも執拗に押し付ける剛沢の力に根負けしたのか、抵抗を止めると、肉厚の蠱惑的な唇を開いて舌先を覗かせ、目の前に突き出された熱を帯びた肉塊に舌先を触れさせた。

沢田の凶暴さを秘めた荒々しい男の臭いが鼻腔に満ちた。

亜紀が舌を駆使して男のモノを愛撫し始めた様子に、取り囲む男女は驚いた表情を浮かべてジッと見詰めた。

「そうそう・・・大変お上手だ！私は以前から亜紀さんの事を大変魅力的な女性だと遠くから見ていたのですよ・・・その美しい亜紀さんから私のモノを嘗めてもらえて大変幸せだ！」キザ男の沢田は亜紀に舌を駆使した奉仕をさせながら、齒の浮くようなお世辞の言葉を並べ続けたが、亜紀の舌や口唇を使って男のモノを愛撫する技術は本物であった。

男のモノを愛撫することに熱が入って来た亜紀は、その行為に縋って今の惨めな自分の姿を忘れようとするかのように、逆に激しく男のモノを責め立て始めた。

唇を大きく開くと、長大な肉茎を口内に迎え入れた。

暖かな唾液で潤い、柔らかな口内の肉や舌に迎え入れられ、亜紀の口内の絶妙な感触に思わずウッと唸って腰を蠢かせた。

「あー！良い！とても上手だ！今は亡き晴江姐さんのディープスロートを思い出しましたよ！」

と、太く長い男根を根元まで呑み込み、喉の奥の肉を駆使して亀頭部を刺激する亜紀の技術に、腰をビクビク震わせながら感激の声を上げ続けた。

「あー！このおフェラの技が在れば直ぐにでも売春婦として売り出せますよ！」と、感激して大声を上げた。

そして、そのまま二三度腰をガクガクと痙攣させて大量の精液を咽の奥に放出した。

突然大量の男の熱いモノを口内深くに受けて、ピクピクと蠢く男のモノを咥えたまま目を白黒させた。

「馴染みの沢田さんからの折角のプレゼントだ！残さず呑み込むんだ！」

気管を塞がれ息が詰まりそうになりながらも必死に喉を上下させて粘つく粘液を嚥下しようとする美熟女に冷たく命令した。

口を大きく開け、咥えていた勃起したままのモノを離し、プハーと大きく息を吐いた。

唾液と精液でテカテカと濡れ光る亀頭部と亜紀の口が粘っこい糸で繋がっていた。

「如何しました？折角ですからそのお口で綺麗に拭って下さい。」

沢田の長大なモノを吐き出してせき込む亜紀に冷たく言い放って、髪を掴んで再び唇をこじ開け、白濁した粘液に塗れた肉塊を押し込んだ。

「そうです、そうです・・あー・・良い気持ちだ！」

亜紀の舌先で綺麗に汚れを拭われながら気持ち良さそうな声を上げた。

「鈴口の中に残った物も綺麗に吸い上げるんだ！」

隣で剛沢が命じた。

脂汗に塗れながら男二人に指示され舌先を駆使して奉仕を続ける亜紀の姿があった。

「あー・・良い気持ちだ！まさか亜紀さんがこんなテクニックをお持ちとは知らなかった。

流石は剛沢さんの愛人ナンバーワンだ！」

亜紀に口腔を使った奉仕を続けさせながら感激して声を上げた。

「こんな素晴らしい亜紀さんに何か差上げたくなくて来ました。どうか受け取って下さい！」と、一言口にするると緊張を解いて、突然口内に放尿を始めた。

剛沢に睨まれて吐き出すことも出来ず、死ぬ思いで喉を上下させてゴクゴクと呑み込んだ。美熟女を此処まで貶めたという勝利感で笑い声を上げながら何時までも亜紀の口内に小便を注ぎ続けた。

「剛沢さん！良い娼婦を手に入れましたね！これなら客も大勢押し寄せ、また金がガッポリ入って来そうだ！」

と、征服感に浸りながら大声で笑い上げた。

「沢田さん！折角の機会だから亜紀の前と後ろの穴も楽しんで行ったらどうだい？」

散々亜紀を虐待して余韻に浸る沢田に剛沢が声を掛けた。

「それは助かりますね！私も軽く抜いてエンジンがかかり始めた所で、この後興奮した身体をどうしようと思っていた所ですよ！」

後手縛りの立位のまま天井から吊り上げられた亜紀の身体の前に沢田が立った。

既に何かに期待するように股間からは巨大なモノが鎌首を擡げていた。

「それじゃ、剛沢さんのご厚意だ。頂かせてもらいますよ！」

沢田が身体を密着させると秘裂を押し割る様に肉塊を押し入れて来た。

既に長時間の淫猥な責めにより亜紀の女の花園は十分に濡れそぼっており前技の必要は無かった。

亜紀の身体は小柄というほどでなく平均的な身長であったが、長身の沢田から突き上げら

れ背伸びしても爪先が床から離れそうであった。

自分の体重を秘孔で支える圧力に呻き声を上げたが、頬を両掌で固定した沢田が唇を奪い呻き声を塞いだ。

宙吊になった亜紀の身体を沢田が突き立てる様子を見続ける内に剛沢はズボンのチャックを降ろし自分の分身を抜き出した。

それは既に猛々しく隆起していた。

「亜紀、久しぶりに入れてやるぜ！」

前方から沢田に抱かれ呻き声ともヨガリ声ともつかない声を漏らす亜紀に近づいた。

熱を帯びた剛直がその部分に触れるのを感じて、亜紀はイヤ、イヤと切なそうに口にした。

そんな亜紀の哀願を無視して剛沢は腰に力を込めた。

輪状の筋肉を押し広げ、硬直したモノがメリメリと腸内に侵入を始めた。

前部の秘孔を占有する沢田も薄く柔らかな壁越しに侵攻して来る圧力を感じて、「これは、これは、剛沢さん。剛沢さんとは長い付き合いですが、こうして女を挟んで3Pをするのは初めてですな・・・」と、笑いながら声を掛けた。

「まあ、そういう事だな・・・」

前方からは沢田が突き立て後方からは剛沢が突き入れていた。

二人の性豪の隆起したモノは、深々と亜紀の体内に没し、根元まで柔肉に啜え込まれていた。

背面から貫通させた剛沢は前に回した手で、むっちりした乳房を揉み上げ、紅バラ色の乳首を指先で扱いた。

長年の閨房を通じ亜紀の性感帯を知悉する剛沢は、丹念に泣き所を責め立てた。

自分を弊履の如く捨て去った男一と、心では憎み拒絶しようとしても、剛沢により開発されて来た身体は心を裏切り、乳首は転がす掌の中で硬く痼^{しこ}っていくのだった。

既に長時間に渡って亜紀は、二人の性の達人の業物に挟まれ、呻き声を上げ脂汗を流して悶え苦しんでいた。

「流石に剛沢さんが長年連れ添って来た愛人だけの事はある。素晴らしい絞め具合ですよ！それに中の感触も非常に良い！」

前方から腰を小刻みに動かしながら沢田が感嘆の声を上げた。

「亜紀！お前も男二人からサンドウィッチにされたのは初めてだろう！どうだ？良い気持

ちだろう？自分ばかり楽しんでないで、前の穴と後ろの穴を上手に使って俺たちを同時にイカすんだ！いいな！」と、二人の男の攻撃をまともに受け、上気した身体からタラタラと汗を流しながら、フウフウと切なげな息を漏らす亜紀に、後ろから冷たく言い放った。この後、^{きそくえんえん}氣息奄々となりながらもなんとか残された氣力を振り絞って二人の性豪を同時に放出させた亜紀であったが、それで満足する男達では無く、持ち場を入れ替わった二人はその後も容赦なく亜紀を責め立てた。

少女無残

曉美とお竜の凄まじいステージは既に終了しており、舞台は綺麗にかたづけられ、後には何の痕跡も残されていなかったが、ステージ前に座らせられた三人の娘は、目の前に繰り広げられた酸鼻なショーの余韻で未だに放心状態で取り残されていた。

「どうだ？お前たちの母親のショーは面白かったか？」

先頭に立ってぞろぞろと一団を引き連れて来た剛沢が愉快そうに尋ねた。

どれほどの長さの間そうであったか分からないが、まるで気を失ったように没我状態にあった娘たちは、剛沢の声でハッと我に返った。

そして、目の前にはガランとした何もない舞台が在るだけで、最前まで目の前で見せつけられたあの淫靡で残酷な舞台が本当に現実のモノであったかといぶかるのであった。

しかし、自分達の実の父親と信じて育った剛沢の、「これでお前達がどういう娼婦に成らなきゃならないか目標が分かったろう。」と言う冷酷な言葉で、あれは現実にあった事なのだと思いますのであった。

「そうよ、貴方達のお母さんに一歩でも近づけるよう明日から猛特訓を始めるからその積りでいて・・・」

剛沢につき従って来た銀子の声に娘たちは振り返った。

そして、この美麗であるが氷の様に冷たい無表情の女にゾッとするものを感じた。

「別に怖がらなくても良いのよ・・・特訓には貴女達がママと呼んでいる亜紀さんも加わるから心強いでしょ・・・」

「ほら何ぐたっとしているんだ！しゃきと歩かないか！」

「あれしきの事で腰が抜けるなんてボスの愛人ナンバーワンとして恥ずかしいぞ！」

列の最後から笑い声の様な歓声の様な男達の声が聞こえて来た。

そして取り囲む男達から引き摺られる様に亜紀が連れて来られた。

凌辱の限りを尽くされ、立って歩くことも出来ない程疲弊した身体を男達により両側から支えられ、すっかり憔悴の表情を浮かべる顔には、テニスボール大の赤い球状の緘口具が厳しく顎をこじ開けて噛まされ、裸の胸には、たわわに垂れた乳房を絞り出すように乳房の上下を何本もの麻縄で縛り上げられ、余った縄で厳重に後手に縛り上げられていた。

そして、男達が放出し秘奥から流れ落ちた粘液が乾燥した生々しい痕跡が太股に残されており、蹂躪の限りを尽くされた股間には、黒い革ベルト状の貞操帯が下腹から尻に向けて女の谷間を挟んでいた。

その変わり果てた亜紀の姿にショックを受けた娘たちは、ママ！と悲痛な叫び声を上げた。娘達の声にハッと意識を取り戻した亜紀は、項垂れていた顔を起こして娘達に向けて何か言おうとしたが、厳しく噛み込まされた緘口具により声を塞がれた。

「このお嬢さんたちも、売春婦となって大亜門戸会の為に働く訳だ！これは益々商売繁盛しそうですね！」

同行して来た沢田が嬉しそうに笑い声を上げた。

この銀縁メガネにきっちり^とと頭髪を梳かし付けた色白のキザ男はこれまで何度もS市内の高級住宅街に居を構える剛沢の本宅を訪れたことが有り、三人も見たことはあったが、その身体から発散する爬虫類の様な不気味な雰囲気^とに何時もゾッとするようなモノを感じ、本能的に毛嫌いしていたのだった。

「最後に見た時はまだ幼い女の子の様でしたが、今では胸も膨らみアソコにも毛が生えて一人前の女に成りましたな・・・」と、三人の裸身をジロジロと無遠慮に見詰めた。

この男の蛇の様な陰湿な目で糸纏わぬ身体を眺められる恥ずかしさに、パイプ椅子に縛り付けられた身体を悶えさせた。

「今日はもう遅いから余り多くの事は出来ないけど、明日の準備をしておかないとね・・・」と、銀子が口にして三人の娘を椅子から解くように男達に指示した。

「この準備が終わったら今日はもう終わりで、明日の朝に備えて身体を休めるのよ。」

と、口のすると男達に命じて仲間内で検診台と呼ばれている台を運ばせた。

それは、頑丈な鉄の骨組みを溶接した物で幅70センチ奥行40センチ高さは50センチ

程の台であるが、高さは自由に調整可能となっていた。

台の上面は女をうつ伏せか仰向けに寝かすため、革のカバーで覆われたクッションとなっており、太い4本の脚には女の手足を固定するための枷が取り付けられていた。

上に載せられた女が少々暴れても揺るがないよう頑丈に作られた重い台を男二人掛りでフウフウ息を切らせながら運んで来た。

先ず一つの検診台が置かれ、少し距離を置いて3つの台が平行に並べられた。

先頭の台の上に亜紀がうつ伏せの姿勢で寝かされた。

男達が手早く脚に取り付けられた枷に手足を固定した。

台を跨ぐような姿勢となり亜紀の大腿は大きく開けられ、ムッチリと成熟した腰回りと股間が晒される形となった。

顎が外れそうなほど大きく口を割っていたボール型の猿轡が外され、フーッと息を吐いた。

亜紀の後方の3台の検診台に亜紀と同じように3人の娘が固定された。

少し顔を上げれば、^{ひら}抜ききった亜紀の股間が直視できる配置に、このまま股間を責められれば、その様子を娘たちの目に晒すことになる！と、銀子の意図を察してイヤイヤと首を振った。

全ての手配が終わり、うつ伏せに固定された娘達の背後に立った銀子は、股を大きく広げられ剥き出しとなった娘たちの股間を繁々と見つめ、「ふーん・・・流石に男の手が付いていないオコヤお尻の穴は綺麗なモノね・・・私にもこんな時代が在ったのかしら？」と、呟いた。

「ほんまや！綺麗なもんや！透き通る様なピンク色してて、まるでお花畑みたいや！」

百花と芽衣も娘たちの間をめぐりながら感心したように声を発した。

亜紀は本宅に居ることが多く、百花と芽衣は常に本部に居るので、娘たちはこの女達に会った事は無かったが、直感的に剛沢の愛人であることが判り、このような不浄な女達から秘所を覗かれることに言いようの無い羞恥と嫌悪を感じブルブルと腰を震わせ続けた。

ひとしきり娘たちの股間の鑑賞を楽しんだ後、銀子は手をパンパンと叩きながら、

「これから貴方達を娼婦として調教すると言っても、処女膜は最初に貴方達を買ったお客さんに破ってもらう事にするから、前の穴には手を付けずに置くわ・・・その代わり後ろの穴とお口には徹底して磨きを掛けるからね！前の穴と後ろの穴は一つの筋肉で結ばれてい

るから、後ろの筋肉を鍛えれば、前の部分も自然と鍛えられる筈よ！取り敢えずお尻の穴を使って男を喜ばせたり、バナナ切りや卵の出し入れができる様になったら卒業よ！1か月後には、貴方達をオークションにかけて一番高い金額を付けて貰った人を買って貰うからね！オークションの資料として貴女達の調教状況は全てビデオに撮らせて貰うわ！」

銀子の口にした通り、何台ものカメラや撮影機材が運び込まれ、克明に記録され始めた。検診台の上に横たわり大きく広げさせられた花園の様子が照明に明々と照らし出され、優美に開く桃の割れ目も可憐な菊花も影も作らず撮影されて行った。

「さてと、この子たちは三人だから私一人では手が回らないから、百花さん、芽衣さん、一緒に手伝ってくれる？」

銀子に指名された若い愛人たちは顔面一杯に喜色を浮かべ、「他ならない銀子姐さんの頼みや！何でもやらせて貰いますで！」と大声で応えた。

嫌悪するこの女達に自分の身体が弄られると知って、娘たちは台に縛り付けられたままイヤイヤと首を振った。

「それで、何をすれば良いんや！」

「先ず、お尻の穴でオモチャを受け入れることが出来る様を開かせてちょうだい。いきなり突き立てたら裂けてしまうからクリームを優しく塗り込んで少しづつ慣らして行くのよ！」

と、媚薬の入った怪しげなクリームの瓶を手渡した。

「よっしゃ！分かった！」

潤滑用のクリームを受け取りながら嬉しそうに声を上げた。

「それじゃ姉さんがクリームを塗って上げるさかいな！」

栄美の後に陣取った百花が、中指の先でたつぷりとクリームを掬い取り、可憐なピンク色の小菊の中心に押し当てた。

「アアッ！イヤ！」唾棄すべき女の指がその部分に触れるのを感じて悲鳴を上げて尻を震わせた。

「心配せんでも良え！今素敵な気分^{ハズ}にさせたるさかいにな！」

栄美の悲鳴を無視して血走った目で肛孔やその周囲にクリームを塗りつけて行くのだった。隣では銀子が愛美に、芽衣が希美にクリームを塗り付け悲鳴を上げさせていた。

検診台に固定された亜紀は後ろを振り返ることも出来ず、背後から聞こえて来る娘たちの

悲鳴を耳にして不安な表情を浮かべていた。

そんな亜紀の様子に気付いた剛沢は、「お前は娘たちの事なんか気にせず、自分の身体を鍛える事だけを考えていれば良いんだ！」と、股間から垂れたコードの先に付いたリモコンのスイッチを入れた。

亜紀の前後の秘孔にはそれぞれ大きなバイブレータが呑み込まされており、秘裂を一文字に切り裂く革ベルトは、その脱落防止のためであった。

突然前後に突き立てられたバイブが強烈な振動を始め、身体を仰け反らして呻き声を上げた。

バイブに責め立てられ喘ぎ続ける亜紀の姿を確認して、娘たちの方に戻った。

「どうだ？娘たちのココは？」

愛美のアヌスにマッサージを続ける銀子に声を掛けた。

「ええ、良いようよ・・・仕込み甲斐がありそうなお尻の穴だわ・・・」

丹念にクリームを塗り込めた銀子の中指の爪先は既に菊花の中心に没していた。

「アアッ！痛いわ！ねえもう良いでしょ！取って！」

指先が輪状の筋肉を押し広げる気味の悪い感触に悲鳴を上げ続けた。

「こんなもの普段しているウンチに比べれば全然細くて痛い訳無いでしょ！」と、笑って応えると、「むしろ、気持ちいいくらいでしょ？これからもっと気持ち良くさせて上げるわよ！この感覚が病みつきになるわよ！」と、第一関節まで埋まっていた指を第二関節まで、そして指の付け根までゆっくりと挿入した。

銀子の指の侵入を受けて悲鳴を上げ続けた。

愛美の哀切の声にも関わらず、ゆっくりと指の抜き差しを続けた。

いつしか、銀子の指を受け入れたその部分がカーッと熱を持ち、ドクドクと脈動を始めるのを感じていた。

指の先を丸めて腸壁をマッサージすると、鼻の頭に汗を浮かべ、眉を顰めてハアハアと息を吐いていた。

「どう？良いでしょ？感じるでしょ？」

と、微笑みながら問い掛けた。

「そろそろ、こっちの番ね！」

充分に肛口が開いてきたと感じて、細身の筒具を手にした。

それは長さ 15 センチほどで銀子の指より一回り太い軟質樹脂で出来た淫具であった。

指を抜き取った虚ろに先端を押し当てると、そのままスルスルと中に押し入れて行った。

弾力のある長い棒状の物が内部にどんどんと入って来る不気味な感触に、

「何？・・・何？・・・怖いわ！」と腰を震わせた。

奥まで挿入したモノを今度はゆっくりと抜き出し、何度も往復させた。

隣では百花と芽衣も淫具を娘たちの後口に挿し入れていた。

何度も抜き差しを繰り返して、お尻の穴が淫具に馴染んだ頃を見計らって、それより少し太くて長い淫具を手にとった。

「アアーッ！嫌よ！痛いわ！」

新たな拡張具を後口に突き立てられ身体を震わせて悲鳴を上げた。

「嘘おっしやい！この程度のモノが痛い訳無いでしょ！」

と、平手で白い尻を叩くと、

「貴女のママを見てごらんなさい！こんな大きなモノを二つも入れているのよ！」

と、亜紀の傍に寄って、バイブの脱落を防止していた革ベルトを外した。

二つの秘孔に埋め込まれ、荒れ狂うバイブの刺激に煽られ、耐えられず愛液を垂れ流す股間を娘たちに直視される羞恥に、「イヤー！見てはだめ！見ないで！」と、悲鳴を上げた。亜紀の悲鳴に、つい顔を上げてしまった娘達の視線の先に、野太いバイブを上下に咥えさせられた亜紀の良く張った白い尻が在った。

尻穴を扼していたバイブをズルリと抜き取った。

跡には、赤黒い内部を晒す虚ろがポツカリと開いていた。

「よく見てごらんなさい！これが亜紀さんのお尻の穴に入っていたモノよ！これがあなたたちのお尻に入っていたモノよ！全然大きさが違うでしょう？」

銀子は娘達の眼前に二つの淫具を示した。

亜紀の体臭が漂う醜怪で巨大なモノを鼻先に突き付けられ、娘たちは硬く目を閉ざした。

「兎に角、今夜中に尻の穴をおっ広げて、明日には男のモノが入る様にするんだ！」

調教の様子を見ていた剛沢が声を発した。

「おい！近藤！お前がアナルセックスの見本を見せてやれ！」

近藤ではなく棍棒だとあだ名され、組の中でも一番大きなイチモツを持ち、大亜門戸会の制作するポルノビデオにも男役として度々出演する男が、剛沢から指名されて前に進み出

て来た。

「明日の予習だ！亜紀とその男が繋がる様子をよく見ておけ！」

亜紀も度々大亜門戸会制作の裏ビデオを見せられ近藤の事は良く知っていたが、剛沢のモノを凌ぐかも知れない豪刀で尻穴を使ったセックスする姿を娘達の目に晒すことになる惨めさに恐怖した。

「ボスの命令とあったらやりますが、良いんですかい？」

近藤がチラリと剛沢の方を見た。

いかに捨てられた女とはいえ、自分が見ている前では元ナンバーワンの愛人を犯すことに気後れするだろうと感じた剛沢は、

「俺たちは沢田さんと仕事の話があるから外すが、後は好きにやってくれ。」と言うと、沢田と青山を伴って立ち去った。

「それじゃ、ボスの命令だ。姐さん、悪く思わないで下さいよ。」と、検診台に縛り付けられた亜紀に迫った。

既に股間からは長大なモノが隆々と屹立しているのを目にして、娘達の目の前で醜態を晒すことに羞恥を覚え、イヤ、イヤと力無く呟いた。

亜紀の背後に立った近藤はいまだに前門を抉っていたパイプを驚掴みにするとズボリと音をさせて抜き取った。

巨大なパイプに塞がれていたポツカリと開いた肉の洞窟から熱い樹液がどっと溢れ出た。検診台の高さを長身の自分の身長に合わせて、「これだけ身体の準備が出来ていたらそのまま入りそうだな・・・」と、独り言のように呟き、前門を塞いでいたネットリとした愛液に濡れた淫具を二三度後口に潜らせ潤滑すると、いきり立つ自分のモノをその部分にあてがった。

ああ・・・いや・・・、近藤の硬化したモノの圧力を未だ閉じることを忘れた菊の座に感じ、弱々しく悲鳴を上げた。

亜紀の悲鳴に関わらず、近藤は腰に力を込めメリメリと太く長いモノを腸管に押し込んだ。苦し気に呻き声を上げ、腰を震わせながら肛門を蹂躪されて行く亜紀の様子は娘達の目にはっきりと映った。

「良く見ておくことね・・・明日は貴女達があれをするのよ・・・」

目を逸らさない様に愛美の後ろ髪を掴みながら、銀子が残酷に告げた。

後ろから激しく突き立てられ、理性を失い喘ぎ声を上げ続ける亜紀の姿があった。

亜紀が近藤と尻の穴で繋がっている間にも、娘達の後口を襲う淫具は次々と大きな物に取り換えられていった。

悲鳴を上げる気力も失い、脂汗を浮かべる股間には太い張型が埋め込まれていた。

「どう？痛い？」

希美の後口を責め立てながら芽衣が訊いた。

「ああ・・・何か変な気持ち・・・」

顔に玉の汗を浮かべ呻くような声を上げた。

「ねえ！見て！この子、歳に似合わずもう楽しむコツを知ったみたいよ！」

亜紀と近藤の巻き上げるアナルセックスの淫風に煽られたのか、巧みに後口を責められ、希美の股間がしっとり潤い出して来たのに気付いた芽衣が嬉しそうに声を発した。

芽衣の声で男達がドヤドヤと集まって来て、開け広げられた股間に視線を注いで、笑い声が上がった。

剛沢からアナルセックスを強要された事のある芽衣はアヌスの感じるポイントを知っており、巧みに責め立てたので、秘められた花園の潤いは益々大きくなっていった。

男達の好奇心な視線に晒され顔を赤く染め、イヤイヤと首を振り立てたが一度始まった身体の変調は更に昂じて行った。

まだアナルセックスの経験の無い百花は遮二無二責め立てるばかりで、栄美に悲鳴を上げさせ、銀子から度々指導を受けた。

何度も肛門拡張具を取り換えられる間に、とうとう用意されていた中で最大の器具が、娘達の肛口に突き立てられていた。

それは勃起した男性器とほぼ同じ大きさであった。

もっとも肛門感覚が敏感な希美が堪りかねて身体を仰け反らした。

「ほほ・・・この娘、とうとうお尻だけでイッたわよ！」

芽衣が仕上げを確認するようにその部分を覗き込んだ。

巨大な筒具により押し広げられ張り詰めたアヌスの周囲は菊花の皺も失われ、紙一枚も入る隙も無いほどピッチリと食い絞めヒクヒクと痙攣していた。

他の二人も後一步で絶頂を迎えそうな様子で汗に塗れ肩でハアハアと息を吐いていた。

「まずまずと言う処ね・・・今夜はこれ位にして置こうか・・・」

銀子が手を叩きながら告げた。

銀子の助手を務めていた百花も芽衣も額に湧き出た汗を拭ってフウと息を吐いた。

「それじゃ、今夜はこれを入れて寝るのよ！」

銀子が巨大な張型を手にして口にした。それはキノコの傘を何段にも重ねたような醜い形状を持ち、先端は無数の瘤の付いた卑猥な形状をしていた。

「アアーッ！痛いわ！」

寸分の隙間もなく埋め込まれた巨大な淫具を引き出す時、同時に周囲の腸管も引きずり出されるような激痛を訴えた。

繊細な器官を傷つけないよう時間を掛けて慎重に引き出した跡には、そのまま男のモノが入りそうなほど大きな穴が穿たれていた。

銀子達は、ポッカリと開口した肉の洞窟を懐中電灯も使って覗き込みながら、肛門拡張によりその部分に傷が付いていない事を慎重に確認した後、その開口に醜悪な淫具を埋め込み始めた。

息も出来ない程、肛口を押し広げ、腸管を内部から挟んでいた筒具が取り除かれたとホッとしたのも束の間、新たな責め具を押し込められ、絶え間無い苦痛に狂ったように泣き叫び続けた。

「お前は処女じゃないんだから、娘達みたいに後ろだけじゃなくて前にも入れてやるぜ！」
近藤に尻穴を犯され何度も失神させられた亜紀は、閉じる力も喪失した後口から何度も腸内に放出された精液をドロドロと垂れ流し、検診台の上で死んだようにうつ伏せになっていた。

突然肛口を襲う激痛に目を醒ました。

「へへ・・・お前さんののは娘達のより一回り大きいようだぜ・・・これならチンポどころか腕だって入るかも知れないぜ。」

巨大な淫具を尻穴にネジ込みながら楽しそうに口にした。

「銀子姐さんの注文だ！お前さんは処女じゃないからな！処女膜なんかとっくの昔に無くなっているから前にも入れてやるぜ！」

巨大な淫具を後口に挿入し終えた近藤がもう一つに責め具を手にした。

一つだけでも息の詰まりそうな大きさなのに更に前にも突き立てられると分って、恐怖に悲鳴を上げ身体を振らせた。

「何、遠慮するねえ。」

亜紀の悲痛な叫びも無視して前門をこじ開けズブズブと挿入を始めた。

深々と体内にねじ込んだ淫具が迫り出してこないよう、張型の根元を縄で縛り上げ、腰に回した縄に固定した。

手足を固定していた枷を外され、長い間拘束されていた検診台から降ろされたが、背後から体内に巨大な杭を打ち込まれた女達は、まともに直立することも出来ず、手足を床についた四つん這いの姿勢を取る事しか出来なかった。

男達はそんな女達の首に犬の首輪を嵌めて、結び付けられた鎖を引いた。

こうして過酷な肉体改造を受けた娘達は一列になって引き立てられていった。

一列縦隊で進む女の双臀の直ぐ後ろには、後の女の顔が在り、桃の様に丸い尻の様子があありと映った。

後ろの娘からは前の娘の後口に深々と拡張器具が埋め込まれている様子が見え、歩を進める度にそれが淫靡に蠢くのが分かった。

三人姉妹と信じて育って来た姉や妹の惨めな姿に男達に犬の様に引き摺られながら咽び泣いた。

哀れな女達の一団は地下の一郭に設けられた調教場所から牢舎迄連れて来られた。

檻の中で身体を休めていた暁美とお竜は、男女の発する卑猥に騒ぎ立てる声で目を醒ました。犬の様に男達に首輪を引かれ娘達が連れて来られたことが判り、肛口を責め具により深々と抉られた無残な様子に息を呑んだ。

「特別にお前たちの本当の母親の檻に入れてやるよ。今夜は母親に甘えてぐっすりと寝て明日に備えるんだね！」

銀子はそう口にすると愛美を暁美の檻に、希美をお竜の檻に押し込んだ。

「栄美の母親の晴江はもう死んで居ないから、亜紀と一緒に檻にいれてやるよ！」

女達は、寝ている間に股間の縄を解いて、秘孔に埋め込んだ拡張具を抜いてしまわないよう、檻に押し込む前に後ろ手に縛り上げられていた。

後手に縛られ、まだ成熟し切らない柔らかな乳房の上下を縄で縊られ、まるで禪のように股間に縄をはわされ、淫具で秘所を抉られている無残な娘の姿に十何年前の自分の姿が重なった。

暁美もお竜も、結局自分達の娘も自分達と同じように男達に身体をひさぐ、性奴隷に成っ

てしまった！と怯えた表情で檻の端に腰を落とす娘を見た。

二人はベッドから起き出しオロオロと娘の方に近寄った。

全身に限なく刺青を施した異様な女の姿に、「貴女が愛美の本当のママなの？」と、恐る恐る問いかけた。

「違うわ・・・貴女のお母さんは亜紀さんよ・・・」

汚れに汚れてしまった自分が、今更母であるとも口に出来ず涙を滴らせながら娘を抱擁するのであった。

「アアッ・・・お尻が痛いわ！」

暁美に抱かれながらも、肛口から込み上げる痛痒感に声を発した。

「ほほ・・・娘が痛がるようなら縄を解いて外して上げてても良いのよ・・・」

檻の外から中の様子を見詰めていた銀子が声を掛けた。

例え、どんなに痛がっても、今この大きさに慣らしておかなければ、明日から始まる肉体改造がどんな過酷なものになるか知っている暁美は、「痛くても耐えるしかないのよ・・・」と、咽び泣きながら、苦痛に耐えきれず「取って、取って」と、哀願する我が子をギュッと抱きしめるのであった・・・

調教開始

我が子を抱き締め、暖かな布団に包まりながら、暁美は早朝の気配を感じていた。

昨夜あれほど後口の苦痛を訴えていた愛美も今は暁美の腕の中でスヤスヤと寝息を立てていた。

互いに全裸のまま抱擁する暁美の身体に娘の肌の温もりが伝わって来て、もう何年も感じたことの無い心の安らぎの様なものを覚えるのであった。

娘を起こさない様に気を配りながら、後手に縛り上げていた麻縄を解いてやった。

朝が明ければ又あの残忍な一団がやって来て愛美を虐待するのだらうと思うと、このまま永久に朝にならなければ良いと願うのだった。

しかし、そんな願いを踏みにじる様に、遠くから男女の笑いさざめく声が聞こえて来て、呪わしい気持ちに墮とされるのであった。

「お早う、良く眠れた？」

銀子が鉄格子の間から中を覗き込んで、一つ布団に包まり愛し気に抱き合う母娘に声を掛けた。

男達がズカズカと檻の中に入って来て、容赦なく布団を剥ぎ取った。

愛美が悲鳴を上げて目を醒ました。

禪の様な股間を通る縦縄によって肛門拡張器がその部分に固定されたままであることを確認した銀子は、「お利口さんね、そのままにしてあったのね・・・」と、微笑んだ。

銀子に同行して来た男が手にしたスケジュール表を読み上げ始めた。

「今日のスケジュールは、シャワーで身体を洗ってから、食事、歯磨き、和久井先生の健康診断の後、お竜と暁美は黒人の双子と日本人二人を交えて6Pでビデオ撮影だ！どうだ！ワクワクするだろう？休憩を挟んで夕方から予約客の相手だ！暫く母親から引き離されて娘達は寂しいだろうが、夜になったら同じ檻に戻してやるぜ！」

お竜と暁美は暫くの間子供たちから引き離されることにより、自分達の痴態を娘の目に晒さずに済むことが出来ると、逆にほっとした気持ちになるのだった。

そして、セックス中毒に陥って片時も秘肉の奥に異物を咥えておかないと落ち着かない身体が、残忍な男達からもたらされるであろう被虐的で官能的な刺激を求めて疼くのを感じていた。

「娘達は尻穴と口を使って男を喜ばせる練習。亜紀姐さんは前と後ろの二つの穴を使った珍芸の練習だ！」と、嬉しそうに大声を発した。

亜紀と三人の娘達は一切の衣類を纏う事も許されぬまま、軽く後手に縛られ調教室に連れられていた。

「それじゃ、今日から徹底的にお尻の穴を鍛えるから、その前に、お腹の中を綺麗にしておかないとね・・・」

娘達三人の調教項目と予定表、及び亜紀の為の珍芸教育項目と予定表を挟んだクリップボードを手に事務的に銀子が口を開いた。

男達が格子状のステンレス部品を組み立てて造った市販のステンレス収納棚の様な台を人数分運んで来た。

それは格子になったステンレス板を一番上にして四隅に柱を立てて直方体の骨組みとした物で工事現場の足場を連想させた。そして二つの直方体の台を40センチ程間隔を空けて並べ、その間に横棒を渡して二つの台の骨組みがずれないように固定されていた。

男達は寄って集って全裸の娘達の身体に手を掛けると、悲鳴を無視してステンレス棚の上に押し上げた。

並行に並んだステンレス製の台にそれぞれの脚を載せると、頂上で軽く股間を開く姿勢となった。

「さあ！姐さんも乗って貰いますぜ！」

好色な笑みをたたえた男が裸の亜紀の身体に手を掛けた。

男の武骨な手が触れて、亜紀の身体がビクッと震えた。

「こいつは重いや！」

嫌がる亜紀の反応も無視して、亜紀の身体を横抱きに抱え、台の上に押し上げようとした。

他の男達も手伝って、歓声を上げながら肉付きの良い亜紀の身体を載せ上げると、開いた両足首を縄で固定した。

こうして女達はまるで和式便器を跨ぐように、ステンレス棚の頂上に蹲踞の姿勢で固定されてしまった。

股間を割られ、霞むような痴毛の間から清楚な桜色の肉襞が垣間見えた。

ステンレス台の高さは1メートル程で、腰を少し屈めれば開け広げられた股間の奥を目にする事が出来た。

亜紀を扇の中心として三人の娘達が亜紀と向き合う様に配置されたので、互いに無残に広げられた股間の中心が見渡せる形となり、恥ずかしさに頬を赤く染め顔を左右に振り立てた。

男達は出来栄を確認するように真下から処女の秘裂を見上げて卑猥な言葉や笑いを投げ掛け娘達の羞恥心を煽った。

調教状況を記録に残すと言った銀子の言葉通り、何台ものカメラが配置され、照明が容赦なく開け広げられた股間の佇まいを影も作らず照らし上げた。

「さあ！そんな格好にされたんだから次は何をしなければならぬか分かるでしょ？」

銀子が手を叩きながら発した。

「貴女達、捕まえられてからまだ大きい方はして無いでしょ？そんな物が腹の中に詰まっていたら入れてもらう相手に失礼だからね！調教の前にキレイにヒリ出しておくのよ！」

非情な言葉に女達の顔が羞恥で赤く染まり、イヤイヤをするよう身体をくねらせた。

銀子の言葉により、確かに腸内にはかなりの便が貯留している事を思い起こさせたが、衆人の見ている前でカメラに撮られながらの排泄など出来る訳が無いと緊張した。

「マー！イヤだ！アンタ達これからウンチするんだって！」

銀子の助手を買って出た芽衣と百花が口を押えて笑い声を發した。

「時間も押している事だし、さっさと済ませなさいよ！」

そう口にすると、台上に載せられた亜紀の良く張った尻をゾロリと撫でた。

まるで和式便器を跨ぐような姿勢で左右から後輩の愛人に大きく後ろに突き出した双臀を撫でまわされ、屈辱感に齒を噛み締め、思わず呻き声が口を突いた。

男達がニヤニヤ笑いながら鏡の様に磨かれたステンレス製のバットを持って来た。

お盆の様に底の浅い矩形のバットは二つの台の間、丁度女達が蹲踞の姿勢で腰を降ろすお尻の真下に取り付けられるように出来ていた。

男達さも嬉しそうに鼻歌を鳴らしながら、二つの台の間に排泄物を受けるための鏡の様なバットをセットしていった。

見守る男達も鏡の様な金属板の上に便塊が蜷局を巻いて積み上がっていく様子を何度も見た事があり、この女達もどの様に恥じらいながら排泄することになるのだろうと変質的な期待を抱いた。

「アンタの大切にしていた娘達は、今日一日は組の男達が弄ぶことになっているから、私たちはアンタの相手をして上げるから、有難く思うんだね！」

百花と芽衣の陰険な視線に亜紀はゾッとするものを感じていた。

「昨日はアンタの大事な娘のココを可愛がらせてもらったけど、アンタも中々色っぽい穴を持っているじゃないか！」

百花と芽衣で尻肉に手を掛けて左右から思い切り押し開き、笑い転げる様に開け広げられた双臀の谷間を見詰めた。

「ホンマや！娘達は清楚な小菊という感じやったけど、アンタのは毒々しい大菊や！」

と、笑いながら指先を伸ばし中指の腹を菊の座の中心に押し当てた。

百花の指先を淫靡なその中心部分に感じてヒェ！と悲鳴を上げて身体を仰け反らした。

「何やの？アンタの娘は気前よ一触らせてくれたで！アンタもケチケチせずに触らせてくれたら良^え一やないか！」

と、笑いを浮かべるとそのままズブズブと指を沈めて行った。

近藤の剛棒で散々アナルセックスの洗礼を受けた後、一晩中アナル拡張器で馴らされた亜紀の後口は苦も無く百花の指先を沈めて行った。

百花の指先を腸管内部に感じて、アーッ！アーッ！と呻き声が上がった。

「芽衣さん！アンタも指を入れておやり！二人でこの性悪女がウンチしやすいよう中からマッサージしてやるんや！」

分かったわ！と片手で亜紀の尻たぶを押し広げながらもう片方の手を伸ばした。

そして、既に百花の中指が埋められている秘孔に、自分の中指を滑り込ませた。

二本の指が侵入し内部を掻きまわす刺激に、堪え切れず悲鳴を發し身体を悶えさせた。

ああーっ・・・ママ・・・と、少女たちはその様子を不安そうに眺めた。

「爪で中を傷つけない様に注意してね・・・」

芽衣の長く伸ばした爪で腸壁が傷付くのを心配して、銀子が注意した。

「分っているわよ・・・」

と、笑うと二人で肛門を大きく左右に押し広げたり、交互にピストン運動させて亜紀に悲鳴を上げさせ続けた。

「どや？こうやって二人で掻きまわして上げたら、ウンチが出そうな気に成って来たやろ？」と、意地悪く首先で内部を揉みたてながら笑った。

ひとしきり亜紀を身悶えさせた後、フーと溜息を吐いて二人は内部に沈めていた指を引き抜いた。

「何よ！コレは！」芽衣が陰険な声を上げた。

「いやだ！ウンチが付いてるやんか？」それを見て百花が大笑いを始めた。

腸から抜き去った芽衣の中指の爪先に便塊が付着していたのだった。

「モー、イヤだ！アンタのウンチなんだからアンタが綺麗にしてね！」と、言う汚物の付着した爪先を亜紀の頬に擦り付けた。

そして、亜紀の唇に押し当て、舌を使って拭わせた。

自分の汚物を味合わされる屈辱に咽び泣いた。

「それじゃ、そろそろ始めて！」

銀子が女達に排便を促した。

嗜虐者達から強制され、抵抗も無駄であることを理解した女達は下腹に力を込めて排泄しようと努力したが、周囲からギラギラした目で見られ、その上カメラ取りされている羞恥心と緊張感でいくら息んでも排泄することは出来なかった。

「まだ出ないの？しょうがないわね・・・本当はアンタ達を買った客から求められれば何時でも出せる様にしなくちゃならないんだけど、初めてだからね・・・アレを使うしか無いか。」

と、男達に目配せした。

銀子の視線を受けた男達は小躍りして部屋の隅に置かれた調教道具を詰めた箱に向かい、容量 200cc の大きなガラス浣腸器とグリセリン溶液を手にして戻って来た。

「浣腸するとなったら、こんな底の浅いバットじゃ駄目ね・・・」

と、口にするとお尻の直ぐ下にセットされていた容器を取り去った。

「誰かバケツを持って来て！」

銀子の声に青いポリバケツを男が持って来た。それは円錐形のバケツの上端の直径に合わせて円形にくり貫いた金属板に刺さっていて、バットを取り去った部分にピッタリと取付できるようになっていた。

「でも、銀子姐さん・・・バケツは一つしか在りませんぜ・・・」

「一人が出し終わったら、別の人がその上にヒリ出せば良いじゃない。バケツは大きいんだから四人分は十分に入るわ。もっとも後の人は我慢してもらうしかないけど・・・」と、意地悪く笑った。

バケツは開設する亜紀の尻の下にセットされた。

ヤクザ者達が満面に喜色を浮かべて、浣腸液をガラスのシリンダーの中に吸い上げた。

「さあ！いくぜ！」

男達は膝を折って三人の娘の開け広げられた臀丘の下に位置すると、菊花の中心に嘴管の先を押し当てた。

「ああー！イヤイヤ！」

「アーッ！痛い！」

ガラス器具の先端で肛口を抉られ悲鳴が上がったが、男達は気に掛ける様子も無く、「昨日一日ケツの穴を開かされ、一晩中コケシを呑み込んでいただけあって、柔らかく開いてどんどん入って行くぜ！」と、嬉しそうに声を上げた。

娘達は S 市の高級住宅街に在る剛沢の本宅で育てられ、剛沢も周囲の上流家庭の人々にあわせて、出入りする男達も一見暴力団員とは分からない物腰の男ばかりを選んでいたので、大亜門戸会の本部に連れ込まれて初めて凶暴なヤクザ者に接し、男達の発する獣じみた凶暴さに言いようの無い恐怖を感じていたのだった。

「へへ、これからたっぷりとご馳走してやるぜ！」

嘴管の根元まで肉孔の中に埋め込まれた事を確認して、次にピストンをゆっくりと押し始めた。

「ああー！イヤ！」

「ああー！何なの？！」

「アアーッ！痛い！」

生まれてから、これまで浣腸など経験した事の無い娘達が、腹の中に侵入し始めた生温い液体の異物感に声を上げた。

娘達の身悶えを無視して、男達はピストンを押す力を増した。

気味の悪い液体が肛門から体内に流れ込み続けた。

フウと息を吐いて浣腸器内の液を最後まで注ぎ終えた。

「一本だけじゃ物足りないだろう？もう一本ご馳走してやるぜ！」

尻穴から嘴管を抜き取ると、新たな液を吸い上げ始めた。

再び後口を襲う浣腸器に、既に腹中に気味の悪い膨満感を感じている娘達は、「イヤ！イヤ！もう止めて！」と、身悶え悲鳴を上げたが、男達は悲鳴を面白がるようにズブリと嘴管を突き立てた。

何故か銀子は娘達にだけ浣腸を命じ、亜紀には命じなかったので、一人取り残された亜紀は眼前で繰り広げられる娘達への狼藉をオロオロして見守るしか無かった。

二回続けて、都合 400cc の浣腸液を注入された娘達は、台の上で苦し気に腰を悶えさせていた。

「ああー・・・何か変な気持ち・・・お腹が痛いわ・・・」

腹中に注ぎ込まれたグリセリン溶液の効果で、腹がグルグルと音を立て始めたのが亜紀の耳にも入った。

生まれて初めて浣腸を体験し、最初それが何を意味するのかさえ知識が無かったが、今はそれが、自分の意志に反して強制的に排便を促進するものだと思い知らされた。

今や荒れ狂い腸内を掻き乱す魔性の液体に娘達は蒼白となりびしょりと汗を浮かべて身悶え続けていた。

不安げに見守る亜紀に銀子は、

「さあ！早くウンチを済ませてしまって、バケツを娘達に回して上げるのよ！」

と、命じた。

「エッ！？このままですか？」

銀子の言葉に亜紀が驚いて応えた。

「そうよ！さっきも言ったでしょ！貴女達は客から求められたら何時でも何処でもウンチ

を出来る様な身体にしておかなければいけないって！貴女はあの娘達の母親代わりなんだから、何でも率先してやって見本を示すのよ！」

と、冷たい視線で睨み付けた。

「そや、そや！早よウンコしたりいな。早よ出さんとあの娘ら、粗相してしまうで！」

浣腸による強制排便ではなく、自然排便を迫られオロオロする亜紀と悶え苦しむ娘達を交互に身ながら百花が嬉しそうに笑った。

「許可なく放出して、床を汚したら後で罰を加えるからね！」

必死になって堪える娘達に銀子が大声を浴びせた。

銀子がどのような罰を用意しているのか分からないが、あの恐ろしい銀子の事だからとんでもない厄災が娘達に降り掛かるだろうと怯えた。

これまで顎で使って来た男や女の前で排便行為を晒すなど耐え難い恥辱であるが、今は娘達を苦痛から一刻も早く救う方が先決—と、齒を噛み締め腹にグッと力を込めた。

普段なら何気なく行っている行為であるが、周囲から卑猥な目で見詰められる羞恥と緊張感と娘達の身悶える様子が目に入り呻き声が耳を貫く切迫する状況に、心と身体のバランスが崩れ容易に排泄を始められなかった。

顔を紅潮させウンウンと唸って自然排便に向けて努力を始めたのに気付いて、

「まだ出〜へんのかいな？早よせな、あの娘ら漏らしてしまうで！」

「ほら、ほら！頑張れ、頑張れ！」

百花も芽衣も台の上で蹲踞の姿勢を取り顔を真っ赤にして息む亜紀に面白がって囁し立てた。

「アアーッ！もうだめ！」

「我慢できない！」

娘達の切羽詰まった声が響き、亜紀も必死になって腹中の便塊と格闘していた。

「キャ！嫌だわ！お尻の穴が開き始めたわ！」

真下から覗き込む芽衣と百花の眼前で、白い双臀の狭間が—その部分が内側からポッコリと盛り上がり、まるで蕾が弾けるように内側から捲り上がって来るのを目にした。

「何や茶色いモンが姿を見せ始めたでえ！」

肛口をチューブの様に伸ばし、茶褐色の醜怪な固形物がニュッと姿を見せた。

「マア！嫌だ！繋がったままニョロニョロ出て来るわ！」

芽衣が口を手で押さえて、ギラギラした目で見詰めながら叫ぶように言った。

「ホンマや！流石は亜紀姐さんの気合の籠った一本グソや！何時もそんな大きな糞をしているんかいな？」

二人は肛口から長く垂れ下がった便塊を見詰めながら笑い上げた。

周囲の男達もボスの一番の愛人だった女の惨めな姿を見逃すまいと腰を屈めて見守った。

股間から重く垂れ下がった便塊はプツリと切れてポリバケツの底を叩いた。

「日頃高い香水纏って気取ってた亜紀姐さんやのに、何や、このえげつない臭いわ！」

百花が大げさに鼻を摘まんで大声を上げたので、どっと笑い声が上がった。

「キャッ！また出て来たわ！」

一度始まった排便衝動は直腸内の排泄物を全て押し流してしまうまで治まらず、二度目の排便が始まっていた。

「こんだけ出しといて、まだ出すちゅうんかいな？この女、腹の中にどんだけ糞を詰め込んでんのや？」

二人の愛人の揶揄にもじっと堪えるしかない亜紀であった。

「マアヤダ！オシッコまで出し始めたわ！」

下腹に込めた力が膀胱を圧迫し、突然放尿まで始めてしまった亜紀であった。

「このババアどんだけ恥晒せば気が済むんや？」

二人の愛人の揶揄に取り囲む男達から笑い声が上がった。

男達から詰られても、一度放出が始まったものは制止することも出来ず、バケツで受けきれず床面をビシャビシャと濡らした。

その時、苦痛に呻吟していた栄美が我慢の限界を乗り越えて激しく放出を始めた。

それにつられる様に後の二人も恥ずかしい音を響かせて放出した。

その大きな破裂音に亜紀に集中していた男達の目が一斉に娘達の方に向いた。

「残念やったな！アンタが早よ出さんさかい、漏らしてしもうたで・・・あの娘ら罰を受けるんや！みんなアンタが悪いんやで！」

「その罰は全て私が受けます！だからあの子たちは許して上げて！」

と、台の上でブリブリと排泄を続け、小便を撒き散らしながら泣き叫ぶように哀願するのであった。

「さてと、それじゃ後ろの処女を破らせてもらいますか・・・」

検診台の上にうつ伏せで固定された女達を見下ろしながら銀子が発した。

既に女達に耐え難い屈辱を与えた台は片付けられ、汚した床も綺麗に清掃されていた。

お尻や腸内迄すっかり清められた女達が昨晚の様に検診台の上に固定されていた。

うつ伏せの娘達が少し顔を上げれば、股間を大きく広げられ二つの秘孔を丸出しにした亜紀のボリュームのある白い尻が視野に飛び込んだ。

「娘達は後ろの穴を男達に開通してもらう事。亜紀姐さんは、もうその辺はベテランなんだから一足先に尻穴を使った珍芸の練習よ！」

検診台の上でうつ伏せに固縛され股間を開く亜紀の両側に立った芽衣と百花が怪しげな道具を手にしてニィと微笑んだ。

「これは明日から貴女達が練習する事なんだから、亜紀さんを良く見て予習しておくのよ！」

三台の検診台に縛り付けられ、お尻を後ろに突き出す娘達の背後には男達が卑猥な笑みを浮かべて列を作っていた。

既に衣類を脱ぎ捨てた男達の股間には醜怪な肉茎が隆々と天井を向いていた。

銀子の目配せを受けた最初の一团が、大きく広げられた股間の前に進み出た。

そして、大きな手で尻たぶを掴み左右に押し開いた。

自分の恥ずかしい処を恐ろしい男の目に晒すことにビクッと身体を震わせ、小さく悲鳴を上げた。

男達はこれから自分達が思う存分蹂躪することになる場所を目で確認すると、指先で潤滑のクリームを掬った。

武骨な指先が敏感な秘められた部分に触れるのを感じて、悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。

肛口の周りに潤滑クリームを塗すのもそこそこに、威きり立った自らの分身をその部分にあてがった。

灼熱した肉塊を秘孔に押し当てられ、もうどうすることも出来ないと悲しく諦める娘達であつた。

少女たちが大人しくなった事に気を良くした男達は腰にグイッと力を込めた。

「アアーッ！イヤァッ！」

「アアーッ！痛い！」

鉄の様に硬化したモノが媚肉を押し開いて内部に侵入を始めていた。

「痛い訳無いだろう！昨日あれだけ尻の穴を開かせたんだからな！ほら、ドンドン入って行くぜ！」

少女の尻穴の感触を楽しみながら、グイグイと押し込んだ。

実際、昨夜肛門拡張訓練により並みの男性器なら容易に入る位に広げられ、拡張具を一晩中収めて馴らされた身体は、大きな痛みを感じている訳では無かったが、無機質の拡張具とは異なる生きた肉塊の侵入に気味の悪さを感じるのであった。

「ほら、そう言っている間にととう根元まで入ってしまったぜ！」

陰茎の付け根まで後口に押し込んだ男達は、ウツトリとその極上の腸内部の感触を楽しむ様に静止していた。

「イヤーッ！イヤーッ！早く抜いて！」

内部から腸管を押し広げるドクドクと脈打つ熱気を帯びた肉塊の気味の悪い圧迫感に、痛みより恐怖心が込み上げて来て狂ったように泣き叫んだ。

「そう言ってお前達も気持ちが良いんだろう？すごい締め付けだぜ！」

「イヤーッ！イヤーッ！気持ち良くなんかない！」

巨大な男のモノに串刺しにされ、快感とは程遠い不気味な感触に泣き叫んだ。

「ハハ・・慣れてくればこれの気持ち良さが分かって来る筈さ！」

男達はゆっくりと腰を前後し始めた。

後口を弄ぶ野蛮な男達の行為の前に涕泣する少女たちであった。

検診台に固定され後ろを振り向く事の出来ない亜紀は、背後から娘達の悲痛な声を耳にするばかりで、オロオロと身悶えていた。

亜紀の両側に立ち、娘達を案じて身を揉む姿に気付いた百花と芽衣は、「さっきから何 後ろを気にしてんや！アンタはアンタの身体を鍛える事だけ考えれば良^え—えんや！」
年上の女の良く張った尻をピシャリと叩くと、向かい側に立つ芽衣に目配せした。

「今日の珍芸の修行に入る前に、身体を温めておくようにって銀子姐さんに言われとるんや！」と、太いバイブレーターを手にした。

芽衣もバイブを手にする、二人で亜紀の開け放たれた股間の二つの秘孔に押し当てた。

二本のバイブの耳障りな音が響き、亜紀の悲痛な声が上がった。

男達によりなすが儘に蹂躪される娘達であったが、やがて、熱く脈打つ巨大な肉塊が腸管を擦過する不思議な感覚が少女たちの脳を蝕み始めていた。

便が通り過ぎる時の感覚に似て、それとは異なる言いようの無い奇妙な感覚に襲われ、堪え切れず身悶え始めていた。

哀切の涙は何時しか甘美な潤いを感じさせ始めていた。

顔面を紅潮させ額や鼻の頭に汗を浮かべ、男達の腰の動きに同調して、ハアハアと甘い息を吐き始めていた。

「どうだ？気持ち良いだろう？」

ハアハアと荒い息を吐き汗を浮かべ、腰を打ち付ける男が希美にたずねた。

「ああー・・・何か変な気持ち・・・」

朦朧とする意識の中で男に身体を捧げながら、ウツトリと呟くように口にした。

「そうよ、それを感じる一つて言うのよ。怖がらず、先ずは、その心地良さに浸れば良いのよ・・・」

銀子が、甘美な息を漏らし、啜り泣く希美の耳元にそっと囁いた。

この娘は三人の中で一番 A 感覚が進んでいると感じた。

杭を打たれる後口のわずか下のもう一つの淫靡な孔が潜む媚肉が湿り気を帯びている事に気付いた。

百花と芽衣に責め立てられる亜紀は最早娘達を気遣う余裕も無く、悶え狂っていた。

二人の鬼女の操作するバイブレーターは半ば二つの淫門に没し、バイブの振動に煽り立てられた尻がブルブルと震え、その表面を覆う柔らかな脂肪が波打っていた。

「どう？そっちの具合は？」

亜紀を責める二人の女に声を掛けた。

「すっかり舞い上がってしまってるでえ・・・亜紀姐さんもう直ぐイキそうや！」

百花が小刻みにバイブを操作しながら笑って応えた。

「そう？もうすぐこっちもイキそうよ！」

言葉の終わらない内に亜紀が絶息するような声を発して身体を痙攣させた。

それに併せる様に希美も男に組み敷かれたまま悲痛な声を上げて絶頂に達した。

「母親に併せてイクなんて器用な娘や！」

と、笑い声が上がった。

二人の陰険な女により無理やり絶頂を極めさせられた亜紀が、台の上につ伏せに身体を預け、ハアハアと荒い息を吐いていた。

「それじゃ、身体も温まったようだから訓練の開始よ！先ず後ろの穴でバナナを食いちぎれるように練習して、それを覚えたら、今度は前の穴でバナナを噛みちぎる練習。最後は二つの穴を同時に使ってバナナを切る練習よ！」

大きなバナナの房を手にして、宣告した。

「明日は、貴女達もやる事だから亜紀さんのやる事を良くみておくのよ！」

と、後ろから突き立てられ悲鳴を漏らす娘達にも声を掛けた。

「ほら、^よう熟れた美味しそうなバナナやでー！」

百花が房から一本ちぎって、亜紀の目の前にチラつかせた。

目の前に突き出された太くて長いバナナから思わず顔を背けた。

「何を嫌そうな顔してんのや、こんなに美味しいのに！」

と、バナナの皮を剥きながら笑いを浮かべた。

「さっきまで、大活躍した^{とこ}所がまだ口を開けているわ・・・此処に入れたらええんやな・・・」
絶頂の余韻でまだ薄く開いたままの肛口にバナナの先端を押し当てた。

「さあ、お食べ・・・美味しいバナナやで・・・」

バナナを手に見詰めるように顔を股間に寄せた。

昨日から苛烈な調教を受け続けたその部分は、押し当てられたバナナをスルスルと呑み込んで行った。

「キャー！入って行く！入って行くわよ！」

直腸内にバナナが消えて行く様子を間近に見て芽衣も素っ頓狂な大声を発した。

「ああー・・・ママ・・・」娘達も苦しい息の下で、亜紀が後口にバナナを突き立てられるのを目にして悲しい声を上げた。

5センチ程肛門内にバナナが埋没した事を確認した百花は、

「さあ！もう^ええやろ！オイドの周りの筋肉に力を入れて噛み切るんや！」と、命じた。

「ああー・・・出来ません・・・」

肛口を貫く異物を感じながら、百花の命令に涙声で反発した。

「^{でけ}出来んこと無いやろ！アンタ何時もトイレでウンコをオイドで千切っているやろ！それと同じで^ええんや！」と、怒気を強めて言い放った。

反抗が無駄であることを知った亜紀は諦めて肛門の筋肉を締め付けようとした。

「そや、そや、それで^ええんや！」

バナナを加えた肛口がピクピク動くのを見て笑い声を上げた。

アアーッ！肛門の筋肉が収縮し切るのを感じて、腰を痙攣させ悲鳴の様な声を上げた。

「切ったんか？」

「はい・・・」

押し当てていたバナナを引き揚げ、先端が無くなっている事を確認した。

「何や、不細工な切り方やなあー！もっとスパッと切れんかいな！」

と、押しつぶされたような断面を見て笑い声を上げた。

「ほら！切ったん出してみい！」

と、亜紀の白い尻たぶを平手で叩いた。

「ほら！出してみい言う^ゆとるんや・・・早よ、出さんかいな！」

と、痺れを切らした様に尻を揺さぶった。

「ウンチをする要領で良いのよ。」

芽衣も陰険な笑みを浮かべて言った。

「アハ！出て来たで！」

肛口を割って切り取られたバナナの破片が出て来る様子を眺めて笑い声を上げた。

ゴム手袋をした芽衣の掌の中に産み落とされた破片を見て、

「何や！これは！グチャグチャに潰れとるやないか！・・・アカン！アカン！こんなの見てお客さんが承知せーへんで！」

再度バナナを押し当て、さあもう一度練習や！と大声を上げた。

一方、娘達は既に何人もの男のモノを受け入れ、疲労で氣息奄々という状態であった。

「疲れた？じゃあ、ちょっと休ませてあげるわ」

と、後ろに列を作っていた男達を前に並ばせた。

「お尻の穴の休憩中はお口を使った嘗め方の練習よ！」

「休憩って身体を休ませて上げるんじゃないの？」

亜紀を責めていた芽衣がその様子を見て驚いたような声を上げた。

「そうよ、お尻の穴が疲れたらお口を使って、お口が疲れたらお尻の穴を使って練習よ！

時間も無いことだし、後の調教が控えているからドンドンやって行くわよ！」

「それじゃ、早速嘗めてくれよ」

台の上にうつ伏せに横たわる少女たちの眼前に隆起したモノを見せつけた。

悪臭を放つ異様な肉塊を見せつけられ、恐怖に目が裏返り、思わず顔を背けた。

「ほら！啞えろと言うんだよ！」

急に粗暴な態度を露わにすると、少女の頭を掴み、頑なに閉ざす唇に熱い肉片を押し当てた。

男達は幼い彼女たちの抵抗を逆に面白がるように、可憐な唇に肉茎の先端をなぞる様に動かした。

男の凶暴さに恐怖し、陰湿さに根負けした少女たちは、涙に咽びながら唇を開き、舌先を少し出して、ムカつく臭いの発するモノを味わい始めた。

調子に乗った男達が口内深く肉茎を押し込み、娘たちが目を白黒させる様子を眺めて、嗜虐の快感に笑い声を上げた。

銀子が横から様子を眺めて、舌の使い方や啞え方の細かい指示を出した。

水揚げ

それから何日もの間お尻の穴を使った訓練と口を使って男の人を喜ばす練習を積んだ少女たちは、剛沢の立てた予定通り、客の相手をする日を迎えていた。

今や少女たちは肛口や口を駆使して、並みの男なら一分も持たず搾り上げる能力と、尻の穴でバナナ切りや卵産みの珍芸を出来る特殊な技能を持った娼婦に仕上げられていた。

しかし、ベテランの娼婦でも舌を巻くほど鍛えられた女体であったが、未だに前の穴の処女性は破られる事無く守られていた。

最初に栄美が男達により檻から引き出された。

亜紀が同じ檻の中に居れば必死に栄美を守って、連れ出そうとする男達に抵抗したかも知れないが、客の相手をするために連れ出されており、檻の中には栄美しか居なかった。

オークションで栄美に投票し、最高値を付けて競り落とした客に処女を強奪されるまで、後僅かな時間しか残されていなかった。

檻の外にある鏡台に座らせられた栄美は、剛沢の愛人達や銀子により髪をセットされ美しく化粧が施されて行った。

そして、アイドルユニットグループの衣装の様な可愛らしい服を着せられた。

檻の中から愛美も希美もその姿を見守った。

この地下の牢舎に押し込められてから、一片の布も身に着けることも許されず、裸身をさ

らしたまま過酷な調教を受けて来て、今、煌びやかな服を身に纏った栄美の姿を目にする
と改めてその可憐な容姿に目を見張った。

少女らしい薄い化粧であったが、ハーフ特有のエキゾチックな雰囲気を醸し出す、彫りの
深い眼窩やすっきりと通った鼻筋が一層引き立っているように感じられた。

すっかり支度の整った栄美は男達に取り囲まれて、牢舎を出た所に設けられた地下通路を
通って何処かに連れて行かれた。

数時間過ぎて男達から引き摺られる様にして戻って来た栄美の姿を見て、愛美も希美も息
を呑んだ。

服はだらしなくはだけ、幼い胸が露出し、スカートもようやく腰に纏いつている体で、
半裸状態であり、剥き出しとなった白い肌には縄目の跡が痛々しく残されていた。

泣きはらした顔は目の周りに隈が出来ていた。

自分では、立って歩くことも出来ない身体を両側から男達に支えられ戻って来たのだった。

「どうだ？お客さんから充分楽しませて貰ったか？」と笑うと、身に着けていた衣類を剥
ぎ取り元通りの全裸とし、亜紀の居ないガランとした檻の中に放り込んだ。

「栄美！大丈夫？」

「何をされたの？」

「処女を散らされるってどんな気持ちだったの？痛かったの？」

と、愛美も希美も次々と言葉を掛けたが、檻の中の栄美は顔を覆って泣き崩れるだけであ
った。

次の日、愛美が最高値を付けた客の前に連れ出されて行った。

すっかり憔悴しきって連れ戻された愛美は、暁美の腕の中で咽び泣き続けていた。

希美も栄美も掛ける言葉が無かった。

とうとう明日は自分の番だ一と、覚悟を決める希美であった。

その日、村崎親分が'おしのび'で大亜門戸会の本部に訪ねて来た。

剛沢が村崎に希美の水揚げを依頼したのだった。

従者を一人も連れない'おしのび'と言っても、女狂いの村崎が剛沢の飼っている女を抱くた
め一人で大亜門戸会の本部を訪れることは常態化しており、村崎會の中では公然の秘密と
なっており、誰も気に留める者もいなかった。

剛沢の差し向けたリムジンから降りた和服姿の村崎を剛沢以下大亜門戸会の幹部が恭しく出迎えた。

銀子や二人の愛人も混じっていた。

三人の娘の調教中にも訪れたことがあり、村崎は三人の顔を良く覚えていた。

三人の中で一番綺麗なのは栄美だと思った。

氷を研いで作った刀剣のような冷たい鋭利な美貌を持った晴江と異国人の血が混じり際立った美貌を持っていると感じていた。そのまま芸能界にデビューしても大人気を博する事だろうと思った。

次は愛美だろうと思った。モデル顔負けの背格好と華やいだ美貌を持っていた暁美の血を引き継いでおり、モデルになっても一流モデルが務まる事だろうと思った。

希美は美貌の女渡世人として名を売ったお竜の娘としては少し劣っていると思った。

しかしそれは、他の二人が美しすぎるためで、二人と比較すると多少劣るが、世間一般の同年代の少女と比較すれば抜きん出て可愛い顔だと思いなおした。

村崎は、栄美や愛美の水揚げを剛沢がさせてくれなかったのを少し恨めしく思ったが、それでも七桁、八桁の金額でセリ上がっていく生娘の処女権をタダで提供すると言う剛沢の忠誠心が好ましくもあった。

それに純真そうな少し下膨れの愛嬌のある希美の顔立ちは、三人の中で一番自分の好みに合うと思いなおした。

自分の性癖や好みを熟知した剛沢らしい配慮だと嬉しくもあった。

今は子供子供した少女であるが、男を知って成長して行く内に研ぎ澄まされ、ドンドン美しくなっていく要素を秘めており、そんな女に育て上げていく楽しみも感じていた。

「どうぞ、こちらで御座います。もう用意は出来ております・・・」

と、剛沢が前に立って村崎を誘った。

そこは何の部屋か分からないが、暁美やお竜やそして亜紀が使う事になった昔晴江が使っていた売春部屋の様な趣向を凝らした部屋ではなく、床面や壁はコンクリートを打ちっばなしにした殺風景な部屋で、窓も無く暗い室内には、戸口から差し込む光に照らされて幾つもの拷問道具が無造作に置かれているのがボンヤリと目に映った。

此处は、反抗した女を折檻するための拷問室なのかと想像した。

むろん、部屋の中にはシャワーや浴槽やベッドも用意されているようであったがどこか寒々しい感じを持った。

まあ、女さえ抱ければ和室であろうと洋室であろうと拷問部屋であろうと関係ないと思った。

そして、このような冷徹な拷問部屋の方が自分の好みに合っていると思い直した。

これも自分の性癖を熟知している剛沢の配慮かと感じた。

剛沢が入口の壁に設けられた電灯のスイッチを押した。暗く沈んでいた部屋がパッと明るくなり、村崎がオオッと声を上げた。

明るくなった部屋の奥に二本立てられた鉄柱の間に希美が全裸で大の字に晒らされていたのだった。

「どうぞ、お楽しみに・・・」

と、口にするのと剛沢はドアを閉めて立ち去ってしまった。

手枷足枷により、両手両足を大きく広げた形で左右に設けられた太い鉄柱に固定され、立位で大の字に固定された希美の顔には豆絞りの日本手拭いで嚴重に猿轡がされ声を封じられていた。

突然部屋に入って来た不気味な老人に怯えた表情を浮かべ、猿轡の下で声にならない呻き声を上げた。

「希美ちゃん、心配せーへんでも良^ええで・・・儂の事を覚えているか？」

自分の全裸姿を着物姿の気味の悪い肥満体の老人に見られる羞恥が込み上げ、村崎の問い掛けに激しく首を振った。

「実は、オマハンの調教中に何度か来たことがあるんや・・・そやから儂はアンタらの事を良^よく知ってるで・・・」

そう言えば、お尻の穴を蹂躪される調教中に一調教に伴う苦痛や疲労感で意識は朦朧としていたが一剛沢に伴われ得体の知れない和服姿の老人が調教室に入って来たことが有る事を薄っすらと思い出し始めた。

そして、肉体改造を受ける亜紀や娘達の間を歩き回る謎の老人の目に宿った好色で残忍な目の色を思い出して、ゾッとするものが込み上げて来た。

「真っ白でシミ一つ無い綺麗な身体してんな・・・乳首の色も桜の花の様や！・・・まさに男をオ^コに咥え込んだことの無い乙女の身体や！」

隠しように無い裸身を上から下までジロジロと見まわされ、込み上げる恐怖に抑えようもなくガタガタと震えた。

そんな恐怖に震える希美に、

「心配せんでもええで・・儂わな、これまで千人以上に女を抱いて来たんや、^{はつもん}初物を貰^{もろ}ったのも百人わおる・・希美ちゃんも優しゅう女にしてやるさかいにな・・」

と、猫撫で声で囁きかけた。

希美の全身を嘗め回すように見つめていた村崎であったが、股間の一点に目が留まった。ミルクを練った様な白く滑らかな下腹と両太股の会合する場所に三角形の黒い茂みがこんもりと繁茂していた。

「顔は子供みたいやのに、ここはもうすっかり大人や！」

柔らかく艶やかな黒い叢を掌で撫でながら薄気味の悪い目で希美の表情を窺った。

謎の老人の気味の悪い手が春草に触れ、猿轡の下で悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。

「儂にわな、悪い癖が有ってな、ツルツルの女や無いとその気にならんや。そやから折角生え揃ったところ悪いけど剃らしてもらうで・・剛沢の奴も気を利かせて剃刀を用意してある事やし・・」

と、希美の傍らに用意されていた剃毛の道具を目にしながら微笑んだ。

立位で大の字に拘束された希美の大きく開け広げられた股間の前にどっかりと胡坐をかいて座った村崎は剛沢の用意してあった品を手を取った。

蒸しタオルが剥き出しの股間に押し当てられた。

女性器の薄い粘膜を通して秘奥に熱気が伝わって来る。それは痛みを伴った恐怖が秘肉を裂いて割り込んで来る様に感じられた。

暫く蒸上げ、十分柔らかくなった痴毛にシェービングクリームを塗り付けた。

村崎は上機嫌でシェーバーの歯を柔らかな肌に押し当てた。

少し動かす度にゾリッという微かな音が聞こえ、剃刀の通った跡には白い肌が露出した。

「どや？分るか？段々お下の毛が無^のうなって来たで・・」

希美の表情を窺いながら楽し気に剃刀を動かし続けた。

「ほら、終わったで」

濡れタオルでクリームを拭き取りながら言った。

「どや？さっぱりしたやろ？」

タオルで拭き取られた後には艶々した柔らかな二枚貝にも似た肉の双丘が残った。

「あー！美味しそうなオコヤ！見てるだけで涎が垂れて来るで！」

舌で鱈子の様に厚い唇を湿しながら、薄っすらと赤みを見せる秘裂の佇まいをジロジロと観察してから、まるで匂いを嗅ぐように鼻を近付け、「あー！良^えー匂いや、処女の匂いや！」と嘆息し、突如、口をその部分に押し当てた。

突然、敏感な部分にガサツな唇を押し当てられ、希美の身体が仰け反った。

唇を這わす度にビクビクと身体を震わせる少女の反応を楽しむ様に、柔らかな肉片の上をざらつく唇で擦^{なぞ}り続けた。

一^{ひとしき}頻り唇で秘貝の周縁の散策を楽しんだ後、分厚い舌を伸ばして紅い真珠球のような雌株を転がした。

突然、敏感な神経の集中した陰核を撫でられ、雷に打たれた様に電撃が下腹から脳髄を駆け上り、ヒーィ！と悲鳴を上げて身体をくねらせた。

少女の反応に気を良くした村崎は、尚も執拗に舌先を使って攻撃を加え続けた。

村崎の舌技にまともに晒されている間に、コロコロと柔らかかったビーズ玉は次第に硬度を増し、村崎の鼻腔にそよいでいた清々しい少女の匂いは濃厚な女の匂いになんて変わって来た様に感じられた。

「銀子の話によると、この娘は後ろの門を鍛えられ、肛口を攻められただけでイクように躰けられたと言う話やが、手付かずの前の方も自然とそれに合わせて開発されたと言うとか」と、思った。

クリをしゃぶっていた舌を、まだ乙女の膜で塞がれた秘孔に移した。

其処からは既に熱い樹液が滲み出ている。

「あーっ！良^え一味や！」舌先で少女の秘奥から送り届けられた秘水を掬い取って感嘆した。

「ほな、そろそろ希美ちゃんの初物を戴こか・・・」

部屋の中央に置かれた検診台を横目にチラッと見て口にした。

それは、これまでの肉体改造において使用された女体を拘束するための台で、何度も調教に立ち会った村崎はその使い方を熟知していた。

村崎は希美の手足を拘束していた手枷足枷を外したが、村崎の攻撃で氣息奄々としていた希美は身体を支える力も無く床の上に崩れ落ちた。

そんなガックリと倒れ伏す希美を軽々と抱きかかえると、検診台まで運び、台の上に仰向けに横たえさせ、手足を台の脚に固定した。

「さー、準備は出来たで一、これから希美ちゃんを女にしてやるさかいになー！」

と、幼い少女の秘膜を引き裂くことが出来る感激に笑い声を上げ、平手で希美の頬をペタペタと叩いた。

意識を取り戻しはじめ、薄っすらと開いた希美の瞳に、何時の間にか着物を脱ぎ捨て全裸となった老人の姿が映った。

肥満して垂れた腹の下の白い毛が大半を占める股間から、その灰色の密林を突き抜いて黒ずんだ醜怪な肉茎が天を突くように隆起しているのが映り、声も上げることが出来ず目を見張った。

「どや？美味しそうな肉棒やろ？嘗めてみたいと思わんか？」と、言いながら希美の口を覆っていた猿轡を外した。

豆絞りの日本手拭いの下の瘤を作って嚙まされていた布も外され、ハーッと息を吐いた。

猿轡を外されホッとする間も与えず、村崎は隆起したモノを少女の唇に押し当てた。

加齢臭の混じったムッとする淫臭が希美の鼻腔を捉えた。

執拗に熱く肥大したモノを擦り付けて来る老人に逆らえず、薄っすらと唇を開き舌を伸ばして、巨大な先端部を嘗め始めた。

「そや、そや、あーっ！上手や！」

何時しか、舌を駆使して陰茎全体を愛撫し始めた希美の舌技に感激の声を上げた。

最早何も分からなくなった希美は忘我の中で銀子から仕込まれた舌技を自然と発揮し始めていた。

「今度は、口に含むんや！」

舌を駆使した愛撫に満足した村崎は猛々しく隆起した分身を少女の口中にねじ込んだ。

抵抗の気力を喪失している希美は銀子達から教えられたように口全体を使って老人のモノに奉仕した。

「あーっ！良一氣持ちや！流石は銀子に仕込まれただけの事はある！」

希美の口技に満足の声を上げながら、薄い少女の胸の上に置かれた二つの鏡餅のような乳房に両手を伸ばした。

「あーっ！柔らかくて指に吸い付く様や！アンタの母親のお竜そっくりや！・・・どや？氣持ち良一か？」と、口を使って愛撫させながら、セカセカと両手で乳房を揉み上げた。

女扱いに慣れた村崎の巧妙な乳房への愛撫と口内に広がる淫靡な匂いに、何時しか希美は呑み込まれて行った。

「もっと激しく強く舌を動かして嘗めるんや・・・そやそや・・・あーっ！良^え—気持ちや！」
村崎に煽られ、必死になった希美は無意識の内に銀子から教えられたテクニックを駆使していた。

「アーッ！良^え！・・・アーッ！良^えわ！、とても処女とは思えん技や！そこらの売春婦でもこんなに上^う手無いわ！」

フンフンと荒い息を吐く希美の口を使った反撃は益々激しくなっていた。

希美の口技の巧みさにすっかり巻き上げられた村崎は堪らず腰を痙攣させ口内に激しく放射した。

銀子達から厳しい指導を受けた希美は目を白黒させながらも必死になって口内に放出された粘っこい液を飲み下し、教えられたように尿道内に残った残液を吸り、舌を使って清掃した。

幼げの顔をしながらベテラン娼婦顔負けの口を使った技術に満足して、両手を離し、肉塊を口から抜き取った。希美の唾液で濡れ光る肉塊と甘い息を吐きながらぼんやりと開いたままの口が一筋の粘っこい糸で繋がっていた。

射精を終えたばかりだと言うのに村崎の分身は未だ隆々と天を向いていた。

開け広げられた希美の股間に回った村崎は、既にその部分がぐっしょりと濡れているのを目にして、「子供みたいな顔してるくせに、身体はもう大人という事か・・・」と、ニンマリと笑った。

パツパツと開いた秘奥に顔を近付け間近から観察した。百合の花にも似た濃厚な匂いが鼻を擽った。

台の高さを調節して、大きく広げられた股間の中心に自らの分身をあてがった。

そのままグッと腰に力を込めると、仰向けに横たわる希美の口から「アアーッ！痛い！」と、哀切の籠った悲鳴が上がった。

バリバリと薄いシートを突き破るような感触を硬化した村崎の亀頭が感じていた。

それに続いて、温かく湿った肉の祠が村崎の太いモノを迎え入れた。

「どや？今、希美ちゃんのオ^ちの中に入っているんやでえ・・・分るか？・・・ああ・・・それにしても良^え—締め付けや！流石は銀子が鍛えただけの事はある！」

少女の身体を征服した喜びに感激して声を発し続けた。

気味の悪い老人に串刺しにされたまま身動きも出来ず吸り泣く希美の姿があった。

暖かく湿った乙女の極上の肉洞を堪能していた村崎は、「待ってや、今、もっと気持ち良く

させてやるさかいにな・・・」と、口にしてゆっくりと腰を前後させ始めた。

村崎の腰の動きに合わせて、希美の口からアッ、アッと呻き声が上がった。

希美の反応に気を良くした村崎の腰の動きは次第に早くなっていった。

それに合わせるように、希美の呻き声も喘ぐ声の様に変化して行った。

希美の性感を更に掻き立てようと両手で乳房を揉み上げ始めた。

村崎の掌の中で乳房は汗ばみ、桜色の乳首は硬くしこっていった。

股間と乳房からズキズキとする刺激が駆け上り、老練な村崎の術中に墮とし入れられた希美は、何時しか苦痛とは異なる脳髄が痺れるような不可思議な感情に支配され始めていた。

「どや？どや？」と、嵩に掛かってまるで杭を打ち込む様に腰を打ち付け続けた。

得も言われぬ感覚に支配された希美は、そのまま頭の中に拡がったピンク色の靄の中に絡め取られて行った。

「ふふ・・・逝きおったか！」

少女の絶頂の痙攣に合致させて白い飛沫を膣内に浴びせた。

ほとんど意識を喪失している希美の身体が、肉洞内の村崎の痙攣に同調するかのようにはくはくはと蠢いた。

「あー！良かったわ！」孫ほども歳の違う少女に思いの丈を放出して、満足したように肉塊を引き抜いた。

まだポツカリと口を開いたままの秘孔から、白濁した液体が泡を浮かべて流れ出た。

「ほら！希美ちゃんと儂の流した汁で汚れた珍宝や！その口を使って綺麗にしてや！」

二回の放出により、力を失い下を向いたべつとりと精液と愛液に塗れた陰茎を強制された絶頂の余韻で意識の薄い希美の唇に押し当てた。

薄っすらと目を開き異臭を放つ肉塊を目にした希美は、大人しくそれを啜えて行った。

希美の従順な舌使いで軟化していた分身が再びモリモリと元気を取り戻し始めていた。

「希美ちゃんはオイドの穴を^{つゐ}使うて芸が出来るんやてな、儂に見せたってや！」

仰向けに検診台に固定していた希美の身体を今度はうつ伏せに縛りなおして、傍らに用意されていた茹で卵を掴んだ。

希美の雪の様に双丘は上を向き、柔らかな大腿は大きく左右に開け広げられていた。

「ほら！オイドの穴を緩めて呑み込むんや！」

茹で卵の先端を肛口にグリグリと押し当てながら命令した。

残酷な老人の執拗な攻撃に根負けして、ハアと一つ息をすると輪状に筋肉の緊張を解いた。

「おお！開いていく！開いていくで！」

見ている前で広がって行く排泄口に驚きの声を上げた。

仮借ない肉体改造により開発された希美の後口は、ピクピクと蠢きながら大きく開口し、その内部の様子を見せていた。

「さあ！呑み込むんや！」

村崎の押し当てた茹で卵は半分ほど双臀の狭間の中に埋まった。

「ほら！後は自分で呑み込むんや！」

銀子から調教された女体は自律的にその機能を発揮していた。

菊花の皺を押し広げて、半分ほど顔を見せていた白い卵はピクピクと揺らぎながら腸内に吸い込まれ始めた。

「おお！入って行く！入って行くで！」

その様子を目を丸くして見続けた。

「まだ少し白いのが見えているで！最後まで呑み込むんや！」

村崎の励ましを受けた希美は顔を真っ赤にして、ウンと息を吐くと、最後の力を込めて腸内に吸い上げた。

卵を完全に腹の中に収めた希美の菊の座は何も無かったようにピタリと閉じていた。

「おお！とうとう完全に呑み込みよった！いや、大したもんや！」

希美の秘技に感激して、手を叩いて大声を上げ続けた。

後口を駆使した淫技は若い娘にも相当の労力を強いるのか、検診台のマットの上に胸を押し付け荒い息を吐いていた。

「さあ！今度は呑み込んだものを出すんや！」

疲弊した少女に憐憫を掛ける様子も無く、豊かな臀丘をパンパンと叩いた。

完全に閉ざされていた菊の蕾がほころび始め、その中心から白い物が姿を見せ始めた。

「おお！出て来よる！出て来よるで！」

その様子に感激の声を発した。

後口を押し開いて出現した卵は見る見るその大きさを増し、表に向かって突き出していた。

「さあ！最後や！頑張るんや！」

直径が最も太くなる部分で停滞していた卵が村崎の声を受けてポンと飛び出し、待ち受ける村崎の掌の中に産卵した。

出産を終えた希美が全身汗まみれになって激しく呼吸をしていた。

「ほら！もう一度や！」

産み落とした卵を再度菊の座に押し当てた。

「アアーッ！もうお許してください！」

堪らず、涙を浮かべて哀願するのを

「あかん！あかん！これも希美ちゃんが一流の売春婦に成るための練習や！」と、笑い倒すのであった。

こうして、泣きじゃくる少女に更に何度も卵産みを強制するのであった。

「最後は希美ちゃんの腹の中に何個入るかの試験や！」

「モー、イヤ！」腸孔を襲う刺激に耐え切れず悲鳴を上げた。

「うるさい！さっさと呑み込むんや！」と、怒気を露わにして命じた。

残酷な老人の態度に恐怖した希美は涙を啜りながら次々と卵を受け入れていた。

「ほほー・・・二つ半か・・・」

二個の卵を腸内に収め、入りきらなかった卵が半分外に姿を見せている様子に呟く様に口にした。

二個半の卵を腹の中に収めた希美は啜り泣きながら台の上にぐったりと横たわっていた。

「それでは、いよいよ希美ちゃんの鍛えられた後ろを頂くか・・・」

卵を取り去った後の^{うづ}虚ろに老人の隆起したモノが押し入って来た。

「ああ・・・いやいや・・・」

残忍な老人のピクピクと蠢く肉塊が腸腔を押し広げて侵入して来るのを感じて絶望的な声を発した。

「おおー！これは、流石に鍛えられた尻穴や！儂のモノをグイグイ締め付けて来よるで！」腰を押し付けながら感激して大声を発した。

希美のアヌスを責め立てながら、「どや？希美ちゃんも身体を使うてお腹が空いたやろ？」と、何度も腸管を潜った卵を手にして口に押し当てた。

このでっぷりと肥満した老人の底知れぬ残忍さに涙をポロポロと溢しながら、腐臭を放つ卵を口に含み咀嚼した。

少女を完全に蹂躪した征服感に満たされながら激しく腰を使い続けた。

希美の開発された後口に何度も放出しても村崎の腰使いは止まることは無かった。

全身にびっしょりと汗を浮かべハアハアと荒い息を吐きながらも欲望が赴くままに腰を振り続けた。

村崎に突き立てられながら、何時の間にか、希美は口から泡を吹き白目を剥いて完全に意識を失っていた。

「それにしても、和久井の調合した回春薬の効き目は大したものや！硬さといい、持続力と言いまるで二十歳の頃に戻ったみたいや！」

息を荒げながら感激して口にした。

「爺さん、随分と頑張るじゃないか・・・」

部屋の中に仕掛けられた隠しカメラの画像を見ながら剛沢が口を開いた。

監視室では剛沢と銀子と和久井の三人が食い入る様に隠しカメラから送られる画像を眺めていた。

「おい！爺さんは必ず、お死^{つち}ぬんだろうな？」

傍らの和久井に声を掛けた。

「はい！ヒビの入ったエンジンにスーパーチャージャーを載せてニトロを突っ込む様な物です！必ず壊れます！」

自信を持って断言する和久井に、

「それにしても随分と保じゃないか？本当にバケモノ級だな・・・」

呆れたように口にした。

「それじゃ、私が引導を渡してくるわ・・・」

そう一言口にすると銀子は一人で監視室を離れた。

「どう？調子は？」

肉欲の赴くままに激しく腰を使っていた村崎は声を掛けられ、戸口の扉に背を預けて銀子が腕組みをして立っている事に気付いた。

チラッと銀子に視線を泳がせたが、再び希美の方を向き直り、

「ああ・・・銀子ちゃんか・・・全くこの娘は最高や！前の穴^ちと言ひ後ろの穴と言ひ儂にピッタリや！こんな気持ちの良え娘を抱いたんは生まれて初めてや！」

と、感激の声を発した。

「ホホ・・・それほどでも無いんじゃない？」

「焼き餅を焼かいでも良え、後で銀子ちゃんもちゃんと抱いてやるさかいにな・・・」

「別に焼き餅なんか焼いていないわ・・・ねえ・・・この娘がどうして親分にピッタリなのか教えてあげようか？」

銀子の意味深な言葉に村崎の視線が銀子に釘付けとなった。

「それはね・・・」

そう口にする銀子の頬が歪み残忍な光が瞳に宿った。

「それは、希美が貴方の実の娘だからよ・・・」

銀子の突然の言葉に激しく腰を前後させていた動きがピタリと止まり、背中を冷たい汗がツーと流れ落ちた。

「ウソだ・・・」

青白い貌を浮かべてポツリと呟いた。

「嘘じゃないわ！希美の顔を良く見てごらんなさい！目の形といい、鼻の形と言い自分とそっくりだと思わない！？」

と、腕を前に突き出し、指で指し示す様に叫んだ。

蒼白となった村崎が希美の後口に突き立てたままじっと硬直していた。

「貴方は実の娘の処女を奪って、尻穴を^{ほじく}穿る変態ジジイなのよ！！」

眉間に深い皺を寄せ、憤怒の光を目に宿らせ、銀子が呪うような声で激しい言葉を浴びせかけた。

「ウソだー！！」

最後の力を振り絞って大声を発した直後、全身にチアノーゼが発生し、そのままうつ伏せに横たわる意識の無い希美の上に覆いかぶさる様に倒れて行った。

しばらく希美の上に折り重なっていたが、やがて命無き村崎の身体がゆっくりと崩れ落ち、ゴロンと冷たい床に転がった。

村崎の肉茎が埋まっていた二つの肉穴は未だ開いたままで、奥からドクドクと白い物を垂れ流していた。

「ホホ・・・ちゃんと思いは遂げていたようね・・・これで思い残すこと無くあの世に行けるわね・・・」

村崎の^{むくろ}骸を爪先で小突きながら、甲高い声で勝ち誇った様に笑い声を上げ続けた。

抗争のはじまり

村崎が腹上死したとのニュースはたちまち駆け巡った。

全国の有力暴力団をまとめて村崎會を一代で築いたカリスマ性の在る親分であったが、女に目が無いことが唯一の欠点で、もし失敗することが有れば、それは女によるものだろう—と、前々から囁かれていたので、今回の大亜門戸会の本部における突然死についても誰も剛沢の陰謀を疑う者はいなかった。

ただ、村崎會の後継体制を決めずに急逝した事は会内部の大きな問題となった。

古くから村崎會に参加している親分には奈和親分に同情を寄せる者は多く、剛沢の提供する色欲に負けて目高組を冷たく見捨てたことに批判的な幹部は多く居たが、村崎の圧倒的な力の前に渋々従っていた幹部連中であつた。これらの幹部連中の率いる組織は、自然と反大亜門戸会のグループを結んで行った。

一方、村崎の庇護の下、強大になってしまった大亜門戸会には、最早、逆らっても仕方ない—長い物には巻かれろ—と、密かに剛沢と杯を取り交わす幹部連中も存在した。これらは親大亜門戸会のグループに纏まって行った。

今や村崎会内部は反大亜門戸会と親大亜門戸会の二派に分裂し、一触即発の危機を迎えつつあつた。

この両派の動きに村崎會に非加盟の全国の暴力団体も漁夫の利を得ようと、密かに両グループと接触するようになっていた。

まさに日本全土を巻き込んだ抗争が始まろうとしていた。

この事態は当然公安機関も掴んでいた。

「これが実の父親を縊り殺した尻の穴か・・・」

検診台にうつ伏せに縛り付けられた希美が背後から剛沢に突き立てられていた。

長時間に渡って剛沢から凌辱され既に氣息奄々の状態であつた。

其処に剛沢から呼び出された二人の子分がやって来た。

剛沢は人に見られている事も気にする様子もなく、希美のアヌスを楽しみながら、

「明日、黄原が出所して来る・・・模範囚として刑期が短縮されたようだ・・・」と、口にした。

二人の子分はボスの剛直が希美の秘孔を出入りする様子を直視しながら、次に当然発せられるであろう次の指示を待った。

「この時期に黄原に動き回られては面倒だ。お前達は出所して来た黄原をバラすんだ！」
剛沢の命令に二人はハッと肯いた。

黄原が出所して来るとの情報は銀子の耳にも入っていた。

そして、あの人は自分に合いに来るのだろうか？と、案じた。

翌日二人は剛沢に不首尾を報告した。

二人の話によると黄原は既に三日も前に出獄しており、密かに警察の手により保護された様だとの事であった。

二人の報告に忌々し気に舌打ちする剛沢であった。

「何！？黄原に逃げられた一だと！」

その頃黄原を保護し観察していた警察内部でも大騒ぎとなっていた。

黄原を嚴重に監視していた警官の隙をついて逃走したとの連絡が上がって来たのだった。

「クソー！奴は今回の全国の暴力団一掃計画の『頂上作戦』のキーパーソンだぞ！居なくなりましたで済むか！草の根分けても見つけ出せ！」

頂上作戦を指揮する幹部警察官が怒鳴り声を上げた。

「しかし・・・大変な事態になりましたね・・・」

青山が茶を啜りながら口を開いた。

其処には大亜門戸会の主要幹部が集まり雑談をしていた。

「そうさ・・・日本中のヤクザが二つに分かれて最後の一人迄殺し合う・・・謂わばヤクザ世界のハルマゲドンさ！」

と、古参幹部の一人が面白そうに声を上げた。

「でもそんなことになったら内の会の人間も大勢傷付くんじゃないですか？」

心配そうに尋ねる青山に

「それがボスの狙いなのださ！」

と、笑い声を上げた。

古参幹部達の言葉にキョトンとする青山に、

「青山！お前は後から入って来たからボスの事を良く知らないだろうけど、ボスが一番嫌

っているのはヤクザなのさ！内の会の人間もヤクザなんだから、死ねば良いと思っているのさ！」

「そんな・・・」

古参幹部の言葉に呆然とした。

「ボスはヤクザを殺すために自分がヤクザになったのさ！最初は一人でヤクザ相手に戦っていたが、一人では埒があかないと仲間を募って大亜門戸会を立ち上げたんだ！今ようやく長年の夢が実現しようとしているんだ！今ボスは嬉しくってしょうが無いんだぜ・・・」

「そう云う事だ・・・だから青山、悪いがお前には死んで貰うぜ！」

何時の間にか入って来た剛沢が青山の後に立って告げた。

其処に集まった幹部連中も剛沢の発した言葉の意味を解しかねて、じっと剛沢の方を見た。

「青山！お前は殺された青沼の弟だ！お前は兄の敵討ちをするために大亜門戸会に入って来たんだ！」

剛沢に告げられ青山の顔色が青くなり喉がゴクリと鳴った。

「青山！お前は俺の事をそんな事も気付かない間抜けだと思っていたんだろう？そんな事はお前が大亜門戸会に入って来た時から分かっていたぜ！」

「それなら何故今まで放っておいたんだ？」

「俺はな、敵の人間でも味方の人間でも使える奴はとことん使い倒すのが流儀だ！お前は確実に俺を殺すために俺に近づいて来ると思ったのさ。俺の側近となって機会を窺えるように、俺の目につくように働いてくれると思っていたぜ。実際お前は俺の為に良く働いてくれたぜ。感謝するぜ！」

「最初から何もかもお見通しだった一て、事か・・・」

剛沢に見抜かれていた事に気付かなかった自分に対して自嘲的に薄ら笑いを浮かべた。

「今までは俺さえ油断しなければ良いと思っていたが、これから抗争が始まって忙しくなれば、俺にも隙が出るかも知れねえ・・・前から飛んでくる弾に気を取られているうちに後ろからの弾でやられたんじゃ話にならねえ・・・さあ！しょっ引いて行ってバラすんだ！」
青山を連れて行けと顎をしゃくった。

「ちょっと待ってくれ！事の是非は別として俺がお前の為に働いたのは間違いないだろう？殺される前に俺の望みを聞いてくれても良いんじゃないか？」

取り囲む幹部連中により引き立てられようとする青山が突然変な事を言い出したと思った。

「良いだろう、何が望みだ？」と、薄ら笑いを浮かべて聞いた。

「死ぬ前に兄貴の愛した女を愛させてくれ・・・」

青山の言葉を聞いて一瞬キョトンとした表情を浮かべた剛沢であったが、次に大声で笑い出した。

「おい！聞いたか？コイツ殺される前に暁美のことを抱きたいってよ！」

今まで幹部連中に交じって女を抱く事も無く、女に興味が無いのかと思っていた青山の言葉に驚きを浮かべながら、

「良いだろう！暁美を抱かせてやろう！」

誰か暁美を連れてこい—と、命じると、「但し、皆が見ている前でやるんだ！」と、付け加えた。

青山が幹部達の見守る前で暁美を抱く事になったとの話が駆け巡り、牢から連れ出された暁美の後には、組員だけでなく大亜門戸会の売春部門を担当し売上金を持って来ていた黒川組のボスの黒川やたまたま商談で訪れていた沢田や銀子もゾロゾロと従った。

事務所の扉を開くと机や椅子は隅に追いやられ、既に多くの人が集まっている状態であった。

その部屋を埋め尽くす人垣の中心に既に全裸に剥かれた青山が^{ひざまず}跪いていた。

埋め尽くす人垣を分けて暁美が輪の中心に連れて来られた。

「青山はこれから処刑されることになった。死ぬ前にお前の事を抱きたいそうだ。青山の最後の望みを叶えさせてやってくれ・・・」

全裸の青山に向かい合い、同じく全裸のまま牢から連れ出されて来た暁美が理解できずに呆然としている様子に剛沢が口を開いた。

「何だ？知らなかったのか？青山は死んだ青沼の実の弟だ！」

「そうだったの・・・」

と、ポツリと呟いた。

思い返せば、好きな時に自由に自分達を抱く事が出来るのに、肉欲の赴くままに自分達を食う男達に交じる事も無く、ただ遠くから憐れむような哀しい目で抱かれる私の事を見ていたのを思い出した。私が、最初に本当に愛した人にこんな弟が居たなんて・・・

暁美は跪く青山の手を取って、部屋の中央に敷かれた薄い布団の上に誘った。

流石に緊張感で青山の股間のモノは委縮して力無く垂れていた。

暁美は大事なものを捧げ持つように、優しく肉茎を手にとるとそっと頬を触れさせた。

暁美の柔らかな頬が敏感な肉塊に触れて、ああ・・・と、呻くような声が上がった。

両手で捧げ持つ男のモノに丹念に唇をなぞり付けた。

暁美の愛技を受けて萎れていた男根が少し力を取り戻し始めた様に見えた。

僅かずつ硬度を増しつつある肉塊に、舌を伸ばして丁寧に亀頭部や裏筋を舐め上げた。

「ほっ・・・中々のモノじゃないか！」

暁美に愛撫される内に見る見る膨張を始めた青山の男のモノを見詰めて観衆から驚きの声が上がった。

今はすっかり自信を取り戻した男のモノが股間からそそり立っていた。

暁美は成長した怒張を口の中に含んだ。

懐かしい記憶にある甘い匂いや味がするように感じられた。

暁美の巧みな口技に煽り立てられ青山の腰がビクビクと震えた。

鋭く込み上げる快感に浸る青山に、「良いのよ・・・思い切り口の中に出して・・・」と、心の中で呟いた。

突然、青山の男の飛沫が怒涛となって口の中に流れ込んだ。

青山の情熱を感じながら甘い味覚が口の中に広がる様に感じた。

青沼には口を使って愛したことはあったが、口内射精をさせたことは無かった。愛する男の情熱を口で受け止め、飲み干してやるが無かった事を後悔していた。

舌を絡めて綺麗に吹き清めた後、青山の身体を布団の上に優しく横たえさせた。

仰向けに横たわる青山の股間のモノは未だ隆起していた。

暁美は青山の上に跨り、指で濡れそぼる肉襞を開くと、ゆっくりと青山のファルスを身内に沈めて行った。

自分の亀頭が柔らかく暖かな女肉の中に埋め込まれて行くのを感じて、思わず、ああ・・・と、声が漏れた。

青山の男を全て自分の胎内に呑み込むと、ゆっくりと腰を使い始めた。それは、娼婦と客が交わる時の性技ではなく、愛する者同士の性愛であった。

何時もの金で女肉を買った客からもたらせる恥辱と苦痛に満ちた交接ではなく、真に愛する者から与えられる喜びに何時しか浸りきっていた。

二人は、取り巻く男達の下劣な視線を忘れたかのように、神話の始まりの男神と女神しかいない二人きりの世界で交わる様に深い肉体の喜びに浸っていた。

何度も体位を変え、上になったり下になったりを繰り返す二人の様子を取り囲む男達は生

唾を呑み込んで見詰めていた。

曉美の上になった青山が、睦言を曉美の耳に注ぎ込む様に、耳に口を押し当て小声で囁いた。

「時間を稼ぐんだ・・・もう直ぐ黄原が殴り込みに来る・・・」

青山の言葉に、曉美は夢から覚める様にハッと目を見開いた。

その時、外から叫び声や衝突音の様な音が部屋の中に聞こえて来た。

その音は段々と大きくなって来て銃声や爆発音が混じる様になって来た。

異常な事態に部屋の中の男達から動揺する声が上がった。

「何だ？殴り込みか？」剛沢が外の音に耳をそばだてる様に振り向いた。

全く意外であった。予想外であった。今はどの組も戦力を蓄えるのに夢中の段階で、武力行使に発展するまでは未だ十日から二週間は掛かると予想していたのだった。

「くそ！何処の組だ！」

自分の予想の甘さを悔しがるように声を上げた。

その時、聞いたことも無い様な轟音が響き、同時に地震の様な巨大な揺れが建物を襲った。

その激烈な振動に立っていた男達は全員床に叩きつけられ、幾つかの天井パネルが剥がれて落下し、濛々とした砂煙が室内に立ち込めた。

「糞！こうしてはいられん！」

忌々し気に声を上げると居合わせた幹部連中を引き連れて部屋から飛び出って行った。

部屋に居合わせた男達もその後に従った。

何か変な動きをしたら、躊躇せず撃ち殺せ一と、拳銃を預けられた監視の二人以外に部屋の中には青山と曉美の二人だけが取り残された。

青山の監視を命じられたとは言え、まだ若く血生臭い経験の無い二人の三下組員は、外から聞こえて来る騒ぎに気もそぞろで、視線は布団の上に横たわる二人から何度も外れた。

二人の監視員の隙をついて青山が一人に体当たりし、拳銃をもぎ取るともう一人を撃ち殺した。

監視の二人を瞬殺した青山は、男の着ていた服を剥ぎ取り、曉美の方に投げて寄こした。

剛沢を殺すため後を追おうと部屋を出ようとする青山の腕を曉美が咄嗟に掴んだ。

「お願い・・・娘達を助けて・・・」

曉美の憂いを帯びた真剣な眼差しで見詰められ青山の心が動いた。

「分った・・・」と、一言口になると二人は外に出た。

殴り込み

大亜門戸会本部の城壁の様なコンクリート壁の一面に設けられた堅固な鉄門の前で外を警戒していた組員が、先程から門に直通する道路の路肩に寄せて停車するハザードランプを光らせる大型トラックが気になっていた。

門からは 50 メートル程離れ、荷台を門の方に向けて停車していたので門の近くとは言えなかったが、この時期に本部の目の前に車を止められるのは目障りな存在であった。

5 トントラックの運転台に座った黄原がもう一度腕時計を確認した。

「もう直ぐ決められた時間だ・・・」

運転席の窓を全開にすると、これからの行動をもう一度頭の中で反芻した。

エンジンを始動し、ギアをバックに入れた。

ミラーに大亜門戸会の組員が二人こちらに近づいて来るのが映った。

アクセルを強く踏み込み、クラッチを合わせると、タイヤが悲鳴を上げ、トラックは急激に後進を開始した。

近づいて来た二人の組員を巻き込み、バックで高速走行する大型トラックは激しく鉄門に衝突し、門をへし曲げ、門扉を左右に押し広げ、大亜門戸会本部の敷地内に突入した。

敷地内には、お竜達を幽閉している牢舎の設けられた広い地下室を持ち、地上階は組の事務所として使用している三階建ての建物と、剛沢や愛人達が起居し、捉えた女達に売春行為をさせるための施設を持つ三階建ての本館と、三百人からの若手組員が起居する五階建ての鉄筋コンクリートのビルの三棟がコの字型に配置されていた。

黄原はバック走行のまま巧みなハンドル捌きで、ビルに向かってトラックを操った。

異変に気付いた男達が逆走して来るトラックに向けて拳銃を発射したが、暴走して来るトラックを止めることは出来なかった。

立ち塞がる何人もの男達をなぎ倒し、トラックは若手組員の宿舎となっているビルの玄関前にピタリと横付けした。

その時ビルには何人もの組員がいたが、出口を塞がれ、建物とトラックの間のわずかな隙間を身体を横にして通るしか無く、行動が制限されてしまった。

向かい側の組事務所から何人もの組員が拳銃を手バラバラと走り出して来た。

手にした拳銃から何発もの銃弾が発射され、トラックの側面に幾つもの穴を開けつつ、駆け寄って来た。

黄原は助手席に置かれていた段ボール箱から手りゅう弾を幾つも掴み上げ、開け放たれた窓から空に向かって投げた。

頭上で炸裂する手りゅう弾の破片が降り注ぎ、トラックに駆け寄ろうとしていた男達は、堪らず地面に伏せ、両手で頭を守った。

組員の攻撃が中断された隙に運転台から飛び降りた黄原は、足元のマンホールの蓋をこじ開けその中に身を落とした。

それは、雨水槽の蓋であり、大雨の降った後などに一時的に水を貯めておく施設であった。通常雨水槽は満水になると、満水警報が表示され、自動的にポンプで排水される仕組みになっていたが、黄原の指示を受けた青山が細工して、警報も表示されず排水もされない状態となっていた。そのため雨水槽の中には満々と水が溜まっていた。

長年大垂門戸会に所在していた黄原は各施設の位置を知悉しており、事前にトラックを止める位置などを計画に織り込んでいたのだった。

雨水槽に飛び込む直前に黄原は起爆装置のリモコンボタンを押した。

少し遅れて猛烈な爆発が起き、雨水槽の底で横たわる黄原の目に、爆風の通過による急激な陰圧で重い鉄の蓋は吸い上げられ飛び去り、暗闇の中にポッカリと空いた丸い穴の上を赤い炎が通過するのが映った。

急激な圧力変動により水面から無数の泡が立ったが、厚い水の壁が水底に横たわる黄原の身体を守った。

衝撃により気を失いそうになるのをグッと堪え、水底で治まるのを待った。

黄原が地下の雨水槽から地上に顔を出した。

まるで地獄の釜が開いて、鬼が地上に這い出てきたように身を乗り出した。

全身ずぶ濡れとなり、水を滴らせながら両足でスックと大地に立ち上がる黄原が居た。

其処には復讐に燃えるワンマンソルジャー黄原の姿があった。

復讐劇

「早く逃げないと！全くこんな所に居て巻き添えを食ったらしょうがない！」

暁美と青山の抱き合う姿を面白そうに眺めていた沢田は、この騒ぎの中、自分の部屋に駆け込んでいた。

剛沢は沢田に本館の中に自由に使って良いと、一部屋を貸し与え、沢田は大亜門戸会に於ける出先事務室の様に使っていたのだった。

沢田は部屋の中の大きな金庫を開けると、中に貯め込まれていた現金をバックに移し替え始めた。

その時、明け放したままの扉に人が立っている気配を感じ振り向いた。

「何だ？銀子さんか・・・こんな所に居ては危ない。一緒に逃げよう」と、声を掛けた。

しかし、銀子の異常な様子にギョッとした。

銀子は両腕で拳銃を構え、銃口を沢田の方に向けているのだった。

「銀子さん・・・何の冗談よ？」

と、問い掛けたが、銀子の目は憤怒に燃え、今にも引き金を引きそうになっている状況に蒼白となった。

「銀子さん！今までの事は悪かった！お金を上げるから許して！」

と、バックから札を驚掴みにして差し出した。

「これで足りなければ、事務所に戻ればもっとお金が有るから・・・」

沢田の言葉が終わらない内に銀子の手にする37口径リボルバーの銃口から轟音と共に銃弾が発射された。

弾は過たず沢田の眉間に命中し、後頭部から血飛沫を吹き出して貫通した。

仰向けに倒れた沢田の上に、手にしていた札が紙吹雪の様に舞い落ちた。

男のダブダブの服を身に纏った暁美の腕を引いて青山が本館から外に飛び出して来た。

そして、辺り一面の変わりように息を呑んだ。

5階建ての宿舍棟の鉄筋コンクリート作りの建物はすっかり姿を消し、跡には僅かな土台が残るだけとなっていた。

爆風をまともに受けた事務棟も3階部分が崩落し火災を発生していた。

爆風の影響が少なかった本館も一部が崩れ落ち火の手が上がっていた。

彼方此方に火の手が上がる地面には千切れた腕や脚が無残に転がっており、火傷や傷を負った人間が痴呆の様に訳の分からない言葉で泣き叫びながらウロウロと歩き回っていた。

黄原は5トントラックの荷台に宿舍に横付けする側にはダイナマイトを、そして反対側に

はヤシ油や動物油にガソリンを混ぜた混合液を一斗缶に詰め、大量に積み込んでいたのだった。

これにより、ダイナマイトで宿舎棟を吹き飛ばすと同時に、離れた事務棟にも油脂とガソリンの混合液を振りかけ火災を発生させていたのだった。

粘性の強い油脂類は下に流れ落ちる事無く壁にへばり付いて燃え、燃焼温度が高いため慌てて水を掛けると逆に水蒸気爆発を引き起こし、益々火の手を強くする効果が在った。

このため、無傷の男達が必死になって消火を試みたが、全く手が付けられない状態であった。

お竜達を閉じ込めた牢舎にも屋外の騒ぎは伝わって来ていた。

爆心から遠く、地下のため直接の被害は無かったが、地震の様な激しい揺れや爆発音は響いていた。

怯える我が子を抱き締める内に、牢舎の外から男達の騒ぐ声が聞こえ、銃声が響いた。

「姐さん！助けに来ましたぜ！」

牢舎の扉を開いて飛び込んで来た男の顔を見てお竜が思わず叫ぶように声を上げた。

「テツ！お前だったの？」

「ヘイ！黄原の兄貴から塀の中で騒ぎが始まったら飛び込んで行って、姐さんたちを助ける様に言われてたんで・・・」

テツは撃ち殺した看守から奪った鍵の束を掴んで、お竜と希美が繋がれた檻の扉を開いた。

続いて、愛美の閉じ込められた檻の扉を開き、最後に亜紀と栄美を助け出した。

全裸のまま檻から抜け出した女達は、壁沿いのハンガーに掛けられた自分の服を手に取り、身に着け始めた。着物姿では脱出するのに動き難いことは目に見えていたが、お竜にしても亜紀にしても他に着る物は無かった。

其処に暁美と青山が駆け込んで来た。

「良かった！無事で！」

愛美の姿を目にして、暁美は我が娘を夢中で抱きしめた。

「さあ！早く逃げよう！」

青山が促した。お竜と暁美はテツが撃ち殺した二人の見張りが持っていた匕首を拾い上げ手に構えた。

一行が地上に繋がる唯一の出口である階段部屋まで来た時、既に炎が回っており通り抜け

出来ない事を知った。さつきまで何事も無く通って来た階段であったが、僅かな間に炎が回って来ていたのだった。

「仕方ない！地下通路を通して逃げよう！」

暁美達は元来た道を折り返して地下通路の方に向かった。

ところが、地下通路への侵入を阻む様に、通路の入り口には大亜門戸会の男達が待ち受けていた。

先頭には例の黒人兄弟の巨体が控えていた。

相変わらず黒光りする筋肉剥き出しの身体に小さなパンツを履いているだけの姿であった。男達は上で何が起きているのか判らない状況で混乱した状態であったが、女達が逃げ出したら取り押さえるように一との日頃の命令は生きていた。

刀や銃などの武器を使用せず、無傷で取り押さえる様に堅く命じられており、前回女達が脱走を図った時は、何の武器も手にしない状態で女達に立ち向かい、酷い逆襲を受けた苦い経験があるが、今回はプロレスラーの様な体格の双子の黒人兄弟が居るから大丈夫だろうと余裕を持って見ていた。

お竜と暁美は手にしていた匕首を捨て、右手を前に突き出すと、‘おいで・おいで’をするように四本の指を折り曲げた。

二人の黒人がアメフトのタックルをするように暁美達に向かって駆け出した。

巨体をサッと交わした二人の女は、咄嗟に相手の手を掴み、相手の突進力も利用して投げ飛ばした。

柔道の受け身も知らず、まともにコンクリートの床に頭から叩きつけられた兄弟はそのまま気を失ってしまった。

「アンタ達には随分と楽しませて貰ったね、これは思い出に貰っておくよ・・・」

と、口にするとパンツを押し下げ、ダラリと垂れた男根の根元に匕首の刃先を押し当てた。股間を襲う激痛に正気を取り戻した二人は自分の股の間から夥しい血が噴き出し、其処に在るべきモノが無いことに気づいた。

目の前にはこれまで散々快樂を貪って来た女が自分の肉片を握り締め、魔女の様な笑いを浮かべているのに気付いて悲鳴を上げた。

二人は血の噴き出る股間を両手で押さえ、訳の分からない悲鳴を上げながら何処かに走り去ってしまった。

この有様に立ち塞がる大亜門戸会の男達の間に恐慌が走った。

自分達はこの女達から充分に恨みを受けており、ここでこの女達を殺さなければ、殺されるか、あの黒人兄弟の様に切り落とされてしまう一と、ほとんどヒステリー状態に陥った。突然の殴り込みを受けるという異常な状況下で、あの黒人たちの惨劇を目の前で見せられ、もう日頃の命令など頭から完全に消えていた。

「殺^キしてしまえ！」

男達が得物を手に一斉に襲い掛かった。

お竜と暁美は匕首で応戦し、青山とテツは激しく拳銃を乱射した。亜紀は身を挺して、娘達を背後に控えさせて守った。

激しい戦いの末、其^{そこ}処^{かしこ}彼^{そこ}処^{かしこ}に男達の死体が転がり、女達を襲って来る男の姿は何時の間にか消えていた。

地下通路を少し進んだ所で、お竜が壁を背にして両足を前に投げ出して、へたり込んでいた。

異常に気付いた暁美達がお竜の周りに集まった。

血の気を失った顔でしゃがみ込むお竜の腹のあたりの着物が数十センチに渡って切り裂かれており、夥しい血が噴き出し、手で傷口を押えていた。

少しでも身体を動かしたら内臓が飛び出してしまうためだろうと思われた。

脱出のための血路を開くため男達の群れの中に単身飛込み、重傷を負ったのだと分った。

「二つ龍のお竜姐さんも長年裸踊りばかりやってる内に錆び付いてしまったもんさね・・・あんななまくらヤッパを吞でしまうなんてさ・・・」と、自嘲的に呟いた。

「さあ、早くお逃げ！此处は私が守ってやるから・・・」

蒼い貌で皆を見回しながら言った。

「嫌よ！一緒に逃げましょう！」

暁美がお竜の身体を掴んで立たせようとした。

身体を動かせば辛うじて閉じている傷口が開いて腸が飛び出してしまう事を理解した青山が暁美の手を引いた。

「暁美、無理を言って困らせるんじゃないよ・・・お願い、アンタは生き続けて娘を守ってやって・・・」

お竜の真剣な目で見詰められ、「分ったわ・・・」と、応えた。

「お竜、これを使え・・・」

青山が手にしていた拳銃を渡した。

「有り難いねえ・・・こんな便利な物が在れば助かるよ・・・」

青山から拳銃を受け取りながら掠れた声を出した。

「お竜！お姉さん！」と、長年苦楽を共にし、実の姉の様に頼っていたお竜を一人残していくのに耐えられず、泣き叫ぶ暁美の腕を青山が強引に引いた。

地下通路に長く暁美の声が響き続けた。

「何だ？テツ・・・まだ居たのかえ？」

全員自分を置いて立ち去ったと思っていたのに、テツが残っているのに気付いて声を上げた。

「姐さん！姐さん！」と、年甲斐も無く目から涙を浮かべて立ち尽くしていた。

「馬鹿だね・・・早くお逃げ！」

「姐さん！一緒に残らせて下さい！」

と、泣き叫ぶように声を発すると、へたり込むお竜の横に並ぶように腰を降ろした。

お竜の臉に始めてテツと合った時の事が浮かんた。

それは、奈和親分の命令で生活費や何かの物品をお竜の暮らす妾宅に届けに来た時だった。まだ高校を中途退学をして目高組に入って来たばかりの頃で、少年らしさが抜けきらず、お竜を前にしてオドオドし足元ばかり見つめていたが、時々目を上げて眩しい物を見る様に見詰める姿が印象に残った。帰りに少しばかりのお駄賃と有り合わせの菓子を上げると嬉しそうに受け取る姿が蘇って来た。

それ以来、親分の用事で度々テツが訪ねて来る都度、自分を見詰める視線が気になっていたが、自分は奈和親分の愛人で、この若者については考えるべきではないと心を封じていたのだった。

「テツ、お前そんなにも私の事を思ってくれていたのかえ？」

お竜はテツの手を握った。

そして、握った手をそろそろと下腹の方に持って行った。

これまで遠くから叶わない思いを寄せるだけで手も触れたことの無い畏敬の女から手を握られてハッとしていた。

股を少し開いて着物の裾を開くと、テツの手を股間に誘った。

ソコは銀子から受けた肉体改造により何時でも男のモノを受け入れられるよう常時濡れそぼった女の秘裂であった。

指先が温かく湿るお竜の秘奥に触れてテツが驚いて声を上げた。

「私やね・・・アンタが思っているような女じゃないんだよ・・・」

テツの指先を自らの秘孔に誘う様にして、言葉を続けた。

「最早人間でも無いんだよ・・・私や、オ●ンコの穴で呼吸して、お尻の穴で飲み食いするバケモンに成ってしまったんだよ・・・」

ボロボロと涙を流し始めたテツの指先が愛液に満ちた肉の洞窟に沈むのを感じながら、「だから・・・こんなバケモンに何時までもかかずらわってちゃ駄目だよ・・・アンタもまだ若いんだから他に良い女^{ひと}を見つけて・・・」

此処まで口にした時、嗚咽するテツの唇がお竜の口を塞ぎ、次の言葉を封じた。

テツの情熱にほだされた様に、テツの舌を受け入れると、夢中で互いの舌を絡め合わせた。

地下道を逃げる暁美達の耳にパーン、パーンという乾いた音が木霊した。

黄原は剛沢を剛沢の私室まで追い詰めていた。

机の引き出しを開けて拳銃を取り出し、黄原に銃口を向けようとするより早く、黄原のガバメントが火を噴いた。

弾は過たず剛沢の右手を捉え、拳銃を握る手ごと手首からもぎ取った。

「諦めろ！・・・ステゴロをさせたら俺はアンタには敵わないが、ハジキを扱わせたら俺の方が上だ！」

続けて、引き金を引き、左手にも重傷を負わせ、更に両膝の骨を砕いた。

大型拳銃の銃弾を受け、最早立っている事が出来ず、仰^{あお}のけに床の上に崩れ落ちた。

「待ってくれ！黄原！ようやく俺の長年の夢が実現するんだ！お前も俺の夢に賛同しただろう・・・」

両手両足を失い床の上に横たわる剛沢が叫んだが、その声を封じる様に、

「アンタの夢なんて知らないさ・・・俺には銀」

と、そこまで言い掛けた時、部屋の奥から甲高い女の声で「死ね！」という声が響き、自分に向けられた銃口から炎が迸るのを感じた。

咄嗟に銃声の方を振り向き、反射的に引き金を引いた。銃弾が捉え、人が倒れるのを感じた。

「銀子！」腹からドクドクと血を流し、尻もちをつくように床に座り込む銀子の姿を目にして思わず叫び声を上げた。

床にしゃがみ込んだ銀子は尚も両手で銃を構え、「死ね！死ね！」と、ヒステリックに叫び引き金を引き続けた。黄原に向けて構えたりボルバーからは赤い発射炎が続けて上がった。違和感を覚えた黄原は正面から銀子に近づき、黄原に銃口を向けるリボルバーを掴むと、強張る銀子の指を一本一本剥がして銃を奪った。

そして、奪った銃を手に、床に仰向けに倒れ伏す剛沢の傍に寄った。

銃を手に自分に近づいて来る黄原の姿を目にして、「止せ！黄原、止せ！」と、怯えて叫んだ。

黄原は無言で、身動きの付かない剛沢の耳元にリボルバーを押し当てる様にして、引き金を引いた。

轟音と共に発射炎が吹き上がった。

間近から発射された銃口からの衝撃波で鼓膜を引き裂かれ、剛沢は意識を失った。ただそれだけだった。本来なら銃弾は剛沢の頭蓋骨を貫き絶命する筈であった。

全て空砲であった。銃には実弾は込められていなかった。

銃を捨てると仰向けに床に横たわる銀子の傍に寄った。

「銀子！何故こんなまねをした？」

「ごめんなさい・・・貴方の手で殺されたかったの・・・」

瀕死の重傷を負い、血の気の失せた顔で切れ切れに答えた。

「銀子！傷は浅い！直ぐ病院に連れて行くから、しっかりするんだ！」

横たわる銀子を抱きかかえようとしながら声を上げた。

「嘘よ・・・貴方は私がもう助からない事を知っているくせに・・・」

銀子の言う通りであった。これまで数々の修羅場を潜り抜けて来た黄原には、銀子の傷が最早手の施しようの無い事は明らかに分かっていた。

「ごめんなさい・・・剛沢に自分の言う事を聞かないと・・・刑務所内の自分の部下に貴方を殺させる・・・と脅されて、従うしか無かったの・・・」

「いいんだ！銀子！」

「ごめんなさい・・・折角貴方に助けられたのに、又元の生活に戻ってしまったわ・・・」

「言うな！銀子！」

「ねえ・・・こんなに汚れに汚れてしまった私だけど・・・まだ愛してくれる？」

と、苦しそうに息を吐きながら、横たわったまま短いスカートをそろそろと捲り上げた。スカートの下には何も身に着けておらず、レーザー脱毛されて飾り毛を失い剥き出しとな

った白い肉の割れ目が黄原の目に映った。

それは監獄に繋がれている間、何度も夢に見た大切な宝物であった。

黄原は憑かれたように身体を重ねて行った。

「嬉しい・・・貴方に抱かれながら死んで行けるなんて・・・」

黄原の見つめる銀子の顔には苦痛の表情は無く、幸せそうな笑顔が浮かんだ。

銀子と身体を重ねながら、銀子の身体から力が抜けていくのを感じていた。

銀子の上に身体を預けたまま、銀子！銀子！と泣き叫び続けた。

黄原のモノを優しく包んでいる生肉が次第に熱を失っていくのを感じていた。

「銀子、お前も今まで辛い事ばかりだったろう・・・これで楽になれるんだね。俺も後から行くからね・・・」と、心の中で呟き、銀子の唇に自分の唇をそっと重ねた。

命無き銀子の身体の上に身体を被せたまま黄原は動くことは無かった。

炎は間近まで迫っていた。

炎に追い立てられるように、青沼と暁美、そして亜紀と三人の娘達は出口を求めて建物内を彷徨った。

三人の娘達は、自然と暁美より長年母と慕った亜紀に従い、亜紀の腰に縋りつくように逃げていた。青沼の強い男の力で引かれる暁美と、恐怖に慄く娘達に腰にへばり付かれ、歩みが遅れる亜紀の間には次第に間隔が開き始めていた。

その時、両者の間を分ける様に天井から炎と共に燃え上がる梁がガラガラと落下した。

「愛美ー！」暁美が燃え上がる炎に向かって手を伸ばした。

激しい炎は視界を遮り、娘達の生死は知ることが出来なかったが、炎に飛び込み助け出すことは不可能であった。

「諦めるんだ！」青山が泣き叫ぶ暁美の手を強く引いた。

黒川組

「あの時は本当に死ぬかとおもったぜ！正に九死に一生ってやつだ！」

焼け落ちる大亜門戸会の本部から無事逃げおおせた黒川が自分の組事務所のソファに達磨の様に肥満した身体を預けながら叫ぶように言った。

黄原による殴り込みの翌日となっていた。

剛沢の死と大亜門戸会の崩壊を確認した黒川が無事生還できた奇跡に感謝するように大声を上げていた。

何本かの毛が横に走るだけの剥げた頭や顔には赤い火傷の跡が残り、後ろに立った子分が葉を染込ませたガーゼを当てていた。

「あの時は命懸けだったけど、こんな良い拾い物をするとは思わなかったぜ！」

目の前に腰を落とす女達をジロジロと見つめながら嬉しそうに叫んだ。

黒川の腰を降ろすソファの前に敷かれた絨毯の上には上半身に縄掛けされた亜紀と三人の娘が腰を降ろしていた。

炎の中を逃げまどっていた四人は、偶然逃げる黒川達と鉢合わせして、そのまま無理やり黒川組まで連れて来られたのであった。

「俺は剛沢の様に日本中の暴力団の上に立とうなんて大それた考えは無い。精々こいつらの身体を使って稼がせてもらうぜ。女郎屋をやらせれば俺の方が剛沢より上だ！」

大亜門戸会の下部組織として剛沢に仕えていた頃は、ヘコヘコと腰を低くしてゴマを播っていた黒川であったが、大亜門戸会と剛沢の軛が無くなり、恐れる者の居なくなった今は、公然と‘剛沢’と呼び捨てにしていた。

「そう言えば、百花と芽衣という若い愛人も居たな。彼女奴等も剛沢からそれなりに鍛えられている様だから売春婦にすれば即戦力だ！彼女奴等も一早く逃げ出した様だから探して連れてこい！」と、傍らに侍る部下に命令した。

命令を受けた黒スーツ姿の男がハッと、返事した。

再び悪鬼の手に落ちた不運に俯く亜紀の顔を見ながら、「剛沢の愛人達が男を夢中にする能力をお持ちなのは、其処の亜紀姐さんを見れば証明済みだ！卒業した愛人達の居所も大体分かっている。そいつらを駆り集めて女郎屋を開くのも悪くは無いな！剛沢の愛人同士の同窓会だ！」と笑い上げた。

「ただ、遊び慣れた金満家の相手をさせるには、まだまだ中途半端だな・・・だが、調教の途中で銀子は死んでしまったしな・・・もう少し身体を鍛えなければ満足して大金を払って貰えないのだが・・・」と、考え込む様子を見せた。

「銀子を調教した最後の女体調教師と言われた『鬼の蔵源』こと蔵田源一郎も三年前に癌でポックリ逝ってるしな・・・」

捉えた女達の肉体改造をする適切な女体調教師を頭の中で浮かべていた。

そうだ！と口にして手をポンと打った。

「綺麗囃(キララ)という芸名の花電車のパバアが居たな！今は年を取って引退して、佐倉の田舎に引っ込んでしまったという話だが、自分の技術を後世に伝えたいとか言っていたな、まだまだ若い者の調教ぐらいできるだろう」と、淫惨な笑みを浮かべて、怯える亜紀や三人の娘をジッと見詰めた。

哀哭の代紋 完

最後の代紋に続く